

平成 27 年度

日本大学学位論文

ステレオタイプ抑制における代替思考の役割と個人差

日本大学大学院文学研究科

心理学専攻博士後期課程

山 本 真 菜

目 次

本論文の概要と構成	1
第 I 部 序論	6
第 1 章 ステレオタイプ研究の概観	7
1.1 ステレオタイプ	8
1.2 ステレオタイプ化	8
1.3 ステレオタイプ形成のメカニズム	9
1.4 ステレオタイプの変容	10
1.5 ステレオタイプの内容	12
1.6 ステレオタイプ化の分離モデル	14
第 2 章 ステレオタイプの抑制	16
2.1 ステレオタイプ抑制による逆説的効果	17
2.2 逆説的効果のメカニズム	18
2.3 逆説的効果の低減方略：代替思考	20
2.4 ステレオタイプ抑制における代替思考	22
第 3 章 ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差	27

3.1	逆説的効果の個人差	28
3.2	非優位ステレオタイプの特性の使用しやすさにおける個人差	29
3.3	対人認知における認知的複雑性：多次元的な認知構造	30
第Ⅱ部 実証研究		34
第4章	ステレオタイプ抑制における対象集団に関連する 代替思考の役割の検討	35
4.1	研究1：非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての役割 —サブタイプに関する特性を用いた検討—	37
4.1.1	問題	37
4.1.2	方法	38
4.1.3	結果	43
4.1.4	考察	47
4.2	研究2：非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての役割 —優位ステレオタイプの判断の顕在的測定 による検討—	51
4.2.1	問題	51
4.2.2	方法	52
4.2.3	結果	57
4.2.4	考察	62
4.3	研究3：非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての役割 —優位ステレオタイプの特性に対する	

5.3.1	問題	113
5.3.2	方法	114
5.3.3	結果	117
5.3.4	考察	120
5.4	研究7：認知的複雑性による逆説的効果の違い	
	—優位ステレオタイプの特性に対する	
	アクセス可能性の潜在的測定による検討—	124
5.4.1	問題	124
5.4.2	方法	125
5.4.3	結果	129
5.4.4	考察	135
5.5	第5章のまとめ	142
第Ⅲ部	総合考察	144
第6章	本論文における実証研究の結果の概要	145
6.1	対象集団に関連する代替思考の役割	146
6.2	逆説的効果の個人差	150
第7章	本論文の意義と今後の展望	154
7.1	ステレオタイプ抑制研究に与える示唆	155
7.2	実際的な意義	157
7.3	今後の展望	159

第 8 章 結論	161
引用文献	163
謝 辞	175

本論文の概要と構成

本論文では、ステレオタイプ抑制による逆説的効果を低減することができる代替思考の内容と、その代替思考の利用しやすさの個人差について検討した。本論文は、第Ⅰ部の序論、第Ⅱ部の実証研究、第Ⅲ部の総合考察で成り立っている。

第Ⅰ部は、第1章から第3章で成り立っており、本論文が扱う問題について述べた。

第1章では、まず、ステレオタイプに関する用語の定義を行い、ステレオタイプがどのように形成されまた変容するかのメカニズムを説明し、ステレオタイプの内容に関する研究を紹介した。さらに、ステレオタイプ化には自動的な過程と統制的な過程があるが、統制的な過程において意識的にステレオタイプを統制できたとしても、それに伴う問題点があることを述べた。

第2章では、ステレオタイプの意識的な統制であるステレオタイプ抑制を取り上げ、その弊害である逆説的効果について述べた。ステレオタイプ抑制の弊害である逆説的効果を扱った研究について紹介し、逆説的効果のメカニズムを説明した。さらに、逆説的効果を低減するための方略として抑制中の代替思考を扱った先行研究のレビューを行い、ステレオタイプ抑制における有効な代替思考として、対象集団に対する当てはまりの程度が相対的に弱い非優位ステレオタイプ的特性を提案した。優位ステレオタイプを抑制する際に、非優位ステレオタイプ的特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいという仮説を立てた。

第3章では、ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差について述べた。まず、逆説的効果の個人差に関する先行研究を紹介し、非優位ステレオタイプ

的特性の利用しやすさの個人差が逆説的効果に関係している可能性を提示した。非優位ステレオタイプの特性の利用しやすさの個人差の背後にある認知的特性のひとつとして認知的複雑性があることを提案し、認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいという仮説を立てた。

第Ⅱ部は、第4章から第5章で成り立っており、第Ⅰ部で述べた仮説を検証するために行った7つの実証研究を紹介した。

第4章は、研究1から研究3で成り立っており、優位ステレオタイプを抑制する際の、対象集団の非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての役割を検討した。

研究1では、非優位ステレオタイプの特性のひとつとしてサブタイプに関する特性を用いた。サブタイプは、ステレオタイプに一致しない成員からなる下位集団であり、対象集団のなかの少数の成員にしか当てはまらないと考えられるため、非優位ステレオタイプの特性に当てはまると考えられる。サブタイプに関する特性を用いて、代替思考としての有効性を検討した。その結果、サブタイプに関する特性を代替思考として使用すると、逆説的効果が低減されにくいことが示された。この結果は仮説とは逆のものである。しかし、事後的な調査によって、研究1で使用された代替思考の内容は、反ステレオタイプの特性であったことが示された。事後的な調査の結果を踏まえると、研究1の結果は、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されにくいという可能性を示唆している。

研究2と研究3では、対象集団に対する当てはまりの程度を直接測定して、非優位ステレオタイプの特性を選定し、その代替思考としての有効性を検討した。

研究 2 では、優位ステレオタイプの判断を顕在的に測定することによって、非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性を検討した。その結果、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、逆説的効果が低減されやすいことが示された。

研究 3 では、顕在的な判断の背後にある認知的メカニズムを検討するために、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定した。研究 3 では、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合と比較し、さらに、非優位ステレオタイプの特性の非優位性によって代替思考としての役割が異なるかどうかを探索的に検討した。具体的には、非優位ステレオタイプの特性のなかでも当てはまりの程度が相対的に強い上位の非優位ステレオタイプの特性と、相対的に当てはまりの程度が弱い下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考とする条件を設けた。その結果、上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、単純に抑制する場合、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合、下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合に比べ、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が低いことが示された。この結果から、上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、抑制対象である優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりにくいいため、逆説的効果が低減されやすいことが示唆された。

第 5 章は、研究 4 から研究 7 で成り立っており、優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差を検討した。第 4 章では、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、逆説的効果が低減されやすいことが示されたが、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性には個人差があると考えられる。そこで、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差と逆説的効果との

関係を検討し、さらに、この非優位ステレオタイプ的特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的特性のひとつとして認知的複雑性を取り上げ、認知的複雑性と逆説的効果との関係を検討した。

研究 4 では、非優位ステレオタイプ的特性の利用可能性と優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果の関係を検討した。その結果、非優位ステレオタイプ的特性の利用可能性が高い個人ほど、逆説的効果が生じにくい可能性が示された。

研究 5 では、非優位ステレオタイプ的特性の利用可能性の個人差と、この個人差の背後にある認知的特性である認知的複雑性との関係を検討した。その結果、非優位ステレオタイプ的特性の利用可能性が高い個人ほど認知的複雑性が高い可能性が示された。

研究 6 と研究 7 では、認知的複雑性による逆説的効果の差異を検討した。

研究 6 では、優位ステレオタイプの判断を顕在的に測定することによって、認知的複雑性による逆説的効果の差異を検討した。その結果、認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいことが示された。

研究 7 では、顕在的な判断の背後にある認知的メカニズムを検討するために、優位ステレオタイプ的特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定することによって、認知的複雑性による逆説的効果の差異を検討した。その結果、認知的複雑性が高い個人は、優位ステレオタイプ抑制を行った場合と行わなかった場合で、優位ステレオタイプ的特性に対するアクセス可能性に差はなかったが、認知的複雑性が低い個人は、優位ステレオタイプ抑制を行った場合は、行わなかった場合に比べ、優位ステレオタイプ的特性に対するアクセス可能性が高いことが示された。この結果から、認知的複雑性が高い個人は、優位ステレオタ

イブ抑制を行う際に、非優位ステレオタイプ的特性を代替思考として使用しやすいので、優位ステレオタイプ的特性に対するアクセス可能性が高まりにくく、逆説的効果が生じにくいことが示唆された。

第Ⅲ部は、第 6 章から第 8 章で成り立っており、第 I 部と第 II 部を踏まえて総合的に考察した。

第 6 章では、研究 1 から研究 7 で得られた知見をまとめて、ステレオタイプ抑制による逆説的効果を低減できる代替思考の内容と、逆説的効果を低減できる代替思考の利用しやすさの個人差について考察した。

第 7 章では、本論文の意義として、ステレオタイプ抑制の研究における示唆と実際的な意義を述べ、最後に本論文の展望を述べた。

第 8 章では、本論文の結論を述べた。

第 I 部 序論

第 I 部は、第 1 章から第 3 章で成り立っており、本論文が扱う問題について述べた。

第 1 章では、ステレオタイプ研究の概観を紹介し、最後に、ステレオタイプ化の際に意識的にステレオタイプを統制することができても、それに伴う問題点があることを述べた。

第 2 章では、ステレオタイプの意識的な統制であるステレオタイプ抑制を取り上げ、その弊害である逆説的効果について述べた。逆説的効果の低減方略として抑制中の代替思考を扱った研究を紹介した。先行研究を踏まえて、ステレオタイプ抑制における有効な代替思考として非優位ステレオタイプの特性を提案し、有効な代替思考について仮説を立てた。

第 3 章では、ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差について述べた。第 2 章では、有効な代替思考として非優位ステレオタイプの特性があることを述べたが、その利用可能性には個人差がある可能性を説明した。まず、逆説的効果の個人差に関する先行研究を紹介し、認知的個人差として非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が逆説的効果に関係している可能性を提示した。この非優位ステレオタイプの特性の個人差の背後にある認知特性のひとつとして認知的複雑性があることを提案し、逆説的効果の個人差について仮説を立てた。

第1章 ステレオタイプ研究の概観

第1章では、ステレオタイプに関する用語を紹介し、ステレオタイプ形成のメカニズムやステレオタイプの変容メカニズムについて説明した。さらに、ステレオタイプ化には自動的段階と統制的段階があるが、統制的段階において意識的にステレオタイプを抑制することに伴う問題点があることを述べた。

1.1 ステレオタイプ

ステレオタイプとは、ある集団やその集団に所属する成員に対する固定概念である。我々は、「女性は感情的である」とか「黒人は攻撃的である」といった共通したイメージをもっていることがある。ステレオタイプという言葉は、元は印刷用の原版から取り出される鉛版を表す言葉であった。ステレオタイプが初めて上で述べた意味で用いられたのは、アメリカのジャーナリストであるリップマンが著した『世論』（1922）である。

ステレオタイプ、偏見、差別は異なる概念として定義されている。ステレオタイプは、ある社会的集団やそれに属する成員の属性に関する人々の信念であり、偏見は、ある対象に対する好き嫌いの評価を伴う態度であり、差別は、ある社会的集団の成員に対して行う否定的な行動である。ある社会的集団に対するステレオタイプに基づいて、その社会的集団に対する偏見をもったり、差別行動を行ったりする（岡，1999）。

1.2 ステレオタイプ化

ステレオタイプは、繰り返し想起して使用することによってその利用が自動化される（Bargh, 1990, 1999; Bargh & Barndollar, 1996）。そのため、対象に接触するとステレオタイプは自動的に活性化されてしまう（Devine, 1989）。例えば、ある人を人種、民族、職業、性別などの属性に基づいて自動的に判断してしまうのである。社会的集団に対するステレオタイプをもつことによって、その集団について素早く判断することができるため、効率の良い対人認知や他

者との相互作用を行うこともできるが (Macrae & Bodenhausen, 2000), ステレオタイプに基づいた判断は、個人の個性や能力を無視して型に当てはめてしまう。このような判断は、偏見や差別に繋がると考えられる。

1.3 ステレオタイプ形成のメカニズム

ステレオタイプの基礎となる認知過程としてカテゴリー化の過程があることが指摘されている (e. g., 久保田, 1999)。Tajfel (1969) は、ある社会的カテゴリーとある属性に、ある程度関連がみられるとき、その関連を極端に認知しやすいことを示している。例えば、民族集団と身長にはある程度関連がみられ、日本人とスウェーデン人を比較すると、日本人は相対的に身長が低い人が多く、スウェーデン人は相対的に身長が高い人が多い。この場合、すべての日本人は身長が低く、すべてのスウェーデン人は身長が高いといったように同じカテゴリーに属する人すべてが共通の属性をもっているといったイメージがステレオタイプの基礎となる。

カテゴリー化の過程で生じる効果に、同化効果と対比効果がある (Tajfel & Wilkes, 1963)。2つの集団が存在する状況において、同じ集団に所属する成員の差異を過少に知覚し (同化効果)、異なる集団に所属する成員の差異を過大に知覚する (対比効果) ことによってステレオタイプが形成されることが示唆されている。例えば、Manis, Nelson, & Shedler (1988) は、他者を判断するとき、その他者が所属する集団の中心傾向 (例えば、特性や性質についての集団成員の平均) に影響を受けることを示しており、佐久間・岡 (1999) は、ある集団の成員情報が増えるにしたがいその集団の中心傾向が形成され、中心傾向に接近した成員情報が中心傾向に同化するために、集団内での変動性が小さく

知覚されることを示唆している。また、Krueger, Rothbart, & Sriram (1989) は、ある集団の成員情報が、別の集団の中心傾向と対比されることによって、集団間での中心傾向の差異が過大に知覚されることを示している。

このように、異なる集団に属する対象を極端に異なるものとして知覚し、同じ集団に属する対象を類似したものとして知覚する。このような過程から、ステレオタイプが形成されると考えられている。

1.4 ステレオタイプの変容

ステレオタイプの変容のメカニズムについて、初期の研究では、接触仮説が提唱されている。ステレオタイプを低減するには、多数派集団と少数派集団が対等な地位で共通の目標をもって接触することが重要であると考えられている (Allport, 1954)。

しかし、ステレオタイプに一致しない成員に接触しても、ステレオタイプが変容しない場合がある。ステレオタイプに一致しない成員は、その集団から切り離して知覚されるため、それらの成員は新しい下位集団 (サブタイプ) を形成することが示されている (Mauer, Park, & Rothbart, 1995; Weber & Crocker, 1983)。この認知的メカニズムはサブタイプ化と呼ばれ、サブタイプ化の生起に影響する要因として次の2つが指摘されている (Zoë & Hewstone, 2001)。

第一に、ステレオタイプに一致しない成員に関する情報の提示方法である。ステレオタイプに一致しない情報を同じ数だけ提示する際に、それらの情報が多くの個人に分散しているときよりも、特定の個人に集中しているときの方が、サブタイプ化は生起しやすいことが示されている (Hewstone, Macrae, Griffiths, Milne, & Brown, 1994; Jonston & Hewstone, 1992; Johnston,

Hewston, Pendry, & Frankish, 1994)。

第二に、知覚者の認知資源である。サブタイプ化は、新しい下位集団を形成することであるため、認知資源が必要になる。そのため、認知資源が十分にある場合にサブタイプ化が生起しやすいと考えられている (Moreno & Bodenhausen, 1999; Yzerbyt, Coull, & Rocher, 1999)。

このように、状況によっては、ステレオタイプに一致しない外集団成員に接触してもステレオタイプは維持されたままであることが指摘されている。以下では、ステレオタイプの低減につながる接触方法を挙げる。

まず、非カテゴリー化がある。個人化された接触を繰り返すと、ステレオタイプに不一致な情報に接する機会が増えるので、カテゴリーが意味をなさなくなり、使用されにくくなると考えられている (Brewer & Miller, 1984)。

次に、再カテゴリー化がある。複数の集団を包括するような上位のカテゴリーに注目することで、元は外集団成員であった相手を内集団成員として認識し、ステレオタイプの判断をしにくくなると考えられている (Gaetner, Mann, Murrell, & Dovidio, 1989)。

次に、交差カテゴリー化がある。現実社会においては、人は様々なカテゴリーに属しているが、状況によってどのカテゴリーを強く意識しているかは異なることがある。あるカテゴリーの顕現性を低下させるためには、別のカテゴリーを意識させたり、カテゴリーを分断する様に別のカテゴリーでの役割を意識させる方法がある。新たなカテゴリー化によって元は外集団成員であった個人を個人化してみる機会が生じ、バイアスが低下するといわれている (Markus-Newhall, Miller, Holtz, & Brewer, 1993)。

最後に、個人の動機によっても、ステレオタイプの判断をしにくくなることが示されている。人は、相手の結果によって自分の利益が異なる場合は、相手

の情報に注目するようになる (Ruscher & Fisk, 1990)。つまり、自分にとって、相手が重要な人物であったり、相手に対する関心が高い場合には、相手の個人的な属性に注意を向ける。そして、カテゴリーを越えて個人的な属性に注意を向けることで、ステレオタイプの判断をしにくくなるのである (Fisk & Neuberg, 1990)。特に、相互に依存し、相互にコントロールするような相互依存的な状況では、相手に対する注意が高くなり、さらに、相手を正確に判断しようという動機づけも強くなるので、カテゴリーに基づくステレオタイプの判断が少なくなると考えられている (Neuberg & Fisk, 1987)。

内集団成員は個人として認識されるが、外集団成員は皆同じような人物であると認識され、ステレオタイプの判断されやすいという理論に基づく、ステレオタイプ化を完全に取り除くことは難しいと考えられる。しかし、現実社会には様々なカテゴリーが存在するので、以上で示したように、カテゴリーを変化させることによって、ステレオタイプを低減することができると考えられる (上瀬, 1999)。

1.5 ステレオタイプの内容

ステレオタイプの内容に関するモデルにステレオタイプ内容モデルがある。ステレオタイプ内容モデルでは、ステレオタイプの内容は、人柄 (温かさ) と能力の二次元から構成されていると想定されている (Fisk & Cuddy, 2006; Fisk Cuddy, & Glick, 2007; Fisk, Cuddy, Glick, & Xu, 2002)。多くのステレオタイプは一方の次元の評価が高いと他方の次元の評価が低いという両面価値的な内容になっており、温かさは競争性の知覚によって規定され、能力は地位の知覚によって規定されると考えられている。一般的に、資源が限られている世界に

において、外集団は、自分達の資源を最大にする意図があると知覚され、内集団に対してネガティブな意図を持っていると知覚される。そのため、競合する集団は、協力関係にある集団に比べ、冷たいと判断される。一方、地位は、集団が保有する資源の量の指標である。したがって、それらの資源をコントロールするその集団成員の能力の指標といえる。そのため、地位の高い集団は、地位の低い集団に比べ、より有能であると知覚される。

さまざまな集団に対するステレオタイプの内容が研究されているが、そのなかでも、ジェンダー・ステレオタイプは日本においても強く持たれていることが指摘されている（伊藤，1978）。ジェンダー・ステレオタイプの内容は、男性は高い作動性（例えば、有能さ）をもつが共同性（例えば、温かさ）が低く、逆に、女性は高い共同性をもつが作動性が低いという伝統的ステレオタイプがあるとされている（沼崎・小野・高林・石井，2006；Rudman,Greenwald, & McGhee, 2001）。

女性に対するステレオタイプには、非伝統的な女性に対する敵意的なステレオタイプと伝統的な女性に対する慈悲的なステレオタイプの2つの形態があることが両面価値的性差別理論では提唱されている。ステレオタイプ内容モデルに基づくと、伝統的な女性は「無能だが、温かい」とステレオタイプ化され、慈悲的な偏見の対象になり、非伝統的な女性は「有能だが、冷たい」とステレオタイプ化され、敵意的な偏見の対象になる（Glick & Fisk, 1996, 2001a, 2001c）。こうしたステレオタイプは日本においても示されている（高林，2007）。

ネガティブなステレオタイプは、社会的に問題にされているが、ポジティブなステレオタイプも偏見の維持に寄与しているという主張がある。「温かいが無能」という伝統的な女性や高齢者に対するステレオタイプは、温かいというポジティブなステレオタイプによってその集団をそのままの地位に押しとどめ、

偏見を維持する結果になることが指摘されている (Fisk & Cuddy, 2006; Fisk et al., 2007; Fisk et al., 2002; Glick & Fisk, 2001b)。

ポジティブなステレオタイプであっても偏見の維持に寄与していることから、ステレオタイプのネガティブな面だけでなく、ポジティブな面も取り上げることが重要であると考えられる。

1.6 ステレオタイプ化の分離モデル

分離モデルは、ステレオタイプ化を自動的な反応と統制的な反応の 2 段階に分けて説明するモデルである (Devine, 1989)。まず、自動的な段階では、ステレオタイプに関する手がかりに接触すると、ステレオタイプが活性化され利用されやすい状態になる。この段階は、意識的に統制できない自動的な過程であるといわれている。次に、統制的な段階では、ステレオタイプが思考上に浮かんでいることを認識して、判断や行動を決定する。この段階は、意識的に統制できる過程であるといわれている。

このモデルによれば、たとえ平等主義者であっても、ステレオタイプの手がかりに接触するとステレオタイプが活性化されてしまう。つまり、偏見が低い人も、偏見が高い人と同じくらいステレオタイプが活性化されることが示されている (Devine, 1989)。偏見が低い人は、統制的な反応の段階で、社会的規範に基づいてステレオタイプを使わないようにしているのである。

しかし、他者を偏見のないように判断するために、ステレオタイプを表出しないように努力することには弊害が指摘されている。ステレオタイプを考えないように努力するとかえってその内容が思考上に浮かんでしまうという逆説的効果がある (e.g., Macrae, Bodenhausen, Milne, & Jetten, 1994; Monteith,

Sherman, & Devine, 1998)。次の第2章では、ステレオタイプを意識的に統制することによる弊害である、逆説的効果について述べる。

第2章 ステレオタイプの抑制

第2章では、ステレオタイプの意識的な統制であるステレオタイプ抑制を取り上げ、その弊害である逆説的効果について述べた。まず、ステレオタイプ抑制による逆説的効果を扱った研究について紹介し、逆説的効果のメカニズムを説明した。さらに、逆説的効果の低減方略として抑制中に代替思考を利用する方略があることを紹介し、抑制中の代替思考を扱った先行研究のレビューを行った。先行研究を踏まえ、ステレオタイプ抑制における有効な代替思考として対象集団に対する当てはまりの程度が相対的に弱い非優位ステレオタイプの特性を提案し、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいという仮説を立てた。

2.1 ステレオタイプ抑制による逆説的効果

ある対象について意図的に考えないようにする努力やその過程は、思考抑制と呼ばれている。社会生活では、一般的に、個人の個性や能力を無視するステレオタイプに基づいた判断は避けるべきであり、そのため、人々は自動的に活性化されるステレオタイプを抑制しようと努力する場合がある。

しかし、ステレオタイプ抑制を行うことによる弊害が報告されている。ステレオタイプを抑制すると、抑制対象がかえって活性化することが示されている (e.g., Macrae et al., 1994; Monteith et al., 1998)。抑制対象がかえって活性化してしまうという現象は、バイアスのない判断を目的としているステレオタイプ抑制において反意図的な影響であり、注目すべき現象であるといえる。このような抑制の反意図的な効果は、逆説的効果と呼ばれている。

思考抑制による逆説的効果は多くの研究で示されている。Wegner, Schneider, Carter, & White (1987) は、「白くま」を考えないようにと教示された参加者は、抑制の教示がされなかった参加者に比べ、その後「白くま」に関する思考が思考上に浮かんだ数が多かったことを示した。この他にも、逆説的効果はさまざまな抑制対象で生じることが示されている。例えば、緑のウサギ (Clark, Ball, & Pape, 1991)、白ねずみ (木村, 2005)、ストーリー (木村, 2004b) などの中性刺激、個人的な問題 (木村, 2004a)、火災のフィルム (Davies & Clark, 1998)、特定の特性 (Newman, Duff, Hedberg, & Blistein, 1996)、ムード (Wegner, 1994b)、急性ストレス患者の事故の記憶 (Harvey & Bryant, 1998) など、さまざまな抑制対象で生じることが示されている。

逆説的効果は、ステレオタイプの抑制においても多くの研究で実証されている (e.g., Macrae et al., 1994; Monteith et al., 1998)。例えば, Macrae et al.

(1994) では、スキンヘッドの人物の一日を記述するとき、ステレオタイプのな記述をしないようにというステレオタイプ抑制の教示を与えられた参加者は、そのような教示を与えられなかった参加者に比べ、その後に別のスキンヘッドの人物の一日を記述する課題でその文章の内容がよりステレオタイプのであり (実験 1)、スキンヘッドの人物からの物理的距離がより遠くなり (実験 2)、スキンヘッドに対するステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高い (実験 3) という逆説的効果が確認された。バイアスのない判断を目的として行うステレオタイプ抑制による逆説的効果は、ステレオタイプ抑制の弊害であるといえる。

思考抑制による逆説的効果は、抑制の段階によって分けて考えられる場合がある。抑制中に抑制対象やそれに関連する思考が侵入することは「即時的増強効果」と呼ばれ、抑制を止めた後に、抑制を行っていない場合よりも抑制対象に関する思考が増える現象は「リバウンド効果」と呼ばれている。

2.2 逆説的効果のメカニズム

思考抑制による逆説的効果が生じるメカニズムを説明するために、さまざまなモデルが提案されている。心的疲労による説明 (Gordijn, Hindriks, Koomen, Dijksterhuis, & Van Knippenberg, 2004; Muraven, Tice, & Baumeister, 1998)、動機づけによる説明 (Förster & Liberman, 2001; Liberman & Förster, 2000)、認知過程による説明 (Wegner, 1994a; Wegner & Erber, 1992) などである。

まず、心的疲労による説明について述べる。この説明によると、抑制という努力による制御資源の枯渇によって、逆説的効果が生じると考えられている。Gordijn et al. (2004) は、人の制御資源は有限であるため、抑制を行うと制御資

源が枯渇して、持続的に抑制を行うことができなくなることを示している。具体的には、スキンヘッドの人物の一日を記述するときに、ステレオタイプの判断をしないようにという教示があった群は、そうした教示がされなかった統制群に比べ、その後に行ったばらばらに並んだ 5 文字を並び変えて意味のある単語に並び変えるというアナグラム課題の成績が低いという結果が示された。この結果から、ステレオタイプ抑制を行うと、認知資源が枯渇すると考えられる。すなわち、人の制御資源は有限であり、制御資源が枯渇すると持続的に抑制を行うことができなくなることを示唆している。

次に、動機づけによる説明について述べる。この説明では、抑制に対して困難さを感じることに抑制の失敗の原因を、抑制対象の使用意欲に帰属することによって、逆説的効果が生じると考えられている (Förster & Liberman, 2001; Liberman & Förster, 2000)。つまり、抑制対象が思考上に浮かんでしまうのは、その対象を表出したいという動機があるからだと推測する。この動機の推測によって、抑制対象に対するアクセス可能性が高まり、逆説的効果が生じるといわれている。

次に、認知過程による説明について述べる。この説明は、皮肉過程理論と呼ばれ、思考抑制による逆説的効果のメカニズムとして最もよく引用される理論である (Wegner, 1994a; Wegner & Erber, 1992)。本論文で用いる理論的枠組みは、この認知過程による説明に基づいている。皮肉過程理論では、思考の抑制は 2 つの認知過程によって行われていると考えられている。想定されている 2 つの認知過程は、実行過程と監視過程であり、実行過程は抑制対象以外の対象を探る過程であり、監視過程は思考上に抑制対象がないことを確認する過程である。実行過程は意識的に行われる認知資源を必要とする過程であり、監視過程は無意識的に行われる認知資源を必要としない過程である。監視過程は、実行過程

によって探し出された思考が抑制対象でないことを確認しているため、監視過程によって抑制対象は常に参照されていることになる。このため、抑制対象は常に活性化され続けそのアクセス可能性は高まり続けていることになり、逆説的効果が生じると考えられている。すなわち、実行過程が十分に働いている間は、思考上に抑制対象が浮かばないが、実行過程は認知資源を必要とする過程であるため、認知資源が消耗するのに伴って、十分に働き続けることができなくなる。実行過程が十分に働かなくなると。監視過程によって活性化され続けアクセス可能性が高まった抑制対象が、抑制前よりも思考上に浮かびやすくなると考えられている。

Macrae et al. (1994) は、抑制を止めた後も、抑制対象へのアクセス可能性がなぜ高まったままであるかを、頻用性プライミングという概念を用いて説明している。頻用性プライミングとは、ある概念が頻繁に活性化されることであり、その結果、その概念に対するアクセス可能性が非常に高くなることが示されている (Higgins, 1989; Higgins, Bargh, & Lombardi, 1985; Higgins & King, 1981)。抑制中に、監視過程によって頻用性プライミングが生じるため、抑制を止めた後も抑制対象へのアクセス可能性が高いままであり、ステレオタイプの判断がされると考えられている。

2.3 逆説的効果の低減方略：代替思考

逆説的効果の低減方略として、代替思考を利用する方略の効果の検討がされている。例えば、Wegner et al. (1987) は、「白くま」について考えることを抑制する際に、代替思考として「赤のフォルクスワーゲン」を考えると、単に抑制するだけの場合よりも、抑制後にかえって「白くま」について思い浮かんでし

まうという逆説的効果を低減できることを示した。

しかし、代替思考の内容によっては、逆説的効果を低減できない場合もある。抑制中の侵入思考を扱った木村（2004a）の実験1では、過去の苛立った出来事を抑制するとき、代替思考として次の3つを用いて抑制を行った。それらは、中性単語、抑制事象に関連しその見方に変化を促すようなことわざ、視覚的に利用可能な思考であった。具体的には、中性語として「白ねずみ」、抑制事象に関連しその見方に変化を促すようなことわざとして「旅は道連れ世は情け」、視覚的に利用可能な思考として「実験が行われた教室の教室番号」が用いられた。その結果、ことわざと視覚的に利用可能な思考を用いた場合には、単純に抑制を行った場合に比べ、抑制中の侵入思考数が少なかった。しかし、中性語を代替思考に用いた場合には、単純に抑制した場合と侵入思考数に差はみられず、中性語は逆説的効果を低減しにくいことが示された。この実験は、逆説的効果のなかでも即時的増強効果を扱ったものであるが、代替思考が必ずしも逆説的効果を低減できるわけではないことを示している。

代替思考が逆説的効果を低減できるかどうかは、その利用しやすさの違いによると考えられる。抑制対象に関連することわざは、抑制対象に関連するものであるため利用しやすい代替思考であり、視覚的に利用可能な思考も、常に見ることができるため利用しやすい代替思考であると考えられる。一方、これらの代替思考に比べ、中性語として用いられた白ねずみは利用しにくい代替思考であると考えられる。つまり、代替思考が利用しやすい、すなわち、代替思考のアクセス可能性が高い場合には逆説的効果が低減できるが、そうではない場合には逆説的効果は低減されにくいと考えられる。

代替思考のアクセス可能性（利用可能な知識や思考が活性化されている程度）が高いと逆説的効果が低減されやすい理由は、前述した Wegner の思考抑制のモ

デルに基づいて考えることができる。Wegner の思考抑制のモデルでは、抑制対象は監視過程によって活性化され続けアクセス可能性の高い状態になると考えられている。アクセス可能性の低い代替思考は、思考上に浮かび続けることが難しいため、常に実行過程を働かさなくてはならず、それと並行して、監視過程を強く働かさなければならない。その結果、この監視過程の強い働きによって抑制対象に対するアクセス可能性が高まりやすいと考えられる。一方、アクセス可能性の高い代替思考は、思考上に浮かび続きやすいため、比較的、実行過程および監視過程の働きが弱くてもよいと考えられる。この弱い監視過程の働きによって、抑制対象に対するアクセス可能性が、相対的に高まりにくいと考えられる。このように、代替思考のアクセス可能性が高いときには逆説的効果が低減されるが、そうでないときには逆説的効果は低減されるとは限らないと考えられる。

2.4 ステレオタイプ抑制における代替思考

ステレオタイプを抑制する場合には、単にアクセス可能性の高い代替思考を使用すればよいというわけではない。これまで、ステレオタイプ抑制における代替思考としては、対象集団と関連する代替思考が扱われてきた (e.g., 田戸岡・村田, 2010)。なぜなら、ステレオタイプ抑制は対人判断という文脈で行われることが多く、対人判断を行う場合は判断対象について考えなければならないことが多いからである。つまり、ステレオタイプ抑制では、対象集団や対象人物について考えながら、その集団のステレオタイプだけを抑制する必要があるため、ステレオタイプ抑制における代替思考は、対象集団や対象人物に関連する内容であることが多いのである。実際に、大江・岡・横井 (2006) は、ステレ

オタイプの抑制方略として、対象集団の抑制対象であるステレオタイプ以外の側面を考えることで、ステレオタイプを使わないようにするといった接近方略が用いられることを示している。さらに、Galinsky & Moskowitz (2007) は、ステレオタイプを抑制する際、対象集団に関連した内容が思い出されることを示している。具体的には、黒人のステレオタイプを抑制すると、黒人のステレオタイプと反対の内容である反ステレオタイプが活性化されていたのである。

ステレオタイプ抑制の際に、対象集団や対象人物に関連する代替思考を使用することによる効果を扱った研究がある。その中でもまず、逆説的效果を低減できる代替思考について述べる。ステレオタイプのでも反ステレオタイプのでもない特性を代替思考として扱った研究では逆説的效果が低減されていた。例えば、Oe & Oka (2003) の実験 1 では、参加者が女性のステレオタイプを抑制する際に、女性のステレオタイプ以外の女性の特性を代替思考として使用する場合に、逆説的效果が低減されていた。この実験では、参加者が抑制中に記述した代替思考の内容が分析されており、使用された代替思考がステレオタイプのでも反ステレオタイプのでもないときに、逆説的效果が低減されることを示している。さらに、ステレオタイプ内容モデルに基づいて代替思考として補償的ステレオタイプを利用した田戸岡・村田 (2010) では、参加者が、高齢者の無能なというステレオタイプを抑制する際に、代替思考として高齢者の温かいという特性を使用する場合に逆説的效果が低減されていた (実験 2)。しかし、対象集団に関連する代替思考であっても逆説的效果を低減できない場合もある。ステレオタイプとは反対の特性である反ステレオタイプを代替思考として使用すると逆説的效果が低減されにくいことが示されている。Oe & Oka (2003) の実験 2 では、参加者が女性のステレオタイプを抑制する際に、女性のステレオタイプとは反対の特性を代替思考として使用すると、逆説的效果は低減されな

いことを示している。これらの研究から、対象集団に関する反ステレオタイプの特性を含まない代替思考を使用する場合には、逆説的効果が低減できると考えられる。

対象集団に関連する代替思考の内容

以上の議論から、ステレオタイプを抑制する際に代替思考として利用できる対象集団に関連する特性は、次の2つに分類できると考えられる。ステレオタイプの反対の特性である反ステレオタイプの特性と、ステレオタイプの特性でも反ステレオタイプの特性でもない特性である。反ステレオタイプの特性は、抑制対象であるステレオタイプの単なる反対の内容であるが、ステレオタイプの特性でも反ステレオタイプの特性でもない特性と抑制対象であるステレオタイプとの関係は、それらの対象集団に対する優位性によって説明できると考えられる (Figure 2.1)。抑制対象となるステレオタイプは、対象に接触するとまず活性化される特性であり、対象集団に対する当てはまりの程度が強い優位なステレオタイプの特性であると考えられる。一方、優位ステレオタイプの特性に比べ、ステレオタイプの特性でも反ステレオタイプの特性でもない特性は、対象集団に対する当てはまりの程度が相対的に低い非優位なステレオタイプの特性であると考えられる。

非優位ステレオタイプの特性の非優位性 対象集団に対する当てはまりの程度が相対的に弱い非優位ステレオタイプの特性には非優位性があると考えられる。つまり、非優位ステレオタイプの特性のなかには、対象集団に対する当てはまりの程度が相対的に強い上位の非優位ステレオタイプの特性から、当てはまりの程度が相対的に弱い下位の非優位ステレオタイプの特性までさまざまな特性があると考えられる。

サブタイプの位置づけ サブタイプとは、序論の1.4で述べたように、ステレオタイプに一致しない成員からなる下位集団である (Mauer et al., 1995; Weber

& Crocker, 1983)。本論文の枠組みに当てはめると、サブタイプに関する特性は、対象集団に当てはまる程度が弱いと考えられるため、非優位ステレオタイプの特性のひとつであると考えることができる。

上で紹介した対象集団に関連する代替思考を扱った研究を本論文の枠組みに当てはめると、Oe & Oka (2003) の実験 1 では、対象集団に関連するステレオタイプのでも反ステレオタイプのでもない特性を代替思考として使用しており、これは非優位ステレオタイプの特性であると考えられる。田戸岡・村田 (2010) の実験 2 では、補償的ステレオタイプを代替思考として使用している。補償的ステレオタイプは、主要なステレオタイプを補償する二次的なステレオタイプであると考え、ステレオタイプに比べて対象集団に対する当てはまりの程度が弱いと考えられ、非優位ステレオタイプの特性に分類されると考えられる。そして、非優位ステレオタイプの特性に分類される代替思考を扱ったこれらの研究では、代替思考を使用することによって逆説的效果が低減されている。

このように、非優位ステレオタイプの特性が代替思考として使用されると、逆説的效果が低減されやすいと考えられ、代替思考が逆説的效果を低減できるかどうかは、抑制対象である優位ステレオタイプの特性と代替思考との連想価の高さによって説明できると考えられる。反ステレオタイプの特性は、優位ステレオタイプの特性の反意語であるため、それらの連想価は高いと考えられる。実際に、Galinsky & Moskowitz (2007) は、ステレオタイプを抑制すると、反ステレオタイプの特性が活性化されることを示している。このことから、反ステレオタイプの特性は優位ステレオタイプの特性との連想価が高いため、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合は、実行過程によって反ステレオタイプの特性が思考上に浮かぶと、同時に優位ステレオタイプの特性も思考上に浮かびやすいと考えられる。反ステレオタイプの特性を考えれば考える

ほど、優位ステレオタイプの特性も思考上に浮かぶことになってしまう。そのため、実行過程を強く働かさなければならず、それと並行して監視過程も強く働かさなければならず、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりやすくなると考えられる。一方、非優位ステレオタイプの特性は、優位ステレオタイプの特性との連想価が低いと考えられる。したがって、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合は、実行過程によって非優位ステレオタイプの特性が思考上に浮かんでも、優位ステレオタイプの特性は思考上に浮かびにくいと考えられる。そのため、反ステレオタイプの特性に比べ、実行過程および監視過程の働きは弱くてもよく、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性はそれほど高まることはないと考えられる。

以上の議論から、本論文では、優位ステレオタイプ抑制の際に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、逆説的効果が低減されやすいという仮説を検討する。

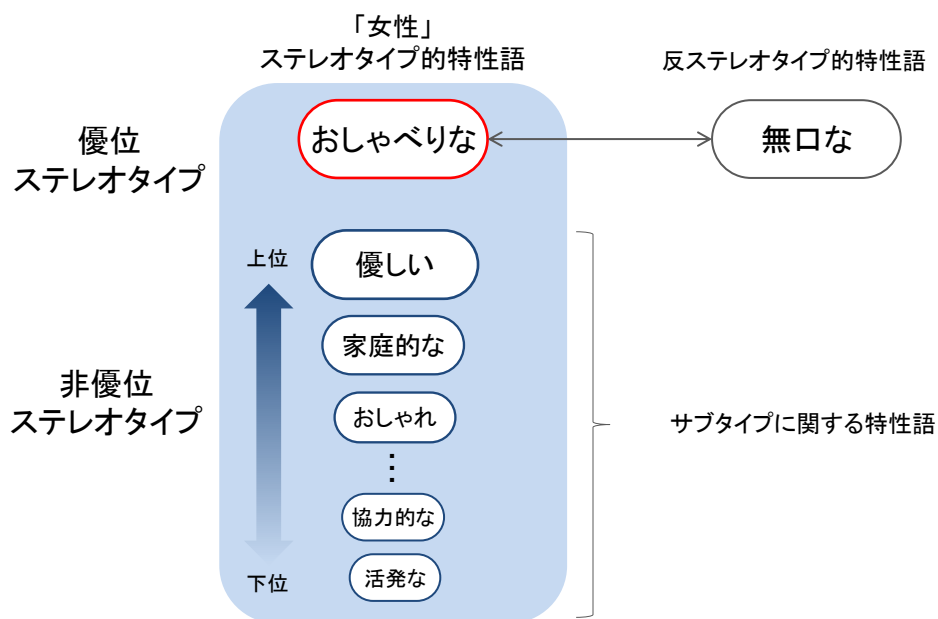


Figure 2.4.1 優位ステレオタイプと非優位ステレオタイプ、反ステレオタイプ、サブタイプの関係の例

第3章 ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差

第3章では、ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差について述べた。まず、逆説的効果の個人差に関する先行研究を紹介し、認知的個人差はこれまであまり検討されてこなかったが、逆説的効果の認知的個人差として非優位ステレオタイプの特性の利用可能性があることを提案した。前章の第2章では、優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果を低減できる有効な代替思考として、対象集団の非優位ステレオタイプの特性を提案した。しかし、この非優位ステレオタイプの特性の利用可能性には個人差があり、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人は低い個人よりも逆説的効果が生じにくいという可能性を提示した。この個人差の背後にある認知的特性のひとつに認知的複雑性があることを述べて、認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいという仮説を立てた。

3.1 逆説的効果の個人差

これまで、思考抑制については、その逆説的効果の個人差についてさまざまな検討が行われている。例えば、逆説的効果が生じやすいのは、思考抑制を慢性的に行いやすい傾向を測定する WBSI (White Bear Suppression Inventory) の得点が高い個人 (Rassin, 2005)、受動的な抑制スタイルを持つ個人よりも積極的な抑制スタイルを持つ個人 (木村, 2005)、ワーキングメモリの容量が小さい個人 (Brewin & Smart, 2005) であることが示されている。

一方、ステレオタイプ抑制については、その逆説的効果の個人差について、逆説的効果が生じやすいのは、ステレオタイプ抑制の内的動機づけが低い個人 (Gordijn et al., 2004)、差別主義傾向が高い個人 (Monteith, Spicer, & Tooman, 1998)、自尊心が低い個人 (田戸岡・村田, 2014) であることが示されている。

このように、ステレオタイプを含まない思考抑制による逆説的効果については認知的な個人差は扱われているが、ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差については、これまで動機的な個人差しか扱われてこなかった。しかし、ステレオタイプの抑制の問題に限らないステレオタイプ研究やより広い集団認知や対人認知の研究では、さまざまな認知的な個人差が扱われている。例えば、努力を要する認知活動に従事しそれを楽しむ内発的傾向である認知欲求 (Cacioppo & Petty, 1982; 森, 1997)、構造化された明確な認知への欲求の傾向である個人的構造欲求 (Neuberg & Newsom, 1993)、他者を複数の次元を利用して捉える傾向である認知的複雑性 (Bieri, 1955) などである。これらの集団認知や対人認知の個人差が、ステレオタイプ抑制による逆説的効果にも関係している可能性が考えられる。

3.2 非優位ステレオタイプの特性の使用しやすさにおける個人差

ステレオタイプ抑制の際に、どのような代替思考を使用しやすいかには個人差があると考えられる。第 2 章で述べたように、ステレオタイプを抑制する際には、対象集団に関する思考が代替思考として使用されることが多く、対象集団に関連する代替思考として、反ステレオタイプの特性と非優位ステレオタイプの特性がある。これらの代替思考の利用可能性（ある知識や思考の有無）を考えると、反ステレオタイプの特性はステレオタイプの単なる反意語であり、この利用可能性に個人差はないと考えられるが、一方、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性には個人差があると考えられる。なぜなら、非優位ステレオタイプの特性に関する知識や思考を持っている個人と、そうではない個人がいると考えられるからである。

具体的には、非優位ステレオタイプの特性が利用可能な個人とは、集団を多次元的に捉えている個人であると考えられる。集団に対する捉え方には個人差があり、集団を一次元上で捉えやすい個人とさまざまな次元から捉えやすい個人がいると考えられる。集団を一次元上で捉えやすい個人は、集団を主に優位ステレオタイプの特性で捉えやすく、優位ステレオタイプを抑制する際は、優位ステレオタイプの特性の反対の内容である反ステレオタイプの特性を代替思考として使用することが多いと考えられる。第 2 章で述べたように、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、同時に優位ステレオタイプの特性も思考上に浮かびやすいため、実行過程および監視過程を強く働かさなければならず、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高くなり、逆説的効果が生じやすいと考えられる。これとは対照的に、集団を多次元的に捉えやすい個人は、優位ステレオタイプの特性だけでなく他のさま

ざまな次元の特性，つまり非優位ステレオタイプの特性も利用可能であり，優位ステレオタイプ抑制の際には，非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用することがあると考えられる。第 2 章で述べたように，非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると，比較的，優位ステレオタイプの特性は思考上に浮かびにくいので，実行過程および監視過程の働きが弱くてもよく，その結果，優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性は高まりにくく，逆説的効果が生じにくいと考えられる。

3.3 対人認知における認知的複雑性：多次元的な認知構造

認知的複雑性とは，対人認知を規定する認知的特性であり，社会的環境，なかでも他の個人を複数の次元を利用して捉えているかどうかという特性である (Bieri, 1955)。認知的複雑性が低い個人は，単次元上で対人認知を行っているのに対し，認知的複雑性が高い個人は，対人認知の際，他者を多次元的に捉えていることが示されている (池上, 1983)。さらに，認知的複雑性が高い個人は，対人認知の際に，お互いに葛藤する情報を処理することができることが示されている (e.g., 池上, 1983; Tripodi & Bieri, 1964)。

認知的複雑性による非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の違い

Bieri (1955) の考えは，個人に対する捉え方に焦点を当てているが，集団も社会的環境のひとつであるので，集団に対する捉え方も，認知的複雑性の高低によって異なると考えることができる。個人に対する捉え方と同じように，認知的複雑性が高い個人は，集団を多次元的に捉えており，集団のさまざまな次元を利用してその集団や集団成員を判断していると考えられる。つまり，認知的複雑性が低い個人は，主に優位ステレオタイプの特性やその反対の内容の特

性である反ステレオタイプの特性が利用可能なのに対して、認知的複雑性が高い個人は、それらだけでなく、非優位ステレオタイプの特性も利用可能であると考えられる。

認知的複雑性による優位ステレオタイプの特性のアクセス可能性の違い

さらに、認知的複雑性によって、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性も異なると考えられる。先行研究では、認知的複雑性が低い個人は高い個人よりも、ステレオタイプの判断をしやすいことが示されている (e. g., Ben-Ari, Kedem, & Levy-Weiner, 1992)。このことから、認知的複雑性が低い個人は、日常的に優位ステレオタイプを用いて対人判断を行っているため、優位ステレオタイプの特性を繰り返し利用していると考えられ、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が慢性的に高くなっていると考えられる。一方、認知的複雑性が高い個人は、優位ステレオタイプの特性だけでなく非優位ステレオタイプの特性も利用して対人判断を行っていると考えられるため、認知的複雑性が低い個人よりも、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性は高くはなっていないと考えられる。

認知的複雑性による代替思考の使用しやすさの違い

以上の議論から、認知的複雑性の高低によって、優位ステレオタイプ抑制の際にどの代替思考を使用しやすいかが異なると考えられる。前章の第 2 章で述べたように、優位ステレオタイプ抑制における対象集団に関連した代替思考には、反ステレオタイプの特性と非ステレオタイプの特性があると考えられ、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合には、逆説的効果が低減されにくく、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合には逆説的効果が低減されやすいと考えられる。

認知的複雑性が低い個人は、非優位ステレオタイプの特性が利用可能ではな

く、さらに、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高いので、優位ステレオタイプ抑制の際には、優位ステレオタイプの特性の反対の内容である反ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすいと考えられる。一方、認知的複雑性が高い個人は、非優位ステレオタイプの特性が利用可能であり、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が認知的複雑性が低い個人よりも高くはないので、優位ステレオタイプ抑制の際には、反ステレオタイプの特性だけでなく、他の特性、つまり非優位ステレオタイプの特性をも代替思考として使用しやすいと考えられる。

このように、認知的複雑性が高い個人は、それが低い個人よりも、優位ステレオタイプ抑制の際の代替思考として、非優位ステレオタイプの特性を使用しやすいために、上の序論 3.2 で述べたように、実行過程および監視過程の働きが弱くてもよく、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりにくく、逆説的効果が生じにくいと考えられる。

本論文の仮説のまとめ

第 I 部で述べてきた仮説をまとめると次の通りである。第 2 章では、優位ステレオタイプ抑制の際に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいという仮説を立てた。しかしながら、第 3 章で述べたように、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性には個人差があり、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人は低い個人よりも、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすいので、逆説的効果が生じにくいと考えられる。この非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的特性のひとつとして認知的複雑性を取り上げ、認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいという仮説を立てた。

第Ⅱ部の実証研究では、第Ⅰ部の第2章と第3章で述べた仮説を実証的に検討する。

第Ⅱ部 実証研究

第Ⅱ部は、第4章から第5章で成り立っており、第Ⅰ部で述べた仮説を検証するために行った7つの実証研究を紹介した。

第4章は、研究1から研究3で成り立っており、優位ステレオタイプを抑制する際の、対象集団の非優位ステレオタイプ的特性の代替思考としての役割を検討した。具体的には、優位ステレオタイプ抑制の際に、非優位ステレオタイプ的特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいという仮説を検討した。その結果、優位ステレオタイプ抑制の際に、非優位ステレオタイプ的特性を代替思考として使用すると、優位ステレオタイプ的特性に対するアクセス可能性が高まりにくく、逆説的効果が低減されやすいことが示唆された。

第5章は、研究4から研究7で成り立っており、優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差を検討した。第4章では、非優位ステレオタイプ的特性を代替思考として使用すると、逆説的効果が低減されやすいことが示されたが、非優位ステレオタイプ的特性の利用可能性には個人差があると考えられ、非優位ステレオタイプ的特性の利用可能性が高い個人は低い個人よりも、逆説的効果が生じにくいと考えられる。そこで、この非優位ステレオタイプ的特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的特性である認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいという仮説を検討した。その結果、認知的複雑性が高い個人は低い個人よりも、非優位ステレオタイプ的特性を代替思考として使用しやすいため、優位ステレオタイプ的特性に対するアクセス可能性が高まりにくく、逆説的効果が生じにくいことが示唆された。

第4章 ステレオタイプ抑制における対象集団に関連する

代替思考の役割の検討

第4章では、優位ステレオタイプ抑制における、対象集団に関連する代替思考の役割を、3つの実証研究を通して検討した。具体的には、優位ステレオタイプ抑制の際に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいという仮説を検討した。

研究1では、非優位ステレオタイプの特性としてサブタイプに関する特性を用いて、優位ステレオタイプ抑制の際の代替思考として有効性を検討した。その結果、サブタイプに関する特性を代替思考として使用すると、逆説的効果は低減されにくいことが示唆された。この結果は予測とは逆のものであったが、事後的な調査を行ったところ、代替思考として使用した特性語は、反ステレオタイプの内容であったことが示され、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果は低減されにくいという結果が示された。

研究2と研究3では、対象集団に対する当てはまりの程度を直接測定して非優位ステレオタイプの特性を選定し、非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性を検討した。

研究2では、優位ステレオタイプ抑制の際に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として用いることの有効性を、質問紙によって優位ステレオタイプの判断を顕在的に測定することによって検討した。その結果、単純に優位ステレオタイプを抑制した場合は、逆説的効果が生じるが、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいという可能性

が示唆された。

研究 3 では、研究 2 で得られた非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいという知見の頑健性を確認し、さらに、顕在的な判断の背後にある認知的メカニズムを検討するために、実験室実験によって優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定した。研究 3 では、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合と比較し、さらに、非優位ステレオタイプの特性の非優位性によって、代替思考としての役割が異なるかどうかを探索的に検討した。その結果、上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、単純に抑制した場合、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合、下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合に比べ、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が低いことが示された。この結果から、Wegner の思考抑制のモデルに基づくと、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、実行過程および監視過程の働きは弱くてもよく、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性は高まりにくく、逆説的効果が低減されやすいという可能性が示唆された。

4.1 研究 1：非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての役割

—サブタイプに関する特性を用いた検討—¹

4.1.1 問題

研究 1 では、非優位ステレオタイプの特性としてサブタイプに関する特性を取り上げ、優位ステレオタイプ抑制の際に、サブタイプに関する特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されるかどうかを検討する。

まず、予備調査によって、優位ステレオタイプの特性語と、非優位ステレオタイプ特性語としてサブタイプに関する特性語を選定した。具体的には、複数の集団について、「典型的イメージ」と「例外的イメージ」について回答を求めた。その結果、弁護士ステレオタイプを題材として、「典型的イメージ」として回答された特性語を優位ステレオタイプの特性語、「例外的イメージ」として回答された特性語をサブタイプに関する特性語（非優位ステレオタイプの特性語）とした。予備調査によって選定された非優位ステレオタイプの特性語が活性化され代替思考として利用されやすくなっている条件と、活性化されていない条件を作り分け、優位ステレオタイプ抑制の操作を行い、その後、優位ステレオタイプの判断を顕在的に測定した。

研究 1 では、次の 2 つの仮説を検討する。第一に、先行研究で示されているように (e.g., Macrae et al., 1994; Monteith et al., 1998), 単純に優位ステレオ

¹ 本研究は、次の論文と学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。山本 真菜・岡 隆 (2011). ステレオタイプ抑制におけるサブタイプ活性化の役割 日本大学心理学研究, 32, 73-79. 山本 真菜・岡 隆 (2010). ステレオタイプ抑制におけるサブタイプ活性化の効果 日本心理学会第 74 回大会発表論文集, 237. Yamamoto, M., Oka, T. (2011). The role of subtype activation in stereotype suppression. The 12th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology (in San Antonio, Texas, USA) (January 29th, 2011).

タイプ抑制を行った場合は逆説的効果が生じると予測する。つまり、非優位ステレオタイプの特性語が活性化されなかった条件では、優位ステレオタイプ抑制を行った場合は、抑制を行わなかった場合に比べ、優位ステレオタイプの判断の得点が高いと予測する。

第二に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されると予測する。つまり、優位ステレオタイプ抑制を行った場合、非優位ステレオタイプの特性語が活性化された条件は、活性化されなかった条件に比べ、優位ステレオタイプの判断の得点が低いと予測する。

4.1.2 方法

予備調査

実験で使用するための集団を選定し、その集団の優位ステレオタイプの特性語と、非優位ステレオタイプの特性語としてサブタイプに関する特性語を調べることが目的とする。大学生 19 名（男性 8 名，女性 11 名；平均年齢 19.95 歳， $SD = 0.60$ ）が調査に参加した。

サブタイプを有していると考えられる社会的集団である，弁護士，大学生，コンピュータ・エンジニア，図書館司書，高齢者それぞれに対する典型的イメージ（優位ステレオタイプ）と，例外的イメージ（サブタイプ）を端的な言葉でそれぞれ 3 つずつ回答させた。具体的には，それぞれの集団ごとに，まず，優位ステレオタイプの特性を記述させるために，「典型的なイメージを 3 つ書いてください」という教示が与えられた。次に，「あなたが典型的だと思うイメージの他に，例外として思い浮かぶイメージを書いてください」という教示が与えられた。

Table 4.1.1
 予備調査で得られた各集団の
 優位ステレオタイプ的特性語と非優位ステレオタイプ的特性語

	優位ステレオタイプ的特性語	非優位ステレオタイプ的特性語
弁護士	頭の良い(9) まじめな(6) お金持ち(5)	感情的(6) カジュアルな(4) だらしない(4)
大学生	遊んでいる(6) 自由(6) 楽しい(5) バイト(4)	忙しい(4)
コンピューター・ エンジニア	めがね(6) 機械が得意(6) 頭の良い(5) 理系(4)	活発(6)
図書館司書	まじめな(6) 本好き(6) めがね(5) 静か(4) おとなしい(4)	派手(4)
高齢者	優しい(6) 物知り(6) 白髪(5) ゆっくり(5) 弱い(4)	活動的(4) 動作が速い(4)

注) 括弧内は出現頻度。

それぞれの集団について、参加者が典型的イメージ、例外的イメージとしてリストした特性語について、その出現頻度を求めた。その出現頻度が、4以上のぼる特性語をもっている集団を Table 4.1.1 に示す。出現頻度を求めるときには、類似した言葉をまとめた。その集団のなかから、典型的イメージ、例外的イメージ共に、特性語の出現頻度が比較的多く、かつ、均等に挙げられている集団を選定した。その結果、「弁護士」を実験で使用する集団とした。弁護士に対する典型的イメージ、例外的イメージ共に、それぞれ出現頻度の多かった 3

つの特性語を刺激語として選択した。具体的には、優位ステレオタイプの特性語は、「まじめな」、「お金持ち」、「頭の良い」であった。サブタイプに関する特性語（非優位ステレオタイプの特性語）は、「感情的」、「カジュアルな」、「だらしない」であった。

実験計画

独立変数は、非優位ステレオタイプの特性活性化（非優位ステレオタイプの特性活性化あり、非優位ステレオタイプの特性活性化なし）と優位ステレオタイプ抑制（優位ステレオタイプ抑制あり、優位ステレオタイプ抑制なし）を参加者間要因とする 2 要因計画であった。従属変数は、優位ステレオタイプの判断であった。

実験参加者

大学生 92 名（男性 52 名、女性 39 名、不明 1 名；平均年齢 19.57 歳、 $SD = 1.14$ ）に、以下の 4 種類の調査票をランダムに配布した。回答項目に欠損のあった 4 名のデータを分析から除外し、88 名のデータが分析に用いられた。なお、予備調査での参加者とは異なる参加者であった。

材料

調査票は、「調査 A」、「調査 B」、「調査 C」で構成されていた（Figure 4.1.1）。及川（2005）の方法を参考に、「調査 A」は、乱文構成課題であり、これによって、非優位ステレオタイプの特性活性化の操作を行った。具体的には、4 つの単語からなる単語セット 10 問で構成されており、それぞれの単語セットにおいて、4 つの単語を並び変えて、文法上適切な文章を完成させるというものであった。

単語セットの例を Table 4.1.2 に示す。非優位ステレオタイプの特性活性化あり条件の単語セットは、予備調査に基づいた弁護士の例外的イメージ（サブタイプ）の特性語に関する文章が完成されるように作成されていた。非優位ステレオタイプの特性活性化なし条件の単語セットは、弁護士ステレオタイプとは無関連な中性的な文章が完成されるように作成されていた。

続いて、「調査 B」は、弁護士風の男性の写真を提示し、その人物像を記述させる課題であった。その記述の際に優位ステレオタイプ抑制の操作を行った。このような、ステレオタイプ抑制の操作を行うために文章を記述させる課題は、多くの研究で用いられている（e. g., Macrae et al., 1994; 及川, 2005; Gordijn et al., 2004; 山本・岡, 2010; 山本・岡, 2011; 山本・岡, 2012; 山本・岡, 2013; 山本・岡, 2014; 山本・岡, 2015）。具体的には、弁護士風の男性の顔写真が提示されており、その下には記述欄があった。写真の人物について説明する記述はなかった。このとき、優位ステレオタイプ抑制あり条件にのみ、「写真のような人物について、たいてい当てはまるような典型的なイメージがあると思いますが、

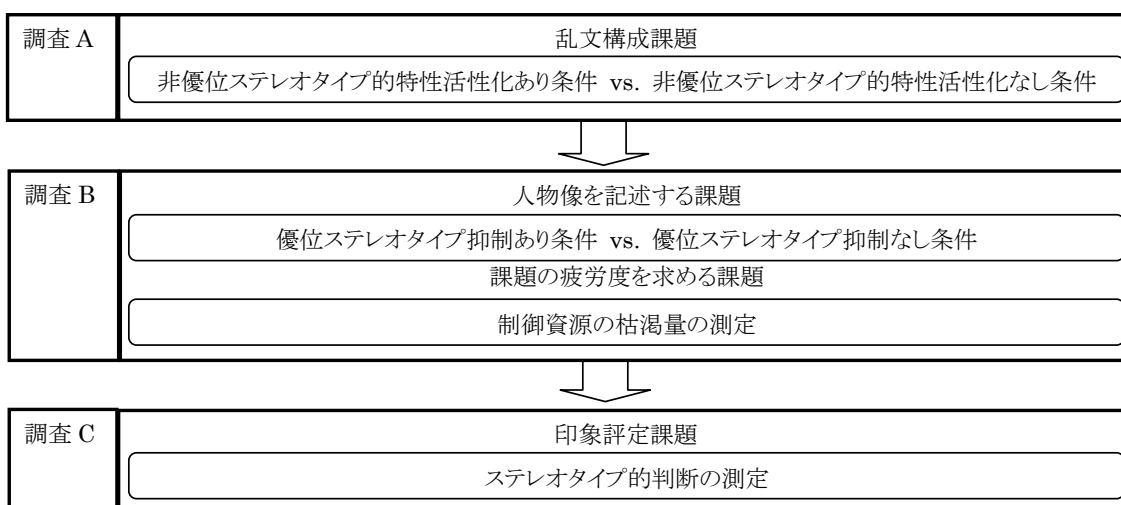


Figure 4.1.1. 材料と実験の流れ

Table 4.1.2
乱文構成課題で使用した単語セットの例

非優位ステレオタイプの特性活性化あり条件の 単語セット	非優位ステレオタイプの特性活性化なし条件の 単語セット
時間に、遅刻をする、決まった、たまに (たまに決まった時間に遅刻をする)	目指している、上野を、電車で、彼は (彼は電車で上野を目指している)
仕事に、ジーパンをはく、行くときも、たいてい (仕事に行くときもたいていジーパンをはく)	到着する、少しで、もう、目黒に (もう少しで目黒に到着する)
涙を、見て、映画を、流した (映画を見て涙を流した)	抜けて、街を、出たい、郊外に (街を抜けて郊外に出たい)
とても、散らかっている、部屋は、彼の (彼の部屋はとても散らかっている)	3週間で、母は、つくった、セーターを (母は3週間でセーターをつくった)
約束を、よく、忘れる、彼は (彼はよく約束を忘れる)	大切だ、何よりも、やはり、お盆が (やはりお盆が何よりも大切だ)

注)括弧内は正しい文例。

そのようなことは絶対に記述しないでください。」という、優位ステレオタイプを抑制させるための追加教示を記載した。優位ステレオタイプ抑制なし条件には、そのような追加教示はなかった。この人物像に関する記述は、操作チェックとしても用いられた。

さらに、調査 B では、人物像を記述させる課題の感想として、どの程度疲れたか、どの程度難しかったかを訪ねる項目が配置されていた。これにより、抑制によって制御資源が枯渇しているかの確認を行った。具体的には、及川 (2005) に基づき、人物像を記述する課題の感想として、「難しかった」、「疲れた」、「神経を使った」、「努力を要した」の 4 項目に対して 7 件法 (1: 全く当てはまらない—7: 非常によく当てはまる) で回答を求めた。

最後に、「調査 C」では、3 人の人物の写真を提示し、それぞれの人物について印象評定を求めた。1 人目は女性、2 人目は人物像を記述させる課題で用いた人物とは異なる弁護士風の男性、3 人目は 1 人目とは異なる女性であった。2 人目の弁護士の印象評定によって、参加者が優位ステレオタイプの判断を行うかどうかを測定した。具体的には、弁護士の優位ステレオタイプの特性語である、「まじめな」、「貧乏」(逆転項目)、「頭の良い」の 3 項目に対し、7 件法で回答

を求めた。なお、実験の目的を参加者に予測させないために、フィラー項目として2項目を加えてあった。

手続き

実験は授業時間内を利用した一斉調査形式で行った。実験者は、質問票を実験参加者に配布し、課題間の影響を最小限に抑えるために、他の実験のための予備調査と称して、調査を構成する3つの課題は互いに無関係であることを教示した。実験は実験者の指示に従って進行した。最後に、デブリーフィングを行った。

4.1.3 結果

操作チェック

まず、実際に優位ステレオタイプ抑制あり条件の参加者が弁護士の優位ステレオタイプを抑制していたかどうかを検討した。「調査B」の人物像を記述させる課題で、参加者が人物像について記述した内容がどの程度優位ステレオタイプの的であるかを、実験目的を知らない評定者2名が評定した。その際、具体的には、記述全体が「まじめな」、「お金持ち」、「頭の良い」という弁護士の優位ステレオタイプの特性語にどの程度当てはまるかを6件法で評定を求め、それぞれの評定者の平均値を算出した。その平均値の一致率は $r = .43$ であった。一致率は十分に高いとはいえないが、ここでは、2名の平均値を算出し、その得点を人物像記述課題の優位ステレオタイプ度得点とした。この得点に関して、非優位ステレオタイプの特性活性化（非優位ステレオタイプの特性活性化あり、非優位ステレオタイプの特性活性化なし）×優位ステレオタイプ抑制（優位ス

テレオタイプ抑制あり，優位ステレオタイプ抑制なし)の分散分析を行った。その結果，非優位ステレオタイプの特性活性化の主効果のみが有意であり ($F(1, 84) = 4.85, p < .05$)，非優位ステレオタイプの特性活性化なし条件 ($M = 4.55, SD = 0.65$) は，非優位ステレオタイプの特性活性化あり条件 ($M = 4.16, SD = 0.98$) に比べ，記述内容の優位ステレオタイプ度得点が高かった。優位ステレオタイプ抑制の主効果は確認されなかったが，優位ステレオタイプ抑制あり条件の優位ステレオタイプ度得点 ($M = 4.22, SD = 0.88$) は，優位ステレオタイプ抑制なし条件の優位ステレオタイプ度得点 ($M = 4.49, SD = 0.79$) よりも低かったため，優位ステレオタイプ抑制あり条件の参加者は，優位ステレオタイプを抑制していた可能性が考えられる。

条件ごとの優位ステレオタイプの判断の強さの差異

非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性を検討するために，「調査 C」で測定した，「調査 B」とは別の弁護士風人物の写真に対する優位ス

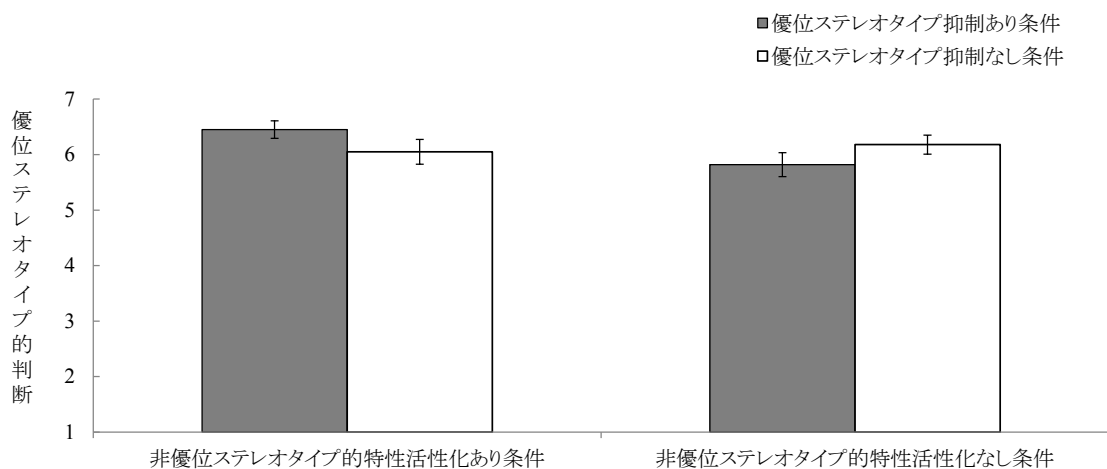


Figure 4.1.2. 条件ごとの優位ステレオタイプの判断(「まじめな」項目)の得点の平均値と標準誤差

ステレオタイプの判断について分析を行った。具体的には、「まじめな」、「貧乏」（逆転項目）、「頭の良い」の3項目について、「全くあてはまらない」を1点—「非常によく当てはまる」を7点として得点化し、条件ごとの平均値を算出した。それぞれの項目における平均評定得点を、優位ステレオタイプの判断の得点とした。この得点に関して、非優位ステレオタイプの特性活性化（非優位ステレオタイプの特性活性化あり，非優位ステレオタイプの特性活性化なし）×優位ステレオタイプ抑制（優位ステレオタイプ抑制あり，優位ステレオタイプ抑制なし）の2要因の分散分析を行った。Figure 4.1.2 に示すように、「まじめな」項目の分析について、交互作用効果のみが有意であった ($F(1, 84) = 4.00, p < .05$)。交互作用効果が有意であったため、単純主効果の検定を行った。その結果、優位ステレオタイプ抑制あり条件では、非優位ステレオタイプの特性が活性化された参加者は、非優位ステレオタイプの特性が活性化されていない参加者に比べ、優位ステレオタイプの判断の得点が高かった ($F(1, 84) = 5.43, p < .05$)。この結果は、仮説とは逆のものである。なお、他の2項目には、有意な効果はみられなかった。

抑制後の制御資源枯渇量

抑制によって、制御資源が実際に枯渇していたかを確認するために、「調査 B」に対する疲弊度について分析をおこなった。具体的には、「難しかった」、「疲れた」、「神経を使った」、「努力を要した」の4項目の平均値を疲弊度得点とした ($\alpha = .84$)。この得点に関して、非優位ステレオタイプの特性活性化（非優位ステレオタイプの特性活性化あり，非優位ステレオタイプの特性活性化なし）×優位ステレオタイプ抑制（優位ステレオタイプ抑制あり，優位ステレオタイプ抑制なし）の2要因の分散分析を行った。その結果、非優位ステレオタイプの

特性活性化の主効果が有意であった ($F(1, 84) = 7.62, p < .01$)。非優位ステレオタイプの特性活性化あり条件は ($M = 4.79, SD = 1.16$) は、非優位ステレオタイプの特性活性化なし条件 ($M = 4.02, SD = 1.41$) に比べ、疲弊度得点が高かった。この結果は、非優位ステレオタイプの特性活性化あり条件の参加者は、非優位ステレオタイプの特性活性化なし条件の参加者よりも、制御資源が枯渇していたことを示している。

代替思考の内容

非優位ステレオタイプの特性活性化あり条件で活性化された内容が、反ステレオタイプの内容であったかどうかを検討する。

以上の「抑制後の優位ステレオタイプの判断の強さ」での分析結果は、優位ステレオタイプ抑制あり条件において、非優位ステレオタイプの特性活性化あり条件は、活性化なし条件に比べ、優位ステレオタイプの判断の得点が高いというものであった。これは仮説とは逆の結果である。優位ステレオタイプの特性語の内容は「お金持ち」、「頭の良い」、「まじめな」というものであり、非優位ステレオタイプの特性語の内容は「感情的」、「カジュアルな」、「だらしない」といものであった。これらの特性語を比較すると、本研究で使用した非優位ステレオタイプの特性語は反ステレオタイプの内容であった可能性が考えられる。非優位ステレオタイプの特性活性化あり条件で活性化された内容が、反ステレオタイプの内容であったのであれば、先行研究で示されているように、逆説的効果が生じると考えられる (Oe & Oka, 2003)。そこで、予備調査で選定された例外的イメージの特性語が、どの程度優位ステレオタイプの特性語に反する内容であるかを測定した。具体的には、大学院生 11 名に、「お金持ち」、「頭の良い」、「まじめな」のそれぞれ特性が、「感情的」、「カジュアルな」、「だらし

Table 4.1.3
特性語ごとの反ステレオタイプ度得点の平均値と標準偏差

	お金持ち	頭の良い	まじめな
平均値	4.73	5.73	6.18
標準偏差	1.42	0.86	0.72

ない」といった特性とどの程度反対の内容だと思うかを7件法（1：全く反していない—7：非常に反している）で評定を求めた。それぞれの特性語について平均値を算出し、その得点を反ステレオタイプ度得点とした（Table 4.1.3）。3つの特性語それぞれの反ステレオタイプ度得点に対して、中点（5）からの差の検定を行った。その結果、「お金持ち」については、有意な差は得られなかったが（ $t(10) = 1.62, n.s.$ ）、「頭の良い」と「まじめな」については、有意に中点よりも反ステレオタイプ度得点が高かった（ $t(10) = 6.33, p < .01$; $t(10) = 9.64, p < .01$ ）。

4.1.4 考察

本研究では、優位ステレオタイプを抑制する際の、非優位ステレオタイプの特性としてサブタイプに関する特性の代替思考としての有効性を検討した。具体的には、次の2つの仮説について検討した。第一に、単純に優位ステレオタイプ抑制を行った場合は逆説的效果が生じる、つまり、非優位ステレオタイプの特性活性化なし条件では、優位ステレオタイプ抑制を行った場合は抑制を行わなかった場合に比べ優位ステレオタイプの判断の得点が高いと予測した。第二に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的效果が低減される、つまり、優位ステレオタイプ抑制を行った場合、非優位ステレオタイプの特性活性化あり条件では、非優位ステレオタイプの特性活性化なし条

件に比べ、優位ステレオタイプの判断の得点が低いと予測した。その結果、第二の仮説と逆の結果が得られた。具体的には、非優位ステレオタイプの特性活性化あり条件は活性化なし条件に比べ、優位ステレオタイプの判断の得点が高いことが示された。この結果から、第一の仮説と第二の仮説の両方とも支持されなかったといえる。

しかし、予備調査で選定された非優位ステレオタイプの特性語の内容を事後的に調査したところ、3項目（「お金持ち」、「頭の良い」、「まじめな」）のうち2項目（「頭の良い」、「まじめな」）は反ステレオタイプの特性語であったことが示された。非優位ステレオタイプの特性活性化あり条件で活性化された内容は、反ステレオタイプの特性であったと考えると、本研究で得られた結果は、反ステレオタイプの特性が活性化された場合は活性化されなかった場合よりも、優位ステレオタイプの判断の得点が高かったというものであるといえる。この結果から、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、逆説的效果が低減されにくいことが示唆され、先行研究（Oe & Oka, 2003）と一致する結果であると考えられる。

さらに、抑制後の疲労度についての分析では、非優位ステレオタイプの特性活性化あり条件は、非優位ステレオタイプの特性活性化なし条件に比べ疲弊度得点が高いことが示された。この結果は、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、制御資源が消費されることを示唆している。序論の2.4で述べたように、反ステレオタイプの特性は、優位ステレオタイプの特性との連想価が高いため、優位ステレオタイプを抑制する際に反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、実行過程および監視過程を強く働かさなければならず、制御資源が多く消費されたと考えられる。

このように、本研究で得られた結果は、優位ステレオタイプ抑制の際に、反

ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されにくい可能性を示唆している。反ステレオタイプの特性は代替思考として用いられやすいが (Galinsky & Moskowitz, 2007), Oe & Oka (2003) が示しているように、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が生じることになる。

本研究では、方法上の問題が 3 点挙げられる。第一に、「調査 B」における人物像を記述する課題で、参加者が写真の人物を弁護士として判断していたかという問題である。写真の人物を提示してその人物に対するステレオタイプを抑制させるという手続きは、先行研究で多く用いられている標準的な手続きである。例えば、Macrae et al. (1994) では、スキンヘッドの人物の写真を提示し、その写真の人物についてステレオタイプの抑制を行わせていた。さらに、及川 (2005) では、外国人労働者の写真を提示し、その写真の人物についてステレオタイプの抑制を行わせていた。先行研究で用いられている対象人物は、参加者が比較的外見で判断することが可能であったと考えられる。一方、本研究で用いた弁護士は、スキンヘッドの人物や外国人労働者に比べ、外見において判断するには適さない集団であったと考えられる。この点については、今後の検討が必要である。

第二に、実際に抑制が行われていたかどうかについては疑問が残る。本研究では、参加者が実際に記述した内容に関して、評定者 2 名によってステレオタイプ度を評定させたが、評定者間の一致率が低かった。この点については、抑制の操作方法や抑制のチェック方法について今後の検討が必要である。

第三に、非優位ステレオタイプの特性語の選定方法について述べる。本研究では、非優位ステレオタイプの特性語としてサブタイプに関する特性語を予備調査によって選定した。しかしながら、事後的な調査によって、選定された非

優位ステレオタイプの特性語（サブタイプに関する特性語）は反ステレオタイプの特性語であることが示された。予備調査において、弁護士の「例外的イメージ」の特性語について回答を求めた結果、「感情的」、「カジュアルな」、「だらしない」という弁護士の反ステレオタイプの特性語が得られた背景として、これまでの弁護士像とは異なる特徴を持った弁護士がメディアに多く露出していることが考えられる。

本研究の意義として、以下の点が主張できるであろう。この結果は、現実的な意義として、人々の日常の抑制方略の有効性に疑問を投げかけることになる。一般的に、人々がある集団の優位ステレオタイプを抑制する際、その集団の反ステレオタイプの特性を考えようとする方略が取られることが多いであろう。本研究の結果は、このような反ステレオタイプの特性を用いた方略は、有効でないばかりでなく、優位ステレオタイプの判断を逆説的に強めるということを示していたのである。

本研究から、前述したように方法論上の問題が残っているが、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、逆説的効果が低減されにくいという可能性が示唆された。この結果は、先行研究（Oe & Oka, 2003）と一致する結果である。以降の研究 2 と研究 3 では、対象集団に対する当てはまりの程度を直接選定して非優位ステレオタイプ特性語を選定し、代替思考としての役割について検討する。

4.2 研究 2：非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての役割

—優位ステレオタイプの判断の顕在的測定

による検討—²

4.2.1 問題

研究 2 では、対象集団に対する当てはまりの程度を直接測定して、非優位ステレオタイプの特性語を選定し、優位ステレオタイプを抑制した際の、非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性を検討する。

本研究では、予備調査によって、優位ステレオタイプの特性語と、非優位ステレオタイプの特性語を選定した。具体的には、男性集団と女性集団を題材として取り上げ、それぞれの集団について「1 番多いと思うタイプ」と「次に多いと思うタイプ」についてその特性語の回答を求め、「1 番多いと思うタイプ」の特性語を優位ステレオタイプの特性語とし、「次に多いと思うタイプ」の特性語を非優位ステレオタイプの特性語とした。予備調査によって選定された非優位ステレオタイプの特性語が活性化され代替思考として利用されやすくなっている条件と、優位ステレオタイプの特性が活性化される条件、何も活性化されていない条件を作り分け、優位ステレオタイプ抑制の操作を行った。その後、優位ステレオタイプの判断を顕在的に測定した。

² 本研究は、次の論文と学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。山本 真菜・岡 隆 (2014). ジェンダーステレオタイプ抑制におけるサブタイプ活性化の役割 日本大学心理学研究, 35, 11-20. 山本 真菜・岡 隆 (2011). ステレオタイプ抑制におけるサブタイプ活性化の役割—性ステレオタイプを用いた検討— 日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集, 362. Yamamoto, M., Oka, T. (2012). The role of subtype activation in gender stereotype suppression. The 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology (in San Diego, California, USA) (January 28th, 2012).

研究 2 では、次の 2 つの仮説を検討する。第一に、先行研究で示されているように (e.g., Macrae et al., 1994; Monteith et al., 1998), 単純に優位ステレオタイプ抑制を行うと逆説的効果が生じると予測する。つまり、活性化されなかった条件では、優位ステレオタイプを抑制した場合は抑制しなかった場合に比べ、優位ステレオタイプの判断の得点が高いと予測する。

第二に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されると予測する。つまり、優位ステレオタイプ抑制を行った場合、非優位ステレオタイプの特性語が活性化された条件は、活性化されなかった条件や優位ステレオタイプの特性語が活性化された条件に比べ、優位ステレオタイプの判断の得点が低いと予測する。

4.2.2 方法

予備調査

実験で使用する男性集団、女性集団それぞれの優位ステレオタイプの特性語と、非優位ステレオタイプの特性語を選定するために、大学生 63 名 (男性 28 名、女性 33 名、不明 2 名; 平均年齢 19.11 歳, $SD = 2.32$) に対して、男性、女性それぞれの集団の中で「1 番多いと思うタイプ」と「次に多いと思うタイプ」を自由記述させた。本研究の実験では、大学生を対象としているため、予備調査でも同じ大学生を参加者として、大学生がもっているステレオタイプについて調査を行った。本論文の著者 1 名を含む大学院生 3 名 (女性 3 名、平均年齢 24 歳) の協議によって、「1 番多いと思うタイプ」の記述について、記述間の類似性に基づいて分類を行ったところ、女性に関する記述については 6 つに分類され、男性に関する記述については、5 つに分類された。それぞれの上位 3 つの

分類について、各分類を表す端的なカテゴリー一名を付与したところ、男性については、「運動好きな」、「受け身な」、「自信がある」というカテゴリー一名が得られ、女性については、「集団行動をする」、「おしゃれ好きな」、「おしゃべりな」というカテゴリー一名が得られた。これらを男性、女性それぞれの優位ステレオタイプ的特性語とした。なお、分類者 3 名が、男性、女性それぞれの 3 つの優位ステレオタイプ的特性語は、1 つのタイプとしてまとまりがあることを確認した。まとまりがあるどうかを確認するために、分類者 3 名に、得られたカテゴリー一名 3 つが、男性、女性それぞれの 1 つのタイプとしてまとまるかどうか回答を求めた。その結果、3 名全員が 1 つのタイプとしてまとまりがあるという回答であった。

次に、「次に多いと思うタイプ」の記述について、同様の分類を行い、非優位ステレオタイプ的特性語を選定しようとしたが、分類者 3 名の協議の結果、一致に至ることがなかった。そこで、2 回目の予備調査によって、非優位ステレオタイプ的特性語の選定を行うこととした。第一回目の予備調査の参加者とは異なる 51 名（男性 21 名、女性 29 名、不明 1 名；平均年齢 21.36 歳、 $SD = 1.05$ ）の大学生に対して、第一回目の予備調査によって選ばれた男性、女性それぞれの優位ステレオタイプ的特性語を提示し、それぞれの集団について、そのような特徴を持ったタイプの次に多いタイプをイメージさせた。次に、イメージしたタイプの特徴を 3 つ挙げさせた。男性、女性それぞれについて、頻度の多かった 3 つの特性語を非優位ステレオタイプ的特性語とした。その結果、男性の非優位ステレオタイプ的特性語は、「積極的な」、「優しい」、「おしゃれな」となり、女性の非優位ステレオタイプ的特性語は、「個人行動をする」、「地味な」、「静かな」となった。

実験計画

独立変数は、代替思考活性化（優位ステレオタイプの特性活性化，活性化なし，非優位ステレオタイプの特性活性化），優位ステレオタイプ抑制（優位ステレオタイプ抑制あり，優位ステレオタイプ抑制なし）であり，3×2 の参加者間要因計画であった。従属変数は，対象集団に対する優位ステレオタイプの判断であった。

実験参加者

大学生 318 名（男性 160 名，女性 155 名，不明 3 名；平均年齢 19.80 歳， $SD = 1.61$ ）に以下の 12 種類の質問票をランダムに配布した。回答項目に欠損のあった 31 名のデータを分析から除外し，287 名のデータが分析に用いられた。なお，予備調査での参加者とは異なる参加者であった。

材料

配布された質問票は，表面上，調査者が異なる 2 つの質問票がセットになったものであった。1 つ目の質問票は「文章の構成能力に関する調査」と称され，「調査 A」と「調査 B」で構成されていた。2 つ目の質問票は「人物の印象に関する研究の予備調査」と称されていた。

1 つ目の質問票の「調査 A」は，乱文構成課題であり，これによって，代替思考活性化の操作を行った。具体的には，複数の単語からなる単語セット 10 問で構成されており，それぞれの単語セットにおいて，複数の単語を並び変え，意味が通る文章を完成させるというものであった。単語セットの例を Table 4.2.1 に示す。優位ステレオタイプの特性活性化条件の単語セットは，予備調査に基づいた男性または女性の優位ステレオタイプの特性語に関する文章が完成され

Table 4.2.1
乱文構成課題で使用した単語セットの例

優位ステレオタイプの特性活性化条件の単語セット(男性対象集団条件)
している, 毎週末, 必ず, 彼は, 運動を (彼は毎週末必ず運動をしている)
信じている, 自分が, 彼は, 人間だと, 能力のある (彼は自分が能力のある人間だと信じている)
優位ステレオタイプの特性活性化条件の単語セット(女性対象集団条件)
いつも, 行動している, 彼女は, 一緒に, 誰かと (彼女はいつも誰かと一緒に行動している)
自分の, とても, 身なりを, 気にする, 彼女は (彼女はとても自分の身なりを気にする)
非優位ステレオタイプの特性活性化条件の単語セット(男性対象集団条件)
なんでも, 取り組む, 熱心に, 彼は (彼はなんでも熱心に取り組む)
優しい, 誰にでも, 彼は, 人間だ (彼は誰にでも優しい人間だ)
非優位ステレオタイプの特性活性化条件の単語セット(男性対象集団条件)
人だ, 静かな, 彼女は (彼女は静かな人だ)
苦手だ, 彼女は, 騒ぐのが, 大勢で (彼女は大勢で騒ぐのが苦手だ)
活性化なし条件の単語セット
目指している, 上野を, 電車で, 彼は (彼は電車で上野を目指している)
到着する, 少しで, もう, 目黒に (もう少しで目黒に到着する)
注) 括弧内は正しい文例。

るように作成されていた。活性化なし条件の単語セットは、男性または女性ステレオタイプとは無関連な中性的な文章が完成されるように作成されていた。

なお、活性化なし条件の単語セットは、男性が対象集団である場合と、女性が対象集団である場合ともに同様のものではなかった。非優位ステレオタイプの特性活性化条件の単語セットは、予備調査に基づいた男性または女性の非優位ステレオタイプの特性語に関する文章が完成されるように作成されていた。

続いて「調査 B」では、男性または女性のイメージを 5 分間で記述させる課題を行った。その記述の際に優位ステレオタイプ抑制の操作を行った。具体的に

は「以下の記述欄に男性（または女性）のイメージについて記述してください。」という教示があり、その下には記述欄があった。このとき、優位ステレオタイプ抑制あり条件にのみ、「多くの一般的な男性（または女性）に当てはまると思われることは絶対に記述しないようにしてください」という、優位ステレオタイプを抑制させるための教示が記載されていた。優位ステレオタイプ抑制なし条件には、そのような教示は記載されていなかった。この、男性または女性のイメージに関する記述は優位ステレオタイプ抑制の操作チェックとしても用いられた。

2つ目の質問票では、4人の人物を提示し、それぞれの人物について印象評定を求めた。1人目は高齢者、2人目はアメリカ人、3人目と4人目は男性または女性であった。男性（女性）について評定する前に女性（男性）について評定すると、評定が前の集団の評定に影響される可能性が考えられるので、3人目と4人目の人物は、対象集団によって異なっていた。男性が対象集団の場合では、3人目は男性、4人目は女性であった。女性が対象集団の場合では、3人目は女性、4人目は男性であった。3人目の男性または女性の印象評定によって、参加者が優位ステレオタイプの判断を行うかどうかを測定した。具体的には、男性が対象集団の場合においては、男性の優位ステレオタイプの特性語である「運動好きな」、「受け身な」、「自信のない」（逆転項目）の3項目に対し、7件法（1：全くあてはまらない—7：非常によくあてはまる）で回答を求めた。女性が対象集団の場合においては、女性の優位ステレオタイプの特性語である「集団行動をする」、「おしゃれ好きな」、「無口な」（逆転項目）の3項目に対して7件法（1：全くあてはまらない—7：非常によくあてはまる）で回答を求めた。なお、実験の目的を参加者に予測させないために、フィラー項目として2項目が加えられていた。

手続き

実験は授業時間内を利用し、一斉調査形式で行った。実験者は、質問票を参加者に配布し、課題間の影響を最小限に抑えるため、セットになっている2つの質問票は調査者が異なることと、1つ目の質問票は「文章の構成能力に関する調査」であり、2つ目の質問票は「人物の印象に関する調査」であることを教示した。実験は実験者の指示に従って進められた。実験後、文書によるデブリーフィングを行った。

4.2.3 結果

操作チェック

実際に参加者が優位ステレオタイプを抑制していたかどうかを検討した。以下の方法で、1つ目の質問票における「調査B」の人物像記述課題で参加者が記述した人物のイメージが、どの程度優位ステレオタイプの的であるかを評定した。具体的には、まず、本論文の著者1名が対象集団ごとに、記述を複数のカテゴリーに分類した。男性対象集団の記述は29個のカテゴリーに分類され、女性対象集団の記述は30個のカテゴリーに分類された。次に、予備調査の参加者とは異なる大学生、大学院生17名（男性10名、女性7名；平均年齢21.94歳、 $SD = 1.66$ ）によって、それぞれのカテゴリーが男性または女性の優位ステレオタイプの特性にどの程度当てはまるかが評定された。具体的には、男性対象集団の記述から得られたカテゴリーを評定する際には、予備調査で得られた男性の優位ステレオタイプの特性語である「運動好きな」、「受け身な」、「自信がある」という特徴を持った男性を想像させ、その人物にどの程度当てはまるかについて7

件法（1：全くあてはまらない—7：非常によくあてはまる）で回答を求めた。女性対象集団の記述から得られたカテゴリーを評定する際には、予備調査で得られた女性の優位ステレオタイプの特性語である「集団行動をする」、「おしゃれ好きな」、「おしゃべりな」という特徴を持った女性を想像させ、その人物にどの程度当てはまるかについて 7 件法（1：全くあてはまらない—7：非常によく当てはまる）で回答を求めた。

次に、それぞれのカテゴリーが男性または女性の優位ステレオタイプの特性にどの程度当てはまるかを評定した値について、カテゴリーごとに全参加者の平均値を算出した。この得点をカテゴリー得点とした。男性対象集団には 29 個のカテゴリーがあり、女性対象集団には 30 個のカテゴリーがあり、それぞれにカテゴリー得点があることになる。次に、「調査 B」の人物像記述課題において参加者が記述したそれぞれの内容に対し、該当するカテゴリー得点を当てはめた。1つの記述内容に対して、該当するカテゴリーが 1つの場合または複数の場合が存在する。それぞれの記述に当てはめたカテゴリー得点について、参加者ごとの平均値を算出した。さらに、参加者ごとの平均値について、対象集団ごとの平均値を算出した。この値を男性対象集団では、人物像記述課題の男性ステレオタイプ度得点とし、女性対象集団では、人物像記述課題の女性優位ステレオタイプ度得点とした。これらの得点に関して、代替思考活性化（優位ステレオタイプの特性活性化、活性化なし、非優位ステレオタイプの特性活性化）×優位ステレオタイプ抑制（優位ステレオタイプ抑制あり、優位ステレオタイプ抑制なし）の分散分析を行った。その結果、女性優位ステレオタイプ度得点の分析について、優位ステレオタイプ抑制の主効果のみが有意であった（ $F(1, 141) = 10.16, p < .01$ ）。この主効果は、優位ステレオタイプ抑制あり条件（ $M = 4.74, SD = 0.76$ ）は、優位ステレオタイプ抑制なし条件（ $M = 5.08, SD = 0.56$ ）に比べ、

記述内容の優位ステレオタイプ度得点が低いことを示していた。記述の男性優位ステレオタイプ度得点の分析については、有意な効果はみられなかった。この結果から、女性対象集団においてのみ、優位ステレオタイプ抑制の操作は成功していたと考えられる。したがって、以下の分析では、女性対象集団についてのみ扱う。

条件ごとの優位ステレオタイプの判断の強さの差異

非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性を検討するために、2つ目の質問票で測定した女性に対する優位ステレオタイプの判断について分析を行った。具体的には、女性対象集団における、「集団行動をする」、「おしゃれ好きな」、「無口な」(逆転項目)の3項目について、「全くあてはまらない」を1点—「非常によくあてはまる」を7点として得点化し、各評定項目の平均値を算出した。

分析を行う前に、女性ステレオタイプは参加者の性別で評定に差がある可能性があるため (e.g., Glick & Fiske, 1996; Swim, Aikin, Hall, & Hunter, 1995), 男性参加者と女性参加者の優位ステレオタイプの判断の得点の分布について確認を行った。女性参加者にとって女性集団は内集団であるため、個人化して捉えている可能性がある。そのため、女性参加者が、女性を評価する際は、さまざまな特性を用いて捉えていると考えられる。一方、男性参加者にとって女性集団は外集団であるため、女性参加者に比べ、少ない特性を用いて捉えている可能性がある。女性参加者は、男性参加者に比べ、女性に対してどのような特性についても当てはまりの程度を高く評定する可能性が考えられる。実際に、本研究の優位ステレオタイプの判断の得点の分布を確認すると、男性参加者の優位ステレオタイプの判断の得点の分布は、1点から7点であったが、女性参加者の

Table 4.2.2
男性参加者の条件ごとの優位ステレオタイプの判断の得点

	優位ステレオタイプ抑制なし			優位ステレオタイプ抑制あり		
	優位ステレオタイプの 特性活性化	活性化なし	非優位ステレオタイプの 特性活性化	優位ステレオタイプの 特性活性化	活性化なし	非優位ステレオタイプの 特性活性化
「集団行動をする」項目	6.00(1.04)	6.43(0.85)	6.33(0.78)	6.18(1.08)	5.60(1.26)	6.33(0.49)
「おしゃれ好きな」項目	5.93(0.92)	5.79(0.89)	6.00(0.60)	6.18(1.08)	6.00(0.94)	5.75(0.75)
「無口な」項目 ^{a)}	4.93(1.07)	3.79(1.19)	4.83(1.59)	5.64(1.21)	4.70(0.82)	4.17(0.94)

注) 括弧内は標準偏差。得点の範囲は1-7。^{a)}は逆転項目。

優位ステレオタイプの判断の得点の分布は、3点から7点であった。女性参加者の方が、女性集団を評定する際にさまざまな特性について当てはまると評定するため、本研究で用いた項目についても当てはまる程度を高く評定した可能性がある。本研究の女性参加者の評定は、優位ステレオタイプの判断の測定ではなく、個人化された対象、つまり、具体的にさまざまな人物を思い浮かべ評定していたために、得点の分布が高い方向に偏り、天井効果が生じていた可能性があり、適切に優位ステレオタイプの判断を測定できていなかったと考えられる。したがって、以降の分析では、男性参加者についてのみ分析を行った。

男性参加者が評定した女性対象集団の3項目（「集団行動をする」、「おしゃれ好きな」、「無口な」（逆転項目））それぞれの優位ステレオタイプの判断の得点の平均値（Table 4.2.2）に関して、代替思考活性化（優位ステレオタイプの特性活性化，活性化なし，非優位ステレオタイプの特性活性化）×優位ステレオタイプ抑制（優位ステレオタイプ抑制あり，優位ステレオタイプ抑制なし）の分散分析を行った。分析の結果，Figure 4.2.1 に示すように，男性参加者が評定した「無口な」（逆転）項目の分析について，代替思考活性化の主効果が有意であった（ $F(2, 67) = 5.20, p < .01$ ）。さらに，代替思考活性化×優位ステレオタイプ抑制の交互作用効果が有意であった（ $F(2, 67) = 3.24, p < .05$ ）。代替思考活性化の主効果が有意だったので，多重比較を行ったところ，優位ステレオタイプの特性活性化条件は，活性化なし条件と非優位ステレオタイプの特性活性化条件

に比べ、優位ステレオタイプの判断の得点が高かった ($p < .01, p < .05$)。代替思考活性化×優位ステレオタイプ抑制の交互作用効果の結果に基づき、単純主効果の検定を行った結果、活性化なし条件では優位ステレオタイプ抑制の単純主効果が有意傾向であった ($F(1, 67) = 3.58, p < .10$)。この結果は、活性化なし条件において、優位ステレオタイプ抑制あり条件は優位ステレオタイプ抑制なし条件に比べ、優位ステレオタイプの判断の得点が高いことを示していた。さらに、優位ステレオタイプ抑制なし条件では代替思考活性化の単純主効果が有意であり ($F(2, 67) = 4.06, p < .05$)、多重比較を行った結果、優位ステレオタイプ抑制なし条件において、活性化なし条件は、優位ステレオタイプの特性活性化条件、非優位ステレオタイプの特性活性化条件に比べ、優位ステレオタイプの判断の得点が低かった ($p < .05$)。さらに、優位ステレオタイプ抑制あり条件では代替思考活性化の単純主効果が有意であり ($F(2, 67) = 4.62, p < .05$)、多重比較を行った結果、優位ステレオタイプ抑制あり条件において、非優位ステレオタイプの特性活性化条件は、優位ステレオタイプの特性活性化条件に比べ、優

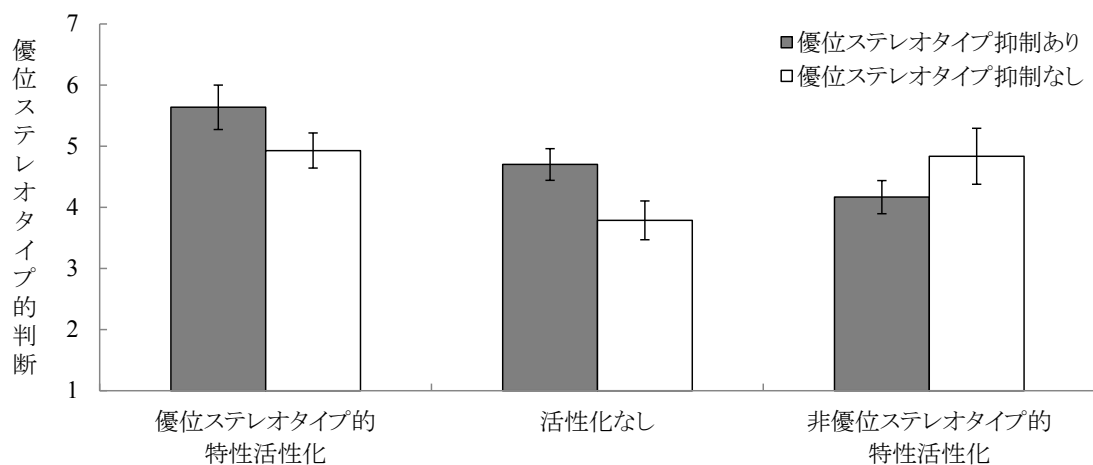


Figure 4.2.1. 優位ステレオタイプの判断の得点と標準誤差
(男性参加者による女性優位ステレオタイプの特性「無口な」項目の評定)

位ステレオタイプの判断の得点が低かった ($p < .01$)。なお、「おしゃれ好きな」項目と「集団行動をする」項目については、有意な効果はみられなかった。このように、男性参加者が評定した女性の優位ステレオタイプの特性語における「おしゃれ好きな」項目と「集団行動をする」項目の2項目では有意な効果は得られなかった理由として、有意な効果が得られなかった2項目は、すべての条件において、取りうる最大値が7点のところ6点前後の高い値を取っており、天井効果が生じていたことが考えられる。

4.2.4 考察

本研究では、優位ステレオタイプを抑制する際の、非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性について検討した。具体的には、次の2つの仮説を検討した。第一に、単純に優位ステレオタイプ抑制を行うと逆説的効果が生じる、つまり、活性化なし条件では、優位ステレオタイプ抑制あり条件は優位ステレオタイプ抑制なし条件に比べ、優位ステレオタイプの判断の得点が高いと予測した。第二に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減される、つまり、優位ステレオタイプ抑制あり条件では、非優位ステレオタイプの特性活性化条件は、活性化なし条件や優位ステレオタイプの特性活性化条件に比べ、優位ステレオタイプの判断の得点が低いと予測した。その結果、女性集団に対する男性参加者の評価についてのみに以下の結果が得られた。まず、活性化なし条件では、優位ステレオタイプ抑制を行った場合は行わなかった場合に比べ、優位ステレオタイプの判断が高いことが示された。この結果は、第一の仮説を支持するものである。さらに、優位ステレオタイプ抑制あり条件では、非優位ステレオタイプの特性が活性化された場合は

優位ステレオタイプの特性が活性化された場合に比べ、優位ステレオタイプの判断の得点が低いことが示された。この結果は、第二の仮説を一部支持するものである。

つまり、先行研究で示されている通り (e.g., Macrae et al., 1994; Monteith et al., 1998), 単純に優位ステレオタイプ抑制を行った場合は逆説的效果が生じることが示され、さらに、優位ステレオタイプを抑制するとき、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、逆説的效果が低減されやすいという可能性が示唆された。

本研究では、男性参加者が女性の優位ステレオタイプを抑制する際、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的效果が低減されやすいという結果が得られたが、それは、一定の条件に限られていた。具体的には、女性集団に対する男性参加者における女性優位ステレオタイプの特性語の「無口な」項目においてのみ得られた結果であった。したがって、男性集団についてや、女性集団に対する女性参加者の結果については、どのような結果が得られるかは、本研究からはわからない。男性と女性の非優位ステレオタイプの特性について、日常的な接触頻度、接触期間、接触が直接的かどうかについて、大きな差はないと考えられる。このことから、男性と女性の非優位ステレオタイプの特性の利用可能性については、先験的にはわからない。

しかし、女性ステレオタイプはこれまで多くの研究で扱われており (e. g., Blair & Banaji, 1996; Blair, Ma, & Lenton, 2001; Kray, Thompson, & Galinsky, 2001; Oe & Oka, 2003; Rudman & Phelan, 2010; Steele & Ambady, 2006), 日本においても存在することが示されている (伊藤, 1978)。男性集団よりも女性集団に対するステレオタイプが強く持たれているため、女性集団に対してのみ本研究の結果が得られた可能性がある。そこで、以降の研究では、ステレオタイプを強く持たれ

ていると考えられる女性集団を対象とする。

以上のことから、本研究で得られた結果が、頑健で一般化可能性のあるものであるか検討する必要がある。そこで、研究 3 では、研究 2 での知見の頑健性の確認と、顕在的な判断の背後にある認知的メカニズムを検討するために、実験室実験によって優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定する。

4.3 研究 3：非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての役割

—優位ステレオタイプの特性に対する

アクセス可能性の潜在的測定による検討—³

4.3.1 問題

研究 3 では、優位ステレオタイプを抑制する際の、非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性を、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定することによって検討する。研究 2 では、優位ステレオタイプの判断を顕在的に測定して、優位ステレオタイプ抑制を行う際に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、逆説的效果が低減されやすい可能性が示された。本研究では、研究 2 での知見の頑健性を確認し、顕在的な判断の背後にある認知的メカニズムを検討するために、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定することで、優位ステレオタイプ抑制を行う際の、非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性を検討する。

本研究では、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用する条件を設けて、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用する条件との比較を行う。さらに、非優位ステレオタイプの特性のなかでも、対象集団に当てはまる程度によって代替思考としての有効性が異なるかどうかを探索的に検討する。非優位ステレオタイプの特性の非優位性による代替思考としての有効性の違いを、アクセス可能性の観点から、以下のように考える。

³ 本研究は、日本大学の研究倫理委員会の事前審査を受けた。

対象集団に対する当てはまりの程度が強い上位の非優位ステレオタイプの特性はアクセス可能性が高く、当てはまりの程度が相対的に弱い下位の非優位ステレオタイプの特性はアクセス可能性が相対的に低いという可能性が考えられる。なぜなら、当てはまりの程度が強い上位の非優位ステレオタイプの特性ほど、対象集団に接触するたびに強く活性化されているためアクセス可能性が高くなると考えられるからである。そして、序論の 2.3 で述べたように、Wegner の思考抑制のモデルに基づくと、アクセス可能性が高い代替思考は、思考上に浮かび続きやすいため、アクセス可能性が低い代替思考に比べ、実行過程および監視過程の働きが弱くてもよく、抑制対象に対するアクセス可能性が高まりにくいため、逆説的効果が低減されやすいと考えられる。このようにアクセス可能性の観点から考えると、非優位ステレオタイプの特性のなかでも、当てはまりの程度が強い上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合は、思考上に浮かび続きやすいため、比較的、実行過程および監視過程の働きが弱くてもよく、抑制対象に対するアクセス可能性が高まりにくく、逆説的効果が低減されやすいと考えられる。一方、非優位ステレオタイプの特性のなかでも、当てはまりの程度が弱い下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合は、思考上に浮かび続けることが難しいため、実行過程および監視過程を強く働かさなければならず、抑制対象に対するアクセス可能性が高まりやすく、逆説的効果は低減されにくいと考えられる。

本研究では、具体的には、女性ステレオタイプを題材として取り上げ、予備調査によって、優位ステレオタイプの特性語、上位の非優位ステレオタイプの特性語、下位の非優位ステレオタイプの特性語、反ステレオタイプの特性語を選定した。まず、女性に関する特性語についてその当てはまり度を評定させ、特性語をクラスタ分析によって分類した。当てはまり度が最も高いクラスタか

ら優位ステレオタイプの特性語を選定し、2番目に当てはまり度が高いクラスタから上位の非優位ステレオタイプの特性語を選定し、3番目に当てはまり度が高いクラスタから下位の非優位ステレオタイプの特性語を選定した。反ステレオタイプの特性語は、優位ステレオタイプの特性語の反対語を調査し、選定した。予備調査によって選定された特性語を実験材料として、それぞれの特性語を活性化させ代替思考として利用されやすい状態で、優位ステレオタイプ抑制の操作を行った。具体的には、上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考とする条件、下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考とする条件、反ステレオタイプの特性を代替思考とする条件を設けた。さらに、抑制前に何も活性化させない単純抑制条件も設けた。優位ステレオタイプ抑制の後、語彙判断課題によって、優位ステレオタイプの特性語に対する反応時間を測定した。語彙判断課題での反応時間が短いほど、その単語が意味する概念へのアクセス可能性が高いことを示す (e.g., Galinsky & Moskowitz, 2007; Macrae et al., 1994)。

上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考とする条件は、単純抑制条件、反ステレオタイプの特性を代替思考とする条件、下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考とする条件に比べ、優位ステレオタイプの特性語に対する反応時間が長くなるという可能性を検討する。

4.3.2 方法

予備調査

従属変数の測定に使用する女性ステレオタイプ関連語（優位ステレオタイプの特性語）と、抑制方略の操作に使用する女性の上位の非優位ステレオタイプの特性語と下位の非優位ステレオタイプの特性語、反ステレオタイプの特性語

を選定するために予備調査を行った。大学生 138 名（男性 55 名，女性 78 名，不明 5 名；平均年齢 18.35 歳， $SD = 1.38$ ）に対して，女性に関する 39 語の特性語について，「どの程度女性に当てはまるか」を 7 件法（1：全く当てはまらない—7：非常によく当てはまる）で尋ねた。39 語の特性語は，女性ステレオタイプに関する 32 語（沼崎・小野・高林・石井，2006）と，女性性に関する語 10 語（伊藤，1978）のうち，同じ意味の語は除いたものであった。欠損値のあった 15 名を分析から除き，123 名のデータが分析に用いられた。

まず，項目ごとの平均値を算出し，その得点を女性ステレオタイプ当てはまり度得点とした。得点が高いほど，女性ステレオタイプに当てはまる程度が強いことを示す（Table 4.3.1）。条件ごとにひとつの特性を表す特性語を 3 つずつ選定するために，評定された 39 語をクラスタ分析（平方ユークリッド距離，ワード法）によって 5 つのクラスタに分類した（Figure 4.3.1）。平均値が高いクラスタから順に第 1 クラスタ—第 5 クラスタとした。クラスタごとに，そこに含まれる項目の女性ステレオタイプ当てはまり度得点の平均値を求めた（Table 4.3.2）。

それぞれの特性語の選定方法は以下の通りである。女性ステレオタイプ関連語（優位ステレオタイプの特性語）は，女性ステレオタイプ当てはまり度得点が最も高いクラスタ（第一クラスタ）に含まれる項目のうち，得点が高い 3 項目を選定した（「うわさ好き」，「おしゃべり」，「依存的」）。次に，上位の非優位ステレオタイプの特性語と下位の非優位ステレオタイプの特性語を以下のように選定した。第 1 クラスタ，第 2 クラスタ，第 3 クラスタは，そこに含まれるすべての項目の女性ステレオタイプ当てはまり度得点が 4 点（「どちらでもない」）以上であった。第 4 クラスタ，第 5 クラスタには，3 点（「あまり当てはまらない」）の項目が含まれていた。このことから，第 4 クラスタと第 5 クラスタは，

女性ステレオタイプではないと認識されていた可能性があるため、上位の非優位ステレオタイプの特性語と下位の非優位ステレオタイプの特性語は、第2クラスと第3クラスから選定した。上位の非優位ステレオタイプ特性語は、女性ステレオタイプ当てはまり度得点が二番目に高いクラス（第2クラス）に含まれる項目のうち、得点が高い3項目を選定した（「おしゃれな」、「家庭的」、「かわいい」）。下位の非優位ステレオタイプ特性語は、女性ステレオタイプ当てはまり度得点が三番目に高いクラス（第3クラス）に含まれる項目のうち、得点が高い3項目を選定した（「繊細」、「控えめ」、「受け身的」）。なお、条件によって文字数が大きく異なることを避けるために、5文字以内の項目を選定した。

次に、反ステレオタイプの特性語を選定するために、選定された女性ステレオタイプ関連語3語それぞれの反対語を調査した。異なる大学生22名（男性11名、女性11名；平均年齢19.64歳、 $SD = 1.19$ ）に、「うわさ好き」、「おしゃべり」、「依存的」それぞれの反対語を回答するように求めた。その際に、反対語とは反対の意味をもつ言葉であり、打消し語ではないことを教示した。その結果、それぞれについて最も度数が多かった「無関心」、「無口」、「自立的」を反ステレオタイプの特性語とした。

Table 4.3.1
各特性語の女性ステレオタイプ当てはまり度得点の
平均値と標準偏差

特性語	平均値	標準偏差
うわさ好きな	5.70	1.12
おしゃべりな	5.63	1.15
おしゃれな	5.50	1.06
家庭的な	5.44	1.22
かわいい	5.44	1.05
愛嬌のある	5.31	0.96
色気のある	5.16	1.20
世話好きな	5.11	1.04
依存的な	5.04	1.22
おしとやかな	5.03	1.41
優しい	4.99	1.10
面倒見の良い	4.99	1.08
優雅な	4.98	1.27
繊細な	4.98	1.17
八方美人な	4.94	1.22
おっとりした	4.92	1.06
温かい	4.90	0.98
うるさい	4.86	1.20
献身的な	4.85	1.02
控えめな	4.81	1.29
流されやすい	4.76	1.41
受け身のな	4.63	1.24
親しみやすい	4.58	1.12
おせっかいな	4.56	1.16
気立ての良い	4.54	1.07
協力的な	4.54	1.02
純真な	4.53	1.16
口出しする	4.39	1.23
言葉使いのていねいな	4.37	1.19
謙虚な	4.35	1.12
臆病な	4.25	1.21
弱々しい	4.22	1.24
干渉的な	4.20	1.16
静かな	4.11	1.24
でしゃばりな	4.05	1.14
従順な	4.00	1.14
意見のない	3.76	1.28
頼りない	3.68	1.24
意志の弱い	3.68	1.34

注) 得点の範囲は1-7であった。

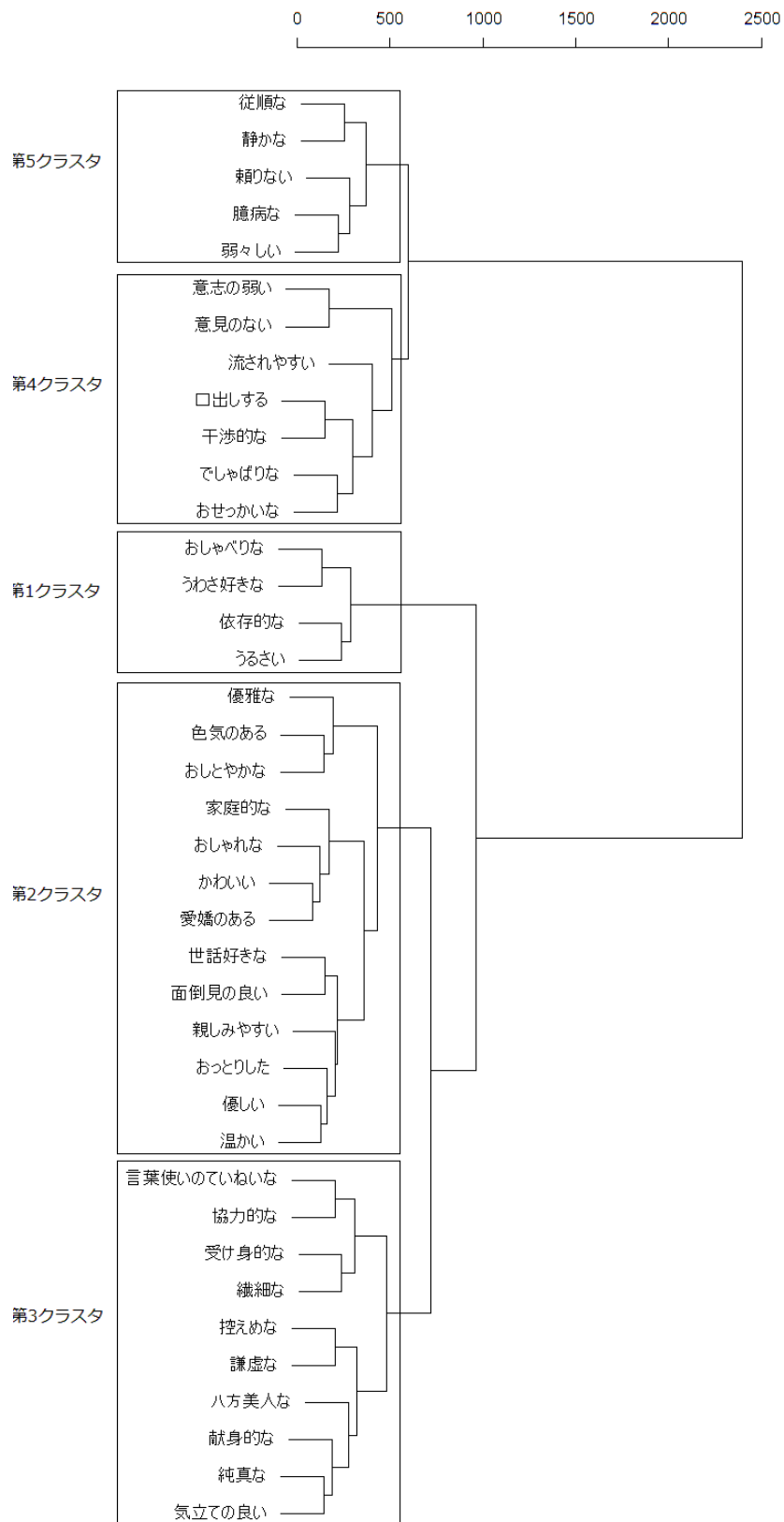


Figure 4.3.1 女性ステレオタイプ項目に対するクラスタ分析のデンドログラム

Table 4.3.2

クラスタごとの女性ステレオタイプ当てはまり度得点の平均値と標準偏差

	第1クラスタ	第2クラスタ	第3クラスタ	第4クラスタ	第5クラスタ
平均値	5.31	5.10	4.65	4.20	4.05
標準偏差	1.17	1.12	1.15	1.25	1.22

実験計画

抑制方略（単純抑制，上位の非優位ステレオタイプの特性代替思考，下位の非優位ステレオタイプの特性代替思考，反ステレオタイプの特性代替思考）を参加者間要因，単語の種類（女性ステレオタイプ関連語，女性ステレオタイプ無関連語）を参加者内要因とする 2 要因混合計画であった。従属変数は語彙判断課題での単語に対する反応時間であった。

参加者

大学生 48 名（男性 19 名，女性 29 名；平均年齢 20.67 歳， $SD = 3.17$ ）が 4 条件に無作為に割り当てられた。なお，予備調査での参加者とは異なる参加者であった。

実験手続き

48 名の参加者は，1 名ずつ実験室での実験に参加した。実験参加同意書に署名した後，以下の 3 つの課題を行った。

語彙判断課題 1: 代替思考の活性化 この課題を用いて代替思考の内容を活性化させる操作を行った。参加者はパソコンの画面上に提示される文字列に意味があるかどうかを，キーを押して判断した。条件ごとに，提示される文字列が異なっていた。単純抑制条件では，人物の特性ではなくジェンダーに関連のない単語が提示された。Blair & Banaji (1996) を参考に，「えんぴつ」，「すいみ

ん」、「たいふう」を単語として提示した。上位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件では、予備調査で選定された上位の非優位ステレオタイプの特性語（「おしゃれ」、「かていてき」、「かわいい」）が提示された。下位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件では、予備調査で選定された下位の非優位ステレオタイプの特性語（「せんさい」、「ひかえめ」、「うけみてき」）が提示された。反ステレオタイプの特性代替思考条件では、予備調査で選定された反ステレオタイプの特性語（「むかんしん」、「むくち」、「じりつてき」）が提示された。非単語は3語であり、意味のない文字列として4つの条件の単語に含まれる文字を組み合わせて作られた。具体的には、「つおいか」、「いてかく」、「むふわみつ」であった。

語彙判断課題の試行は以下の流れで行われた。注視点が1,000 ms提示された後でターゲット刺激の文字列が提示され、参加者のキー入力で文字列が消えるように設定されていた。次にブランクが1,000 msあり、その後、次の試行の注視点が提示されるという流れであった。本試行の前に、練習試行を6試行行った。なお、練習で使用された文字列は、女性ステレオタイプとは関連性がなく、本試行では提示されなかった。本試行は、ステレオタイプを活性化するために語彙判断課題を用いている Hess, Hinson, & Statham (2004) に基づき、30試行を3ブロック行った。それぞれのブロックでは、15の単語と15の非単語が提示された。それぞれのブロック内では、1つの文字列が5回繰り返し提示された。文字列の提示順序は、参加者ごとに各ブロックで無作為であった。

文完成課題 この課題を用いて、優位ステレオタイプ抑制の操作を行った。参加者は、「女性は」から始まる文を6つ作成する課題を行った (Oe & Oka, 2003)。その際、人物を形容する言葉を用いること、同じ言葉は繰り返し使用しないこと、1つの文には1つだけ言葉を書くことが教示された。さらに、『女性はどうわ

さ好き、おしゃべり、依存的』といったイメージがあることが調査されています。しかし、固定概念だけで判断することは社会的によくないと考えられますので、『うわさ好き、おしゃべり、依存的』といったイメージに基づいて書かないように注意してください」という優位ステレオタイプを抑制させる教示が行われた。

語彙判断課題 2：優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性の測定
この課題では、単語の判断に要した時間を測定し、従属変数とした。ここでの反応時間が短いほど、その単語が意味する概念へのアクセス可能性が高いことを示す (e.g., Galinsky & Moskowitz, 2007; Macrae et al., 1994)。語彙判断課題は、ステレオタイプに対するアクセス可能性を測定するための課題として多くの先行研究で用いられている (e.g., Galinsky & Moskowitz, 2000; Galinsky & Moskowitz, 2007; Gordijn et al., 2004; Macrae et al., 1994; Oe & Oka, 2003; Wyer, 2007; 山本・岡, 印刷中)。

語彙判断課題 1 と同様に、参加者はパソコンの画面上に提示される文字列に意味があるかどうかを、キーを押して判断した。提示された文字列は、予備調査で選定された女性ステレオタイプ関連語 (優位ステレオタイプの特性語) 3 語 (「うわさずき」、「おしゃべり」、「いぞんてき」と、女性ステレオタイプ無関連語 3 語 (「きゅうくつ」、「しおからい」、「ほろにがい」)、非単語 6 語 (「いうついお」、「いわくしら」、「ぞがさやう」、「かんにゆず」、「べおてろき」、「きりしほき」) であった。非単語は、意味のない文字列として、女性ステレオタイプ関連語と女性ステレオタイプ無関連語に含まれる文字を組み合わせで作られた。

1 試行の流れは、語彙判断課題 1 と同様であり、注視点が 1,000 ms 提示された後で、ターゲット刺激の文字列が提示され、参加者のキー入力で文字列が消えるように設定されていた。次にブランクが 1,000 ms あり、その後、次の試行の

注視点が提示された。練習試行も、語彙判断課題 1 と同様の内容で行われた。本試行は、4 ブロックで構成され、1 ブロックには 12 試行あり、そのうち 6 試行は単語であり（女性ステレオタイプ関連語が 3 試行と女性ステレオタイプ無関連語が 3 試行）、6 試行は非単語であった。それぞれのブロック内では、同じ文字列が繰り返し提示されることはなかった。文字列の提示順序は、参加者ごとに各ブロックで無作為であった。

すべての課題が終わった後、デブリーフィングを行った。

4.3.3 結果

分析対象者

実験目的を指摘した 1 名のデータを以下の分析から除外し、47 名のデータを分析に用いた。除外した後の条件ごとの人数は、単純抑制条件 12 名、反ステレオタイプの特性代替思考条件 12 名、上位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件 11 名、下位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件 12 名であった。

操作チェック

抑制方略の操作の有効性を確認するために、文完成課題において参加者が作成した文の内容を分析した。目的を知らない 2 名の評定者が、文の内容について評定した。具体的には、まず、上位の非優位ステレオタイプの特性語 3 語（「おしゃれな」、「家庭的」、「かわいい」）を提示して、それらの特性が文の内容にどの程度当てはまるかを 7 件法（1：全く当てはまらない—7：非常によく当てはまる）で評定を求めた。同様に、下位の非優位ステレオタイプの特性語（「繊細」、「控えめ」、「受け身的」）と、反ステレオタイプの特性語（「無関心」、「無口」、

「自立的」)についても、それぞれの特性が文の内容にどの程度当てはまるか評定を求めた。2名の評定者の相関は、上位の非優位ステレオタイプの特性語に関する評定は $r = .74$ 、下位の非優位ステレオタイプの特性語に関する評定は $r = .57$ 、反ステレオタイプの特性語に関する評定は $r = .39$ であった。2名の評定者の評定値の平均を算出し、それぞれの値を、上位の非優位ステレオタイプ度得点、下位の非優位ステレオタイプ度得点、反ステレオタイプ度得点とした。条件ごとの平均値と標準偏差を Table 4.3.3 に示した。

上位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件は、他の条件に比べ、上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用していたかどうかを検討するために、上位の非優位ステレオタイプ度得点に対して一元配置の分散分析を行った。その結果、有意な結果は得られなかった ($F(3, 43) = 1.32, n.s.$)。しかし、上位の非優位ステレオタイプ度得点は、4つの条件のうち、上位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件で最も高かった。このことから、有意な差は得られなかったが、上位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件は、他の条件に比べ、上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用していた可能性がある。

次に、下位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件は、他の条件に比べ、下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用していたかどうかを検討するために、下位の非優位ステレオタイプ度得点に対して同様の分散分析を行った。その結果、主効果が有意であった ($F(3, 43) = 4.27, p < .05$)。多重比較を行ったところ、下位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件は、単純抑制条件に比べ、下位の非優位ステレオタイプ度得点が有意に高かった ($p < .05$)。さらに、優位傾向ではあったが、下位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件は、上位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件に比べ、下位の非優

Table 4.3.3
条件ごとの上位の非優位ステレオタイプ度得点, 下位の非優位ステレオタイプ度得点, 反ステレオタイプ度得点の平均値と標準偏差

	単純抑制条件	反ステレオタイプの特性代替思考条件	上位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件	下位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件
上位の非優位ステレオタイプ度得点	3.79(1.98)	4.25(1.88)	4.91(2.21)	3.33(1.45)
下位の非優位ステレオタイプ度得点	2.58(0.53)	4.00(1.67)	2.95(1.29)	4.54(1.90)
反ステレオタイプ度得点	2.83(1.20)	2.83(1.21)	2.55(1.16)	2.42(0.91)

注) 括弧内は標準偏差。

位ステレオタイプ度得点が高かった ($p < .10$)。反ステレオタイプの特性代替思考条件との間には有意な差は得られなかったが、下位の非優位ステレオタイプ度得点は、4つの条件のうち、下位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件で最も高かった。このことから、下位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件は、他の条件に比べ、下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用していた可能性がある。

次に、反ステレオタイプの特性代替思考条件は、他の条件に比べ、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用していたかどうかを検討するために、反ステレオタイプ度得点に対して同様の分散分析を行った。その結果、有意な結果は得られなかった ($F(3, 43) = 0.38, n.s.$)。しかし、反ステレオタイプ度得点は、反ステレオタイプの特性代替思考条件と単純抑制条件で同点であり、この2条件の得点は、上位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件と下位の非ステレオタイプの特性代替思考条件よりも高かった。このことから、有意な差は得られなかったが、反ステレオタイプの特性代替思考条件は、上位の非ステレオタイプの特性代替思考条件と下位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件に比べ、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用していた可能性がある。なお、反ステレオタイプの特性代替思考条件と単純抑制条件が同点であった理由として、ステレオタイプを抑制する際には反ステレオタイプが代替思考として使用されやすいことが示されているため (Galinsky & Moskowitz, 2007)、本研究においても、単純抑制条件では反ステレオタイプの特性が代替思考として使

用されていた可能性がある。

このように、すべての条件では有意な差はえられなかった。しかしながら、条件ごとの平均値をみると、抑制方略の操作が有効であった可能性が考えられる。

語彙判断課題における反応時間

語彙判断課題 2 における女性ステレオタイプ関連語 3 語と女性ステレオタイプ無関連語 3 語に対する反応時間について分析を行った。それぞれの単語は、語彙判断課題 2 において 4 回提示されているため、参加者 1 名につき 24 試行での反応時間が分析対象となった。これらの試行での誤答率は 3.46% であり、誤答の場合の反応時間を除いて分析を行った。まず、データの分布を正規分布に近似させるために、すべての反応時間を対数変換した。参加者の反応時間を女性ステレオタイプ関連語と女性ステレオタイプ無関連語ごとに平均した値を以下の分析で使用した。

抑制方略条件ごとの逆説的効果の差異

抑制方略によって逆説的効果が異なるかどうかを検討するために、抑制方略（単純抑制、上位の非優位ステレオタイプの特性代替思考、下位の非優位ステレオタイプの特性代替思考、反ステレオタイプの特性代替思考）×単語の種類（女性ステレオタイプ関連語、女性ステレオタイプ無関連語）の 2 要因の分散分析を反応時間に対して行った。その結果、2 要因の交互作用効果が有意傾向であった ($F(3, 43) = 2.42, p < .10$; Table 4.3.4)。

抑制方略×単語の種類の 2 要因の交互作用効果が有意傾向であったことから、単純主効果の検定を行った。その結果、女性ステレオタイプ関連語条件におい

Table 4.3.4.
各単語に対する抑制方略条件ごとの対数変換後の「うわさ好き」、「おしゃべりな」、「いぞんてき」の平均反応時間と標準偏差

	単純抑制条件 (n = 12)		反ステレオタイプの特性 代替思考条件 (n = 12)		上位の非優位ステレオタイプの特性 代替思考条件 (n = 11)		下位の非優位ステレオタイプの特性 代替思考条件 (n = 12)	
	女性ステレオタイプ 関連語	女性ステレオタイプ 無関連語	女性ステレオタイプ 関連語	女性ステレオタイプ 無関連語	女性ステレオタイプ 関連語	女性ステレオタイプ 無関連語	女性ステレオタイプ 関連語	女性ステレオタイプ 無関連語
平均値	6.34 (575)	6.40 (607)	6.36 (585)	6.40 (606)	6.51 (687)	6.48 (656)	6.38 (591)	6.38 (594)
標準偏差	0.19 (107.11)	0.16 (99.85)	0.13 (74.43)	0.13 (78.29)	0.19 (144.00)	0.14 (90.42)	0.12 (73.81)	0.15 (96.56)

注) 括弧内は対数変換前の反応時間を示す。

て抑制方略の主効果が有意であり ($F(3, 86) = 2.87, p < .05$)、多重比較を行ったところ、女性ステレオタイプ関連語条件において、上位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件は単純抑制条件に比べ、反応時間が長かった ($p < .10$)。さらに、単純抑制条件において単語の種類の主効果が有意であり、単純抑制条件において、女性ステレオタイプ関連語条件は女性ステレオタイプ無関連語条件に比べ、反応時間が短かった ($F(1, 43) = 4.99, p < .05$)。

以上の結果が得られたが、2 要因の交互作用効果は有意傾向であった。そのため、女性ステレオタイプ関連語 3 語（「うわさ好き」、「おしゃべり」、「依存的」）の内容について検討を行った。予備調査で行ったクラスタ分析では、「うわさ好き」と「おしゃべりな」の距離が最も近かった。さらに、予備調査での女性ステレオタイプ当てはまり度得点を確認すると、女性ステレオタイプに関する特性語である 39 語のうち、「うわさ好き」は得点が最も高い特性語であり、「おしゃべりな」は 2 番目に得点が高い特性語であったが、「依存的」は 9 番目に得点が高い特性語であった。これらの予備調査の結果から、「うわさ好き」と「おしゃべりな」は同じ特性を表す特性語であったが、「依存的」のみ他の 2 つの特性語とは異なる内容である可能性が考えられる。

したがって、「うわさ好き」と「おしゃべりな」の平均値を従属変数として同様の 2 要因の分散分析を行った (Table 4.3.5)。その結果、抑制方略の主効果が有意傾向 ($F(3, 43) = 2.25, p < .10$)、単語の種類的主効果が有意 ($F(1, 43) = 4.60, p < .05$)、2 要因の交互作用効果が有意であった ($F(3, 43) = 4.05, p < .05$)。

Table 4.3.5.
各単語に対する抑制方略条件ごとの対数変換後の「うわざずき」、「おしゃべりな」の平均反応時間と標準偏差

	単純抑制条件 (n = 12)		反ステレオタイプの特性 代替思考条件 (n = 12)		上位の非優位ステレオタイプの特性 代替思考条件 (n = 11)		下位の非優位ステレオタイプの特性 代替思考条件 (n = 12)	
	女性ステレオタイプ 関連語	女性ステレオタイプ 無関連語	女性ステレオタイプ 関連語	女性ステレオタイプ 無関連語	女性ステレオタイプ 関連語	女性ステレオタイプ 無関連語	女性ステレオタイプ 関連語	女性ステレオタイプ 無関連語
平均値	6.29 (552)	6.40 (607)	6.34 (576)	6.40 (606)	6.52 (699)	6.48 (656)	6.35 (579)	6.38 (594)
標準偏差	0.20 (111.06)	0.16 (99.85)	0.15 (85.48)	0.13 (78.29)	0.22 (180.46)	0.14 (90.46)	0.14 (80.67)	0.15 (96.56)

注) 括弧内は対数変換前の反応時間を示す。

抑制方略の主効果が有意傾向であったため、多重比較を行ったが有意な結果は得られなかった。単語の種類の主効果は、女性ステレオタイプ無関連語に比べて女性ステレオタイプ関連語は反応時間が短いことを示していた。

以上の効果は、2 要因の交互作用効果によって制限されていた。抑制方略×単語の種類×2 要因の交互作用効果が有意であったため、単純主効果の検定を行った (Figure 4.3.2)。その結果、女性ステレオタイプ関連語条件において、抑制方略の主効果が有意であった ($F(3, 86) = 4.03, p < .01$)。多重比較を行った結果、女性ステレオタイプ関連語条件において、上位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件は、単純抑制条件、反ステレオタイプの特性代替思考条件、下位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件に比べ、反応時間が長かった ($p < .05, p < .10, p < .10$)。さらに、単純抑制条件において単語の種類の主効果が有意であり、女性ステレオタイプ関連語条件は女性ステレオタイプ無関連語条件に比べ反応時間が短かった ($F(1, 43) = 10.92, p < .01$)。さらに、反ステレオタイ

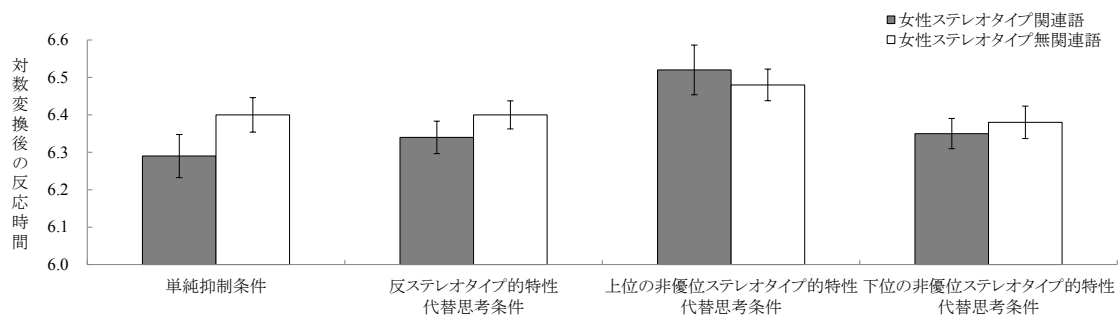


Figure 4.3.2. 各単語に対する抑制方略条件ごとの「うわざずき」、「おしゃべりな」の平均反応時間と標準偏差

プ的特性代替思考条件において単語の種類の主効果が有意傾向であり，女性ステレオタイプ関連語条件は女性ステレオタイプ無関連語条件に比べ反応時間が短かった ($F(1, 43) = 3.04, p < .10$)。

4.3.4 考察

本研究は，優位ステレオタイプ抑制を行う際に，非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると，逆説的效果が低減されやすいという可能性を，優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定することによって検討した。具体的には，上位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件は，単純抑制条件，反ステレオタイプの特性代替思考条件，下位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件に比べ，優位ステレオタイプの特性語に対する反応時間が長くなるという可能性を検討した。その結果，予測通り，上位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件は，単純抑制条件，反ステレオタイプの特性代替思考条件，下位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件に比べ，語彙判断課題における女性ステレオタイプ関連語への反応時間が長いことが示された。

本研究の結果から，反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的效果は低減されにくい，非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的效果は低減されやすいという可能性が示唆された。この結果は，研究 1 と研究 2 の結果を支持するものであり，先行研究で得られた知見と整合性のある結果である。ステレオタイプ抑制における代替思考を扱った先行研究では，反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的效果は低減されにくい，非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用するこ

とで逆説的効果を低減できる可能性が示されている。例えば、反ステレオタイプの特性を代替思考として用いた Oe & Oka (2003) の実験 2 では、参加者が女性のステレオタイプを抑制する際に、女性のステレオタイプとは反対の特性を代替思考として使用すると、逆説的効果は低減されないことを示している。一方、Oe & Oka (2003) の実験 1 では、女性のステレオタイプを抑制する際に、女性のステレオタイプ以外の特性を代替思考として使用するとき逆説的効果が低減されていた。さらに、田戸岡・村田 (2010) では、高齢者に対する無能なというステレオタイプを抑制する際に、有能—無能という次元とは異なる温かい—冷たいという次元に関する代替思考を使用するとき逆説的効果が低減されていた (実験 2)。このように先行研究では、優位ステレオタイプ抑制の際に、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果は低減されないが、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用することで逆説的効果が低減できるという可能性が示されている。研究 1, 研究 2, 研究 3 の結果は、以上の研究結果と一貫するものであると考えられる。

研究 2 では、男性参加者にのみ結果が得られたが、本研究では、男性参加者と女性参加者を合わせた全体において結果が得られた。この理由として、従属変数の測定方法の違いが考えられる。研究 2 では、優位ステレオタイプの判断を測定する際に、対象集団がある特性についてどの程度当てはまるかを回答させるという顕在的な測度を用いており、本研究では、優位ステレオタイプ関連語に対する反応時間を測定するという潜在的な測度を用いている。質問紙などの意識的な態度測定では測定できなかったが、意識に統制されない潜在的な態度測定では、女性参加者も男性参加者と同様に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されることが示されたと考えられる。

本研究では、従属変数として優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定することによって、顕在的な判断の背後にある認知的メカニズムを検討した。その結果から、序論の 2.4 でのべたように、Wegner の思考抑制のモデルに基づいた次のような代替思考の働きが想定できる。反ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合は、実行過程を強く働かさなければならず、それと並行して監視過程も強く働かさなければならぬため、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりやすく、逆説的効果は低減されにくいと考えられる。一方、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合は、実行過程および監視過程の働きは弱くてもよく、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性はそれほど高まることはなく、逆説的効果は低減されやすいと考えられる。

さらに、本研究では、非優位ステレオタイプの特性の非優位性によって代替思考としての有効性が異なるかどうかを探索的に検討するために、対象集団に対する当てはまりの程度が強い上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考とする条件と当てはまりの程度が弱い下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考とする条件を設けて実験を行った。その結果、上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果は低減されやすいが、下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果は低減されにくいことが示された。以下では、このような結果が得られた理由を、アクセス可能性の観点から議論する。

対象集団に対する当てはまりの程度が強い上位の非優位ステレオタイプの特性はアクセス可能性が高く、当てはまりの程度が相対的に弱い下位の非優位ステレオタイプの特性はアクセス可能性が相対的に低いと考えられる。Wegner の思考抑制のモデルに基づくと、アクセス可能性の高い上位の非優位ステレオタ

イブ的特性を代替思考として使用する場合は、思考上に浮かび続きやすいため、比較的、実行過程および監視過程の働きが弱くてもよく、抑制対象に対するアクセス可能性が高まりにくく、逆説的効果が低減されやすいと考えられる。一方、アクセス可能性の低い下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合は、思考上に浮かび続けることが難しいため、実行過程および監視過程を強く働かさなければならず、抑制対象に対するアクセス可能性が高まりやすく、逆説的効果が低減されにくいと考えられる。

以下に、本研究の限界点を 3 つ挙げる。第一に、有意な差はみられなかったが、女性ステレオタイプ無関連語条件において、上位の非優位ステレオタイプの特性代替思考条件の反応時間が、他の 3 つの条件よりも相対的に長いことが挙げられる。有意な差はみられなかったものの、なぜ無関連語に対する反応時間が条件ごとに異なるのかを検討し、操作方法を改善する必要があるかもしれない。

第二に、本研究では、アクセス可能性の観点から考え、上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいが、下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果は低減されにくいという可能性が示された。しかし、この非優位ステレオタイプの特性の非優位性による代替思考の有効性の違いが、アクセス可能性の違いによるものかどうかは、本研究からはわからない。他の説明として、例えば、非優位ステレオタイプの特性の当てはまりの程度が弱くなるほど、反ステレオタイプの内容になるため、下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されにくいという可能性も考えられる。どのような要因が、非優位ステレオタイプの特性の非優位性による代替思考の有効性の違いを規定しているかは今後の課題である。

第三に、第二の限界点とも共通するが、上位の非優位ステレオタイプの特性と下位の非優位ステレオタイプの特性、反ステレオタイプの特性の関係について、より詳細に検討を行う必要がある。

4.4 第4章のまとめ

第4章では、3つの研究を通して、優位ステレオタイプを抑制する際の、非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての役割を検討した。

研究1では、非優位ステレオタイプの特性としてサブタイプに関する特性を用いて、その代替思考としての有効性を検討した。その結果、仮説とは逆の結果が得られたが、事後的な調査により代替思考の内容は反ステレオタイプのな特性語であることがわかった。事後的な調査の結果を踏まえると、研究1の結果からは、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されにくいという可能性が示唆された。

研究2と研究3では、対象集団に対する当てはまりの程度を直接測定して非優位ステレオタイプの特性語を選定し、その代替思考としての有効性を検討した。

研究2では、優位ステレオタイプの判断を顕在的に測定することによって、優位ステレオタイプ抑制における、非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性を検討した。その結果、単純に優位ステレオタイプ抑制を行った場合は逆説的効果が生じるが、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいことが示唆された。

研究3では、研究2での知見の頑健性を確認することと、顕在的な判断の背後にある認知的メカニズムを検討するために、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定した。さらに、非優位ステレオタイプの特性のなかでも、非優位性つまり対象集団に対する当てはまりの程度によって代替思考としての有効性が異なるのかどうかを探索的に検討した。その結果、上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、単純に抑制を

行う場合や、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合、下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合に比べ、抑制対象である優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が低いことが示された。この結果から、研究 2 の知見の頑健性が確認され、さらに、上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、実行過程および監視過程の働きが弱くてもよく、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりにくいので、逆説的効果が低減されやすいという可能性が示唆された。

このように、第 4 章では、優位ステレオタイプ抑制の際に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいことが示唆された。しかし、序論の 3.2, 3.3 で述べたように、この非優位ステレオタイプの特性の利用可能性には個人差があると考えられる。そこで、第 5 章では、逆説的効果の個人差として、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性を取り上げる。非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的特性のひとつである認知的複雑性と逆説的効果との関係を検討する。

第5章 ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差の検討：

認知的複雑性との関係

第5章では、4つの実証研究を通して、優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差を検討した。第4章では、優位ステレオタイプ抑制の際に、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されにくいですが、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいことが示された。しかし、序論の3.2, 3.3で述べたように、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性には個人差があると考えられる。非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人は、優位ステレオタイプ抑制の際に非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすく、その結果、逆説的効果が生じにくいと考えられる。そこで、第5章では、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差の背後にある認知特性のひとつである認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくいですが、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいという仮説を検討した。

研究4では、認知的複雑性を扱う前に、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差と逆説的効果との関係を検討した。その結果、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人ほど、逆説的効果が生じにくい可能性が示された。

研究5では、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差と認知的複雑性との関係を検討した。序論の3.3で述べたように、集団に対する捉え方の個人差として認知的複雑性が挙げられる (Bieri, 1955)。認知的複雑性が高い個人

は、集団を多次的に捉えており、集団のさまざまな次元を利用してその集団や集団成員を判断していると考えられる。つまり、認知的複雑性が低い個人は、主に優位ステレオタイプの特性や反ステレオタイプの特性が利用可能なのに対して、認知的複雑性が高い個人は、それらだけでなく、非優位ステレオタイプの特性も利用可能であると考えられる。非優位ステレオタイプの特性の利用可能性と認知的複雑性との関係を検討した結果、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人ほど、認知的複雑性が高いという可能性が示された。

研究 6 と研究 7 では、認知的複雑性と逆説的効果との関係を検討した。

研究 6 では、認知的複雑性による逆説的効果の差異を、質問紙を用いてステレオタイプの判断を顕在的に測定することによって検討した。その結果、認知的複雑性が低い個人は、逆説的効果が生じやすいが、認知的複雑性が高い個人は、逆説的効果が生じにくいことが示された。

研究 7 では、研究 6 での知見の頑健性を確認し、顕在的な判断の背後にある認知的メカニズムを検討するために、実験室実験によって優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定した。その結果、認知的複雑性が高い個人は、優位ステレオタイプ抑制を行った場合と行わなかった場合で優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性に差はみられなかったが、認知的複雑性が低い個人は、優位ステレオタイプ抑制を行った場合は行わなかった場合に比べ、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高いことが示された。この結果から、研究 6 で得られた知見の頑健性が確認され、さらに、認知的複雑性が高い個人は、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすいため、実行過程および監視過程の働きは弱くてもよく、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性は高まりにくいので、逆説的効果が生じにくいという可能性が示唆された。

5.1 研究4：非優位ステレオタイプの特性の利用可能性と

逆説的効果との関係⁴

5.1.1 問題

研究4では、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差と優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果との関係について検討する。第4章では、優位ステレオタイプを抑制する際に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすい可能性が示された。しかし、序論の3.2, 3.3で述べたように、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性には個人差があると考えられる。非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人ほど、代替思考として使用しやすく、逆説的効果が低減されやすいと考えられる。

そこで、本研究では、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性と、優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果との関係を検討する。さらに、探索的に、優位ステレオタイプの特性の利用可能性と非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が、抑制後ではない単純な優位ステレオタイプの判断とどのように関係しているかも検討する。具体的には、女性ステレオタイプを題材として取り上げた。女性のサブタイプとして主婦タイプとキャリアウーマンタイプがあること

⁴ 本研究は、次の論文と学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。山本 真菜・岡 隆 (2013). サブタイプの確立度とステレオタイプ抑制による逆説的効果との関係 日本大学心理学研究, 34, 1-9. 山本 真菜・岡 隆 (2012). サブタイプの確立度とステレオタイプ抑制による逆説的効果との関係 日本心理学会第76回大会発表論文集, 152. Yamamoto, M., Oka, T. (2013). The relationship between the formation of subtypes and paradoxical effects in stereotype suppression, The 14th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology (in New Orleans, Louisiana, USA) (January 18th, 2013).

が示されていることから (Glick, Diebold, Bailey-Werner & Zhu, 1997), まず, 優位ステレオタイプの特性の利用可能性を測定するために「専業主婦」に対する専業主婦に関する特性語の当てはまりの程度を測定し, 非優位ステレオタイプの特性の利用可能性を測定するために, 「キャリアウーマン」に対するキャリアウーマンに関する特性語の当てはまりの程度を測定した。次に, 優位ステレオタイプ抑制の操作を行うために, 「専業主婦」について記述する課題を行った。その際に, 優位ステレオタイプを抑制する条件と抑制しない条件を設けた。最後に, 女性に対する優位ステレオタイプの判断を測定した。

本研究では, 次の 3 つの仮説を検討する。第一に, 先行研究で示されてきたように (e.g., Macrae et al., 1994; Monteith et al., 1998), 優位ステレオタイプ抑制を行った場合には逆説的効果が生じると予測する。つまり, 優位ステレオタイプ抑制の有無の主効果が得られ, 優位ステレオタイプ抑制を行うと優位ステレオタイプの判断の得点が高くなると予測する。

第二に, 優位ステレオタイプ抑制を行った場合に, 非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いほど逆説的効果が低減されると予測する。つまり, 優位ステレオタイプ抑制を行った場合, 非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いほど優位ステレオタイプの判断の得点が低いと予測する。

第三に, 探索的ではあるが, 優位ステレオタイプの特性と非優位ステレオタイプの特性のそれぞれの利用可能性が, 抑制後ではない単純な優位ステレオタイプの判断と関係するかどうかについても検討する。ステレオタイプが活性化されると, ステレオタイプの判断がされやすくなることが示されていることから (e.g., Blair & Banaji, 1996), 優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いほど, 優位ステレオタイプの判断の得点が高くなると予測する。また, 対象集団にサブタイプが明確に存在する場合はそうでない場合よりも, その集団に

対するステレオタイプの判断がされにくくなることが示されていることから (Gurwitz & Dodge, 1977), 非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いほど優位ステレオタイプの判断の得点が低くなると予測する。

5.1.2 方法

実験参加者

大学生 122 名 (男性 53 名, 女性 65 名, 不明 4 名; 平均年齢 19.65 歳, $SD = 1.08$) が調査に参加した。回答項目に欠損のあった 30 名を分析から除外し, 92 名のデータが分析に用いられた。なお, 除外した 30 名は, 優位ステレオタイプ抑制あり条件が 13 名, 優位ステレオタイプ抑制なし条件が 17 名であり, 条件間の欠損に大きな違いはみられなかった。

材料

配布された質問票は, 調査者が異なる 2 つの質問紙がセットになったものであった。1 つ目の質問紙は「文章に関する研究の予備調査」と称され, 「調査 A」と「調査 B」で構成されていた。2 つ目の質問紙は「社会的集団に対する印象形成の予備調査」と称されていた。1 つ目の質問紙の「調査 A」は, 「専業主婦」と「キャリアウーマン」のイメージについて評定させる課題であり, これによって, 女性の優位ステレオタイプの特性の利用可能性と非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の測定を行った。具体的には, 「専業主婦」と「キャリアウーマン」について, それぞれ異なる 32 個の特性語 (Table 5.1.1, Table 5.1.2; 沼崎他, 2006) が当てはまるか当てはまらないかをたずねた。当てはまると回答した特性語についてのみ, 当てはまる程度を 1 (弱い) —7 (強い) の 7 件法で評

定させた。「専業主婦」と「キャリアウーマン」の評定の順番は参加者ごとに無作為化されていた。

続いて「調査 B」では、女性の写真を提示し、その人物の日常的な一日を想像させ 5 分間で記述させる課題を行った。その記述の際に優位ステレオタイプ抑制の操作を行った。具体的には、「以下の写真の女性が普段過ごしている一日を想像して以下の記述欄に書いてください。」という教示があり、その下には女性の写真と記述欄があった。このとき、優位ステレオタイプ抑制あり条件にのみ「専業主婦のような一日は書かないように注意してください。」という優位ステレオタイプを抑制させるための教示が記載されていた。優位ステレオタイプ抑制なし条件には、そのような教示は記載されていなかった。

2 つ目の質問紙では、「女性」に対する印象をたずねる課題を行った。これによって、優位ステレオタイプの判断の測定を行った。具体的には、課題間の影響を最小限に抑えるために、「アメリカと中国、男性と女性、大学生と高齢者という 6 つの集団についての基礎データを収集しています。これら 6 つの集団の内、一つの集団にだけ回答していただきます」という教示が記載されていた。実際は、すべての参加者が「女性」について回答するように作成されていた。「女性」について、優位ステレオタイプの特性の利用可能性の測定に用いられたものと同様の特性語 32 語 (Table 5.1.1) がどの程度当てはまるかを、全く当てはまらない (1) — 非常によく当てはまる (7) の 7 件法で回答させた。ただし、4 つの項目が逆転項目となっていた。具体的には、「頼りない」項目を逆転項目として「頼りがいのある」に、「意志の弱い」項目を逆転項目として「意志の強い」に、「親しみやすい」項目を逆転項目として「親しみにくい」に、「面倒見の良い」項目を逆転項目として「面倒見の悪い」に変数名を変更した。

Table 5.1.1

優位ステレオタイプの利用可能性の測定に用いた項目

1 頼りない	17 謙虚な
2 受け身的な	18 世話好きな
3 うるさい	19 優雅な
4 依存的な	20 優しい
5 おしゃべりな	21 控えめな
6 臆病な	22 面倒見の良い
7 でしゃばりな	23 おしとやかな
8 意志の弱い	24 家庭的な
9 うわさ好きな	25 もの静かな
10 弱々しい	26 気立てのよい
11 おせっかいな	27 純真な
12 口出しする	28 流されやすい
13 意見のない	29 可愛らしい
14 干渉的な	30 温かい
15 親しみやすい	31 おっとりした
16 八方美人な	32 協力的な

Table 5.1.2

非優位ステレオタイプの利用可能性の測定に用いた項目

1 有能な	17 自信のある
2 頑固な	18 威圧的な
3 冷静な	19 独立した
4 孤独な	20 自分勝手な
5 勇敢な	21 指導力のある
6 強引な	22 高圧的な
7 気ままな	23 分析的な
8 批判的な	24 無愛想な
9 はっきりした	25 決断力のある
10 傲慢な	26 攻撃的な
11 孤高の	27 堂々とした
12 独りよがりな	28 打ち解けない
13 意思の強い	29 統率力のある
14 支配的な	30 闘争的な
15 論理的な	31 束縛されない
16 そっけない	32 とっつきにくい

手続き

調査は、授業時間内を利用し数回に分けて行われた。調査者は、質問票を参加者に配布し、先に行われる課題における抑制の教示によって次の課題で行われる評定においても抑制を続けてしまうという可能性を考慮し、課題間の影響を最小限に抑えるために以下の教示を行った。セットになっている 2 つの質問紙は調査者が異なり、1 つ目の質問紙は「文章に関する研究の予備調査」であり、2 つ目の質問紙は「社会的集団に対する印象形成の予備調査」であることを強調した。調査は調査者の指示に従って進められた。調査後、文書によるデブリーフィングを行った。調査の実施時間は約 20 分であった。

5.1.3 結果

優位ステレオタイプ抑制の操作チェック

まず、参加者が優位ステレオタイプ抑制の教示に従っていたかどうかを確認するために、1 つ目の質問紙の「調査 B」において参加者が記述した文章の内容の優位ステレオタイプ度得点を算出し、参加者が優位ステレオタイプを抑制した程度を検討した。

具体的には、調査の目的を知らない評定者 2 名が、「調査 B」の記述内容を、どの程度専業主婦的かについて 7 件法（1：全く当てはまらない—7：非常によく当てはまる）で評定した。得られた評定値の平均値を算出し、その得点を優位ステレオタイプ度得点とした。2 名の評定者間の一致率は $r = .68$ であった。この結果から、2 名の評定者の平均値を用いて分析することとした。優位ステレオタイプ抑制あり条件 ($M = 4.55, SD = 1.52$) と優位ステレオタイプ抑制なし条件 ($M = 6.59, SD = 0.73$) との間に差があるかどうかを検討するために、優位ス

テレオタイプ度得点に関して、 t 検定を行った。その結果、優位ステレオタイプ抑制あり条件と優位ステレオタイプ抑制なし条件の間に有意な差が得られ ($t(90) = 8.16, p < .01$)、優位ステレオタイプ抑制あり条件は優位ステレオタイプ抑制なし条件に比べ、優位ステレオタイプ度得点が低かった。この結果から、優位ステレオタイプ抑制の操作は成功していたと考えられる。

利用可能性と優位ステレオタイプ抑制と優位ステレオタイプの判断との関係

優位ステレオタイプの特性の利用可能性、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性、優位ステレオタイプ抑制と優位ステレオタイプの判断との関係を検討するために、重回帰分析を行った。本研究では、利用可能性の個人差という連続的な変数を測定しているため、重回帰分析を用いた。得点化の方法は以下の通りである。優位ステレオタイプの特性の利用可能性と非優位ステレオタイプの特性の利用可能性については、1つ目の質問紙の「調査 A」において、参加者が、「専業主婦」、「キャリアウーマン」それぞれについて、当てはまると回答した項目について、当てはまる程度 (1 (弱い) — 7 (強い)) を評定した値の平均値をそれぞれの利用可能性とした (Table 5.1.3)。優位ステレオタイプ抑制については、優位ステレオタイプ抑制ありを 1、優位ステレオタイプ抑制なしを 0 としてダミー変数化を行った。優位ステレオタイプの判断については、2つ目の質問紙において、1つ目の質問紙の「調査 A」でそれぞれの参加者が「専業主婦」に当てはまると回答した項目と一致する項目の平均値を優位ステレオタイプの判断の得点とした (Table 5.1.3)。独立変数として優位ステレオタイプの特性の利用可能性、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性、優位ステレオタイプ抑制、およびそれらの交互作用項を投入し、基準変数として優位ステレオタイプの判断を投入して重回帰分析を行った。すべての変数は標準化されており、

Table 5.1.3

参加者ごとの非優位ステレオタイプの特性の利用可能性と優位ステレオタイプの特性の利用可能性, 優位ステレオタイプの判断の得点

	平均値	標準偏差
全体		
非優位ステレオタイプの特性の利用可能性	5.44	0.56
優位ステレオタイプの特性の利用可能性	5.25	0.65
優位ステレオタイプの判断	5.02	0.57
男性参加者		
非優位ステレオタイプの特性の利用可能性	5.30	0.57
優位ステレオタイプの特性の利用可能性	5.34	0.64
優位ステレオタイプの判断	4.99	0.50
女性参加者		
非優位ステレオタイプの特性の利用可能性	5.57	0.51
優位ステレオタイプの特性の利用可能性	5.17	0.65
優位ステレオタイプの判断	5.06	0.63

Table 5.1.4

各変数と優位ステレオタイプの判断との関係

独立変数	$R^2 = .16$	
	β	p
非優位ステレオタイプの利用可能性	.21	.06
優位ステレオタイプの利用可能性	.19	.09
優位ステレオタイプ抑制	.17	.10
非優位ステレオタイプの利用可能性×優位ステレオタイプ抑制	.03	.81
優位ステレオタイプの利用可能性×優位ステレオタイプ抑制	-.15	.18

$F(5, 86) = 3.19, p < .05$

係数は標準偏回帰係数であった。その結果、モデルは優位であったが、すべての変数において有意な効果はえられなかった (Table 5.1.4; $R^2 = .16, F(5, 86) = 3.9, p < .05$)。

32 項目の平均値を基準変数として用いた分析においては、すべての変数で有意な効果が得られなかった。優位ステレオタイプ抑制の主効果も有意ではなかったため、逆説的効果が生じていなかったと考えられる。序論の 2.1 で述べてい

るように、一般的に、優位ステレオタイプを抑制すると逆説的効果が生じると考えると、本研究の参加者である大学生にとっては基準変数の測定に使用した32項目が優位ステレオタイプの特性語として認識されていなかったため優位ステレオタイプ抑制の主効果が有意ではなかったという可能性が考えられる。そこで、32項目のうち優位ステレオタイプの特性語として認識されていた項目がないかを検討するために、それぞれの項目の平均値を算出し、その値を優位ステレオタイプの判断の得点として、項目ごとに同様の重回帰分析を行った (Table 5.1.5)。逆説的効果が生じている場合、その項目を優位ステレオタイプ特性語として認識していたという可能性が考えられる。つまり、優位ステレオタイプ抑制の主効果が有意である項目が、参加者にとって優位ステレオタイプの特性語であると認識されていた項目であると考えられる。しかし、モデルが有意または有意傾向であり、さらに、優位ステレオタイプ抑制の主効果も有意である項目はみられなかった。

Table 5.1.5
全参加者に対する分析結果

	基本統計量		重回帰分析 ($y = a + \beta_1$ 非優位サブタイプ + β_2 優位サブタイプ + β_3 ステレオタイプ抑制 + β_4 (非優位サブタイプ × ステレオタイプ抑制) + β_5 (優位サブタイプ × ステレオタイプ抑制))								
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>R</i> ²	<i>F</i> (5,86)	<i>p</i>	<i>a</i>	β_1	β_2	β_3	β_4	β_5
全体	5.02	0.57	0.1600	3.1900	0.0100	-0.0060	0.2100	0.1860	0.1660	0.0270	-0.1480
頼りがいのある ^{a)}	3.55	1.31	0.0200	0.3900	0.8600	-0.0001	0.0360	-0.0980	-0.1220	-0.0070	-0.0090
受け身的な	4.99	1.08	0.0300	0.5800	0.7100	-0.0020	0.0280	0.0580	0.1320	-0.0270	-0.0890
うるさい	5.46	0.97	0.0900	1.6300	0.1600	-0.0020	0.2880*	0.0100	-0.0210	0.0280	-0.0310
依存的な	5.21	1.08	0.0700	1.2300	0.3000	0.0040	0.2500*	-0.0230	0.0560	-0.0410	0.0670
おしゃべりな	5.80	0.90	0.1200	2.4400	0.0400	-0.0030	0.3300**	-0.0150	0.0640	0.0950	0.0070
臆病な	4.49	1.13	0.0800	1.5200	0.1900	0.0110	0.1170	-0.0400	0.0710	-0.2720*	0.0310
でしゃばりな	3.89	1.15	0.0500	0.8800	0.5000	-0.0010	0.1610	0.0630	-0.0210	0.0690	0.0340
意志の強い ^{a)}	3.41	1.26	0.1700	3.4900	0.0060	0.0050	0.0690	-0.3400**	-0.1780	-0.1770	-0.0340
うわさ好きな	5.67	1.24	0.0700	1.3000	0.2700	-0.0020	0.2700*	-0.0650	0.0110	-0.0250	-0.0880
弱々しい	4.23	1.28	0.0500	0.8900	0.4900	-0.0003	0.1790	-0.2100	-0.0090	-0.0360	-0.0490
おせっかいな	4.51	1.25	0.0700	1.2400	0.3000	0.0008	0.2430*	-0.0640	0.0930	-0.0640	-0.0470
口出しする	4.73	1.10	0.0400	0.6500	0.6600	0.0040	0.1380	0.0720	0.0320	-0.0480	0.0540
意見のない	3.03	1.30	0.1200	2.3900	0.0450	-0.0030	0.3650**	-0.1810	0.0720	0.0050	-0.0740
干涉的な	4.22	1.27	0.0600	1.1800	0.3200	0.0070	0.2080	0.0130	-0.0800	-0.1420	0.0420
親しみにくい ^{a)}	5.18	1.27	0.0500	0.8200	0.5400	-0.0130	0.0500	0.0370	0.0050	0.1380	-0.2150
八方美人な	4.70	1.32	0.0200	0.4200	0.8300	-0.0030	0.1360	-0.0250	-0.0008	0.0800	0.0004
謙虚な	4.07	1.32	0.1000	1.8400	0.1100	-0.0030	-0.0480	0.1670	0.2720**	0.0560	-0.0270
世話好きな	5.01	1.22	0.0800	1.4900	0.2000	-0.0040	0.1410	0.0550	0.1850	-0.0070	-0.1280
優雅な	4.39	1.25	0.0300	0.5000	0.7700	-0.0090	0.1000	-0.0080	0.0070	0.1080	-0.1420
優しい	5.28	0.95	0.5400	0.9800	0.4400	-0.0080	0.1290	0.0950	0.0150	0.1260	-0.1090
控えめな	4.42	1.08	0.1300	2.4800	0.0400	-0.0110	0.2160	0.1420	0.0600	0.1300	-0.1740
面倒臭い ^{a)}	5.16	1.17	0.0600	1.2100	0.3100	-0.0010	0.1120	0.0570	0.0420	-0.1090	-0.1470
おしとやかな	4.29	1.23	0.0400	0.7900	0.5600	-0.0130	0.0670	-0.0350	0.0360	0.1630	-0.2010
家庭的な	5.14	1.21	0.0400	0.6700	0.6500	-0.0060	-0.0140	0.0400	0.0270	-0.0070	-0.1860
もの静かな	3.74	1.10	0.0300	0.5600	0.7300	0.0030	-0.0150	-0.0440	0.1630	-0.0320	0.0450
気立てのよい	4.51	1.11	0.1000	1.1000	0.0900	-0.0130	0.0950	0.1440	0.0410	0.1040	-0.2740*
純真な	4.20	1.22	0.0400	0.7500	0.5900	0.0030	0.0670	0.1090	0.1230	-0.0760	-0.0040
流されやすい	4.74	1.37	0.0700	1.3400	0.2600	0.0090	0.1690	-0.0460	-0.1630	-0.1790	-0.0740
可愛らしい	5.42	1.04	0.0600	1.0100	0.4200	-0.0070	0.0210	0.1180	0.0680	0.0140	-0.1950
温かい	5.39	1.04	0.1100	2.1500	0.0700	-0.0070	0.1290	0.1380	0.0550	-0.0240	-0.2380*
おっとりした	4.55	1.29	0.0400	0.6900	0.6300	-0.0050	0.1780	0.0040	0.0100	0.0630	-0.0770
協力的な	4.99	1.28	0.0900	1.7200	0.1400	-0.0005	0.1780	0.1310	0.0070	-0.0890	-0.1090

注) ^{a)}は逆転項目を示す。* $<.05$, ** $<.01$ 。

男女別の分析

参加者の性によってジェンダー・ステレオタイプに対する判断が異なることが報告されているため (e.g., Glick & Fiske, 1996; Swim et al., 1995), 参加者の男女別で優位ステレオタイプの特性の利用可能性と非優位ステレオタイプの特性の利用可能性, 優位ステレオタイプの判断の得点を算出し (Table 5.1.1), 参加者全体での分析と同様の重回帰分析を行った (Table 5.1.6; Table 5.1.7)。その結果, 男性参加者についても ($R^2 = .19, F(5, 38) = 1.74, n.s.$), 女性参加者についても ($R^2 = .18, F(5, 42) = 1.88, n.s.$), モデルは有意でも有意傾向でもなく, すべての変数

Table 5.1.6
男性参加者に対する分析結果

	基本統計量		重回帰分析 ($y = \alpha + \beta_1 \text{非優位サブタイプ} + \beta_2 \text{優位サブタイプ} + \beta_3 \text{ステレオタイプ抑制} + \beta_4 \text{(非優位サブタイプ} \times \text{ステレオタイプ抑制)} + \beta_5 \text{(優位サブタイプ} \times \text{ステレオタイプ抑制)})$)								
	M	SD	R ²	F(5,38)	p	α	β_1	β_2	β_3	β_4	β_5
全体	4.99	0.50	0.1900	1.7400	0.1500	0.0050	0.1750	0.2430	0.2540	-0.0390	0.0330
頼りがいのある ^{a)}	3.64	1.40	0.0800	0.6600	0.6500	-0.0410	0.1730	-0.2440	-0.0170	0.3110	-0.2700
受け身的な	5.02	1.09	0.1700	1.6000	0.1800	-0.0440	0.1910	-0.0680	0.2980	0.2530	-0.3010
うるさい	5.50	0.98	-0.3010	1.2100	0.3300	-0.0340	0.4500*	-0.1830	-0.0180	0.1320	-0.2410
依存的な	5.27	1.11	0.2400	2.4400	0.0500	-0.0360	0.4530*	-0.3090	0.2260	0.2870	-0.2410
おしゃべりな	5.75	0.87	0.1500	1.3000	0.2800	-0.0110	0.2760	-0.0550	-0.0820	0.2590	-0.0490
臆病な	4.36	1.12	0.1100	0.9000	0.4900	-0.0380	0.1680	-0.0680	0.1880	0.0520	-0.2800
でしゃばりな	3.70	1.19	0.1400	1.2100	0.3300	-0.0350	0.2130	-0.1420	-0.1640	0.3940	-0.2160
意志の強い ^{a)}	3.48	1.21	0.2000	1.8700	0.1200	-0.0270	0.1160	-0.4670*	0.0020	0.0810	-0.1920
うわさ好きな	5.66	1.18	0.1400	1.2000	0.3300	-0.0280	0.4450*	-0.1480	-0.0560	0.1200	-0.1950
弱々しい	4.18	1.23	0.0900	0.7900	0.5700	-0.0110	0.1990	-0.3510	0.0430	0.2000	-0.0600
おせっかいな	4.43	1.26	0.1200	1.0500	0.4000	-0.0110	0.3240	0.0220	0.1340	-0.0900	-0.0910
口出しする	4.82	1.13	0.1100	0.9000	0.4900	0.0090	0.2980	0.0370	-0.0610	-0.1700	0.0490
意見のない	2.95	1.35	0.3400	3.8500	0.0060	-0.0580	0.5020**	-0.3390	0.1660	0.5030**	-0.3800*
干渉的な	4.25	1.33	0.1900	1.7700	0.1400	-0.0170	0.5360**	-0.1670	-0.0630	-0.0100	-0.1340
親しみにくい ^{a)}	5.09	1.25	0.1300	1.1300	0.3600	0.0290	-0.3480	0.3980*	0.0410	-0.0610	0.2100
八方美人な	4.55	1.49	0.0200	0.1700	0.9700	-0.0030	-0.0710	0.1510	-0.0220	0.0510	-0.0190
謙虚な	3.89	1.20	0.2300	2.2500	0.0700	-0.0030	-0.3870*	0.4200*	0.3380*	0.1050	-0.0060
世話好きな	5.07	1.23	0.1000	0.8800	0.5000	0.0140	0.1850	0.1130	0.1560	-0.2490	0.0730
優雅な	4.09	1.27	0.0800	0.6400	0.6700	-0.0070	-0.2610	0.2040	-0.1060	0.1170	-0.0360
優しい	5.20	1.09	0.0800	0.6900	0.6300	0.0270	-0.2060	0.2950	-0.0300	-0.0600	0.1970
控えめな	4.34	1.14	0.1800	1.7200	0.1500	-0.0250	0.2000	0.1030	0.0250	0.3310	-0.1450
面倒見の悪い ^{a)}	5.09	1.27	0.2000	1.9300	0.1100	-0.0020	-0.0220	0.3870*	0.1710	-0.3340	-0.0560
おしとやかな	4.18	1.17	0.0400	0.3500	0.8800	-0.0120	-0.0770	0.1280	-0.0820	0.1600	-0.0720
家庭的な	5.18	0.97	0.0200	0.1500	0.9800	-0.0100	-0.0220	0.1070	0.0860	-0.0220	-0.0760
もの静かな	3.57	1.09	0.0400	0.3100	0.9100	-0.0060	0.1140	-0.2460	-0.0280	0.1120	-0.0280
気立てのよい	4.50	1.05	0.1000	0.8300	0.5400	0.0060	-0.2260	0.3050	-0.1530	-0.0540	0.0420
純真な	4.02	1.32	0.0700	0.5400	0.7500	0.0190	-0.1790	0.2970	0.1030	-0.2050	0.1180
流されやすい	4.91	1.33	0.1400	1.1900	0.3300	-0.0060	0.4600*	-0.2070	-0.0120	-0.0050	-0.0440
可愛らしい	5.55	0.95	0.1000	0.8500	0.5200	0.0500	-0.2950	0.2340	0.0330	-0.2470	0.3480
温かい	5.39	1.04	0.0400	0.2900	0.9200	0.0170	0.0410	0.0750	0.0880	-0.2140	0.0980
おっとりした	4.41	1.15	0.0800	0.6500	0.6600	-0.0150	0.0740	0.1110	-0.0220	0.2190	-0.0870
協力的な	4.77	1.46	0.1600	1.4900	0.2200	-0.0030	0.0430	0.3950*	0.1250	-0.1810	-0.0440

注) ^{a)}は逆転項目を示す。* $<.05$, ** $<.01$ 。

で有意な効果はえられなかった。

次に、優位ステレオタイプの判断を測定した 32 項目について、項目ごとの平均値を優位ステレオタイプの判断の得点として、参加者の男女別で、項目ごとに同様の重回帰分析を行った (Table 5.1.6; Table 5.1.7)。その結果、モデルが有意または有意傾向であり、さらに、優位ステレオタイプ抑制の主効果が有意である項目は、男性参加者が評定した「謙虚な」項目のみであった ($R^2 = .23, F(5, 38) = 2.25, p < .10$)。すべての独立変数の主効果は有意であったが、交互作用効果は有意ではなかった。

交互作用効果が有意ではなかったことから、個人の優位ステレオタイプの特性の利用可能性、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性は、優位ステレオタイプ抑制の有無に関わらず個人に安定して存在している特性であると考えられる。つまり、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人は、優位ステレオタイプ抑制を行っている場合も、行っていない場合も、その利用可能性が高いということが考えられ、交互作用項を設けない場合の方が重回帰分析のモデルの当てはまりがよい可能性がある。そこで、男性参加者が評定した「謙虚な」項目について、独立変数から交互作用の変数を除き、優位ステレオタイプの特性の利用可能性、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性、優位ステレオタイプ抑制の3つを独立変数として、優位ステレオタイプの判断を基準変数として重回帰分析を行った。その結果、モデルが有意であった ($R^2 = .22$, $F(3,40) = 3.74$, $p < .05$; Table 5.1.8)。優位ステレオタイプ抑制が有意であり ($\beta = .34$, $p < .05$)、このことは、優位ステレオタイプを抑制すると、優位ステレオタイプの判断が高くなることを示す。さらに、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が有意であり ($\beta = -.38$, $p < .05$)、このことは、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いほど優位ステレオタイプの判断の得点が低くなることを示す。さらに、優位ステレオタイプの特性の利用可能性が有意であり ($\beta = .45$, $p < .05$)、このことは、優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いほど優位ステレオタイプの判断の得点が高くなることを示す。

Table 5.1.7
女性参加者に対する分析結果

	基本統計量		重回帰分析 ($y=a+\beta1$ 非優位サブタイプ+ $\beta2$ 優位サブタイプ+ $\beta3$ ステレオタイプ抑制+ $\beta4$ (非優位サブタイプ×ステレオタイプ抑制)+ $\beta5$ (優位サブタイプ×ステレオタイプ抑制))								
	M	SD	R ²	F (5,42)	p	a	$\beta1$	$\beta2$	$\beta3$	$\beta4$	$\beta5$
全体	5.06	0.63	0.1800	1.8800	0.1200	0.0300	0.1160	0.2020	0.0890	0.1050	-0.3040
頼りがいのある ^{a)}	3.48	1.24	0.0800	0.7400	0.6000	-0.0070	0.0020	-0.0880	-0.2450	-0.1260	-0.0510
受け身的な	4.96	1.09	0.0400	0.3200	0.9000	0.0120	-0.0860	0.0980	-0.0470	-0.0390	-0.1390
うるさい	5.42	0.96	0.1300	1.2300	0.3100	-0.0070	0.3250*	0.0960	-0.0310	0.0650	0.0870
依存的な	5.15	1.07	0.1000	0.9300	0.4700	-0.0130	0.2470	0.0910	-0.1230	-0.0590	0.1300
おしゃべりな	5.85	0.95	0.1900	1.9900	0.1000	-0.0160	0.4180**	-0.1080	0.2070	-0.1510	0.1450
臆病な	4.60	1.14	0.1500	1.4600	0.2200	-0.0220	0.0920	-0.0690	-0.0560	-0.4180*	0.1700
でしゃばりな	4.06	1.10	0.0800	0.7200	0.6100	-0.0150	0.1180	0.1590	0.0410	-0.1380	0.1400
意志の強い ^{a)}	3.35	1.31	0.2400	2.6200	0.0400	-0.0030	0.0980	-0.3210*	-0.3220*	-0.2370	-0.0070
うわさ好きな	5.69	1.31	0.0600	0.5600	0.7300	0.0007	0.1880	-0.1220	0.0710	-0.1410	-0.0320
弱々しい	4.27	1.35	0.0900	0.8400	0.5300	0.0080	0.1400	-0.1980	-0.0640	-0.1610	-0.1110
おせっかいな	4.58	1.25	0.0400	0.3100	0.9000	0.0020	0.1620	-0.1320	0.0710	-0.0430	-0.0310
口出しする	4.65	1.08	0.0500	0.4700	0.8000	-0.0150	0.1320	0.0150	0.1600	-0.0500	0.1550
意見のない	3.10	1.26	0.1600	1.6200	0.1800	-0.0020	0.2830	-0.2430	-0.0370	-0.2710	-0.0240
干渉的な	4.19	1.23	0.0400	0.3400	0.8900	-0.0070	0.0009	0.0440	-0.1140	-0.1580	0.0520
親しみにくい ^{a)}	5.27	1.28	0.1800	1.8900	0.1200	0.0410	0.0970	-0.1160	0.0120	0.1230	-0.4270*
八方美人な	4.83	1.15	0.0800	0.7500	0.5900	-0.0110	0.3020	-0.1230	0.0450	0.0220	0.1280
謙虚な	4.23	1.40	0.0700	0.6500	0.6600	-0.0010	0.0710	0.0900	0.2240	-0.0210	0.0070
世話好きな	4.96	1.22	0.1200	1.1600	0.3400	0.0210	0.1110	0.0160	0.2440	0.1090	-0.2050
優雅な	4.67	1.17	0.0800	0.7600	0.5800	0.0130	0.2110	-0.0630	0.0900	-0.0120	-0.1430
優しい	5.35	0.81	0.1800	1.8800	0.1200	0.0240	0.3040	0.0070	0.1060	0.1230	-0.2380
控えめな	4.50	1.03	0.1700	1.7600	0.1400	0.0280	0.0970	0.1030	0.0650	-0.0330	-0.3130
面倒見の悪い ^{a)}	5.23	1.08	0.0500	0.4600	0.8000	0.0180	0.1240	-0.0590	-0.0550	0.0770	-0.1780
おしとやかな	4.40	1.28	0.0900	0.8300	0.5400	0.0240	0.0390	-0.1410	0.1360	0.0490	-0.2520
家庭的な	5.10	1.40	0.0700	0.6600	0.6600	0.0260	-0.0800	0.0006	-0.0080	0.0050	-0.2810
もの静かな	3.90	1.10	0.1100	1.0600	0.4000	-0.0070	-0.1500	0.0490	0.2650	-0.1480	0.0430
気立てのよい	4.52	1.18	0.2500	2.7400	0.0300	0.0260	0.2510	0.0440	0.2220	0.0050	-0.2780
純真な	4.35	1.12	0.0800	0.7300	0.6100	-0.0030	0.1830	0.0720	0.1530	-0.0670	0.0200
流されやすい	4.58	1.41	0.1200	1.1400	0.3500	-0.0070	0.0290	-0.0700	-0.2730	-0.2180	0.0400
可愛らしい	5.31	1.11	0.2200	2.4100	0.0500	0.0320	0.1660	0.0320	0.1510	-0.0040	-0.3520*
温かい	5.40	1.05	0.3500	4.4800	0.0020	0.0490	0.0890	0.2790	-0.0040	0.1850	-0.5060***
おっとりした	4.69	1.40	0.0500	0.4000	0.8500	0.0050	0.1510	-0.0820	0.0310	-0.0900	-0.0740
協力的な	5.19	1.07	0.1000	0.9300	0.4700	0.0220	0.0850	0.0650	-0.1430	0.0270	-0.2390

注) ^{a)}は逆転項目を示す。* $<.05$, ** $<.01$ 。

Table 5.1.8
各変数と優位ステレオタイプの判断との関係
(男性参加者が評定した「謙虚な」項目について)

独立変数	$R^2 = .22$	
	β	p
非優位ステレオタイプの特性の利用可能性	-.38	.04
優位ステレオタイプの特性の利用可能性	.45	.01
ステレオタイプ抑制	.34	.02

$F(3, 40) = 3.74, p < .05$

5.1.4 考察

本研究では、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性と優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果との関係を検討した。具体的には、次の4つの仮説を検討した。第一に、優位ステレオタイプ抑制を行った場合に逆説的効果が生じる、つまり、優位ステレオタイプ抑制の有無の主効果が得られ、優位ステレオタイプ抑制を行うと優位ステレオタイプの判断の得点が高くなると予測した。第二に、優位ステレオタイプ抑制を行った場合に、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いほど逆説的効果が低減される、つまり、優位ステレオタイプ抑制を行った場合、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いほど優位ステレオタイプの判断の得点が低いと予測した。第三に、探索的ではあるが、優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いほど、優位ステレオタイプの判断の得点は高く、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いほど優位ステレオタイプの判断の得点は低くなると予測した。

その結果、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性と優位ステレオタイプ抑制の交互作用については有意な効果は得られず、主要な仮説である第二の仮説は支持されなかった。ただし、男性が評定した「謙虚な」項目について以下の結果が得られた。まず、優位ステレオタイプ抑制を行うと優位ステレオタイプの判断の得点が高くなることが示された。この結果は、第一の仮説を支持するものであり、ステレオタイプ抑制を行うと逆説的効果が生じるという先行研究と一致するものである (e.g., Macrae et al., 1994)。さらに、優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いほど優位ステレオタイプの判断の得点が高くなることが示された。この結果は、ステレオタイプが活性化されるとステレオタイプの判断の程度が強くなるという先行研究と一致するものである (e.g., Blair &

Banaji, 1996)。さらに、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いほど優位ステレオタイプの判断の得点が低くなることが示された。この結果は、対象集団にサブタイプが存在するとその集団に対するステレオタイプの判断の程度が弱くなるという先行研究と一致するものである (Gurwitz & Dodge, 1977)。これらの優位ステレオタイプの特性の利用可能性と、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性に関する結果は、第三の予測を支持するものである。

これらの結果から、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性と優位ステレオタイプ抑制の交互作用は得られなかったが、男性が評定した「謙虚な」項目についてのみ、女性集団の非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いほど、逆説的効果が生じにくいという可能性が示唆された。このような極めて限定的な結果が得られた理由を以下では考察する。

まず、男性参加者にのみ、以上の結果が得られた理由として、外集団についてはより強くステレオタイプの判断をするということが挙げられる (Park & Rothbart, 1982)。つまり、男性参加者は、女性について評定する際は外集団を評定していることになるため、女性参加者に比べ女性に対する優位ステレオタイプを強く持っているといえる。本研究で用いた「専業主婦」に対しては、女性大学生よりも男子大学生の方がより強く優位ステレオタイプを持っており、その結果、男性参加者の評定のみに有意な結果が得られた可能性が考えられる。

次に、32項目中1項目（「謙虚な」項目）においてのみ以上のような結果が得られたことから、優位ステレオタイプの判断の測定に用いたほとんどの項目では、本研究の参加者においては女性の優位ステレオタイプを正確に測定できなかった可能性が考えられる。性別によって、ジェンダー・ステレオタイプに関する判断が異なることから (e.g., Glick & Fiske, 1996; Swim et al., 1995)、参加者にとって妥当な優位ステレオタイプの特性語を用いて測定しなければ、正確

な優位ステレオタイプの判断の測定が行えないと考えられる。本研究では、優位ステレオタイプの特性の利用可能性を測定するために「専業主婦」、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性を測定するために「キャリアウーマン」を取り上げたが、本研究の参加者である大学生が、「専業主婦」や「キャリアウーマン」に対して、あらかじめ用意されたそれぞれに関する32の特性語に当てはまるステレオタイプを十分に持っていなかったという可能性が考えられる。さらに、優位ステレオタイプ抑制の操作チェックにおいて、2名の評定者の一致率が十分に高くなかったことから、大学生が「専業主婦」について明確なステレオタイプを持っていなかった可能性もある。

以上のことから、本研究で明確な結果が得られなかった理由として、大学生がもつ女性の優位ステレオタイプの特性また非優位ステレオタイプの特性がどの程度確立されているかが不明であることが挙げられ、さらに、そうしたステレオタイプの特性を測定し実験的操作を行うステレオタイプの特性語の項目の妥当性も疑われる。

本研究では、以上のような問題が残されるが、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性と優位ステレオタイプ抑制による逆説的效果との関係を検討した。交互作用効果は得られなかったが、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いほど、逆説的效果が生じにくいという可能性が示唆された。次の研究5では、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的特性のひとつとして認知的複雑性を取り上げ、それらの関係を検討する。

5.2 研究 5：非優位ステレオタイプの特性の利用可能性と

認知的複雑性との関係⁵

5.2.1 問題

研究 5 では、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差と認知的複雑性の関係について検討する。第 4 章において非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいことが示されたことから、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人は、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として利用しやすく、逆説的効果が生じにくいという可能性が考えられる。この可能性を検討するために、研究 4 では非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差と逆説的効果との関係を検討した。その結果、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人ほど、優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果が生じにくいという可能性が示唆された。

そこで、本研究では、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差の背後にある認知特性のひとつとして認知的複雑性（Bieri, 1955）を取り上げ、それらの関係について検討する。認知的複雑性が高い個人は、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いため、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすく、その結果、逆説的効果が生じにくいと考えられる。

認知的複雑性と逆説的効果との関係を検討する前に、本研究では、実際に、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人ほど、認知的複雑性も高

⁵ 本研究は、次の学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。山本 真菜・岡 隆（2013）. 認知的複雑性と集団のサブタイプとの関係 日本社会心理学会第 54 回大会発表論文集, 367.

いかどうかを検討する。具体的には、まず、認知的複雑性を測定し、次に、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性を測定するために、女性についてどのようなタイプの人がいるのかを想像させその特徴を回答させた。最後に、女性に対する優位ステレオタイプの判断を測定した。女性のタイプの回答数が多いほど、認知的複雑性の得点が高いと予測する。

5.2.2 方法

調査参加者

大学生 129 名 (男性 48 名, 女性 75 名, 不明 6 名; 平均年齢 18.56 歳, $SD = 1.08$) が調査に参加した。欠損項目のあった 12 名のデータを分析から除外し, 117 名のデータが分析に用いられた。

手続き

まず、認知的複雑性の測定を行った。認知的複雑性を測定する方法として Rep テスト (role construct repertory test; Kelly, 1955) に回答を求めた。本研究では、林 (1976) に基づいた Rep テストを使用した。5 人の役割人物 (好きな男性, 嫌いな男性, 好きな女性, 嫌いな女性, 自分自身) を身の周りから挙げさせ, その人物の印象について 20 個の形容詞に 7 件法 (1: 全く当てはまらない—7: 非常によく当てはまる) で評定を求めた。形容詞は、大橋・三輪・平林・長戸 (1973) により印象評定に適しているとされた正と負の 20 個の形容詞を用いた (Table 5.2.1)。この形容詞は、認知的複雑性を測定した先行研究でも使用されているものである (林, 1976; 坂元・沼崎, 1989)。これらの形容詞は、正と負がそれぞれ 2 つ以上連続しないように提示された。

Table 5.2.1
Repテストで使用した20個の形容詞

1	無気力な
2	自信のある
3	社交的な
4	沈んだ
5	軽薄な
6	分別のある
7	心の広い
8	卑屈な
9	親しみにくい
10	人なつっこい
11	かわいらしい
12	感じの悪い
13	不親切な
14	人のよい
15	無責任な
16	慎重な
17	恥ずかしがりの
18	積極的な
19	気長な
20	なまいきな

次に、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の測定を行った。女性について、どのようなタイプの人がいるかを想像してもらい、思いつくすべてのタイプについて回答を求めた。10個の回答欄があり、思いついたタイプについて、そのタイプの典型的な人を思い浮かべてその人の特徴を自由記述させた。

次に、女性に対する優位ステレオタイプの判断を測定するために、女性に対する印象評定を求める課題を行った。一般的な女性が34項目の評定項目にどの程度当てはまるかを7件法（1：全く当てはまらない—7：非常によく当てはまる）で回答を求めた。

5.2.3 結果

認知的複雑性得点の算出

認知的複雑性の指標として TCC (Total cognitive complexity; 林, 1976) を使用した。TCC は Rep テストで使用された各形容詞がどれだけ評価次元 (正と負を両極とする次元) から分化しているかをみるものである。つまり, TCC では, Rep テストにおいて, 役割人物について正の形容詞を当てはまると回答した場合と負の形容詞を当てはまらないと回答した場合を正評定として, 負の形容詞を当てはまると回答した場合と正の形容詞を当てはまらないと回答した場合を負評定とし, 形容詞の正負の一致する数が多いほど, 認知的複雑性が低いことを示す。各役割人物の TCC は, 正評定と負評定と中央点評定のそれぞれの総一致数を算出し, それらを合計した値である。TCC の算出手順は次の通りである。まず, 7 段階評定の結果を, 中央点評定を 0, 正評定の評価を+, 負評定の評価を-として符号化した。次に, 役割人物ごとに, 20 個の形容詞のそれぞれに与えられた符号の総一致数を算出した。計算式は, $kC_{+} + lC_{-} + mC_{0} / 2$ となる。ただし, k : 正評定数, l : 負評定数, m : 中央点評定である。すべての役割人物の TCC の合計値が, その参加者の TCC の得点となる。坂元 (1991) の方法にならって, 役割人物ひとりについて 20 の評定値の内ひとつでも欠損値があると計算ができないので, 欠損値が 2 つ以下の場合, 当該の役割人物の平均評定値で, 欠損値を置き換えた。TCC の得点は値が高いほど認知的複雑性が低いことを示すが, 本研究では, 値が高いほど認知的複雑性が高いことを示す得点になるように逆転の処理を行った。具体的には, TCC 得点の最高点である 190 点から素点を引いた値を認知的複雑性の得点とした。したがって, 以降で示す認知的複雑性の得点は, 得点が高いほど認知的複雑性が高いことを示す。認知的複雑性

得点の平均値は 106.66, 標準偏差は 16.51 であった。

非優位ステレオタイプの特性の利用可能性と認知的複雑性との関係

非優位ステレオタイプの特性の利用可能性と認知的複雑性との関係を検討するために、回答された女性のタイプ数と認知的複雑性の相関係数を算出した (Table 5.2.2)。タイプ数を正確に回答したと考えられる、2 個から 5 個の間の数を回答した参加者について分析を行った。なぜなら、10 個の解答欄があり、そのうち 1 個しか回答していない場合や、6 個—10 個と多く回答した場合は、教示に正確に従って回答していた可能性が低いと考えられるからである。1 個のみ回答した場合は、調査に対して回答する意欲が低かった可能性があり、6 個以上回答している場合は、女性の特徴を回答してくださいという教示に正確に従っていなかった可能性が考えられる。教示に正確にしたがって回答したと考えられる 2 個から 5 個の間の数を回答した参加者について分析した結果、男性参加者の相関係数について、正の相関が有意傾向であった ($r = .38, p < .10$)。参加者全体と女性参加者については有意な結果は得られなかった。

先行研究では、認知的複雑性が低い個人は高い個人よりも、ステレオタイプの判断をしやすいことが示されていることから (e. g., Ben-Ari et al., 1992), 優位ステレオタイプの判断と認知的複雑性が共変関係にある可能性が考えられる。そこで、女性に対する優位ステレオタイプの判断を統制変数として、回答された女性のタイプ数と認知的複雑性の偏相関係数を算出した (Table 5.2.3)。女性に対する優位ステレオタイプの判断の得点は、34 項目のうち、最も得点の高かった、「うわさ好き」項目の得点の平均値を用いた。その結果、男性参加者の偏相関係数について、有意な正の相関が得られた ($r = .41, p < .05$)。参加者全体と女性参加者については有意な結果は得られなかった。

Table 5.2.2
認知的複雑性と非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の相関

	相関係数	<i>p</i> 値
全体 (<i>n</i> = 66)	.14	.279
男性 (<i>n</i> = 27)	.38	.053
女性 (<i>n</i> = 35)	-.01	.943

Table 5.2.3
優位ステレオタイプの判断を統制した
認知的複雑性と非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の偏相関

	偏相関係数	<i>p</i> 値
全体 (<i>n</i> = 66)	.13	.304
男性 (<i>n</i> = 27)	.41	.047
女性 (<i>n</i> = 35)	-.004	.984

5.2.4 考察

本研究では、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性と認知的複雑性との関係を検討した。具体的には、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いほど認知的複雑性も高い、つまり、回答された女性のタイプ数が多いほど認知的複雑性の得点は高いと予測した。その結果、男性参加者において、女性のタイプ数を多く回答するほど認知的複雑性の得点が高いという結果が得られた。この結果は、仮説を支持するものである。

しかし、本研究の結果は限定的なものであった。具体的には、男性参加者についてのみ得られた結果であり、さらに、分析対象者は女性のタイプ数を 2 個—5 個の間で回答した参加者であった。女性のタイプ数を回答する際に、教示に

従い非優位ステレオタイプの特性を回答していたと考えられる参加者を分析対象者としたが、本研究で用いた方法で、実際に集団の非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が測定できていたかは明確ではない。今後、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の測定方法について改善する必要がある。

本研究では、限定的ではあるが、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人ほど、認知的複雑性が高いという可能性が示された。序論の 3.2 で述べたように、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人は、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすく、逆説的效果が生じにくいと考えられる。本研究では、この非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的特性として、認知的複雑性があることが示された。そこで、実際に、認知的複雑性の高低によって、優位ステレオタイプ抑制による逆説的效果に違いがあるかどうかを、研究 6、研究 7 では検討する。

5.3 研究 6：認知的複雑性による逆説的効果の違い

—ステレオタイプの判断の顕在的測定による検討—⁶

5.3.1 問題

研究 6 では、認知的複雑性とステレオタイプ抑制による逆説的効果の関係を、ステレオタイプの判断を顕在的に測定することによって検討する。研究 5 では、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人ほど、認知的複雑性が高いという可能性が示された。このことから、認知的複雑性が高い個人は、優位ステレオタイプ抑制の際に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすく、その結果、逆説的効果が生じにくいという可能性が考えられる。

そこで、本研究では、認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいという仮説を検討する。本研究では、優位なステレオタイプの抑制を扱う前に、女性に対するステレオタイプのなかでもこれまで多くの研究で扱われており、本研究の参加者である大学生が多く接していると考えられる女性の数学能力に関するステレオタイプを取り上げ (e.g., Nosek, Banaji & Greenwald, 2002; Steele & Ambady, 2006), 認知的複雑性が高い個人よりも低い個人の方が、ステレオタイプ抑制を行うと、ステレオタイプの判断を行いやすいという予測を検証する。

⁶ 本研究は、次の論文と学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。山本 真菜・岡 隆 (2015). 認知的複雑性とステレオタイプ抑制による逆説的効果との関係 日本大学心理学研究, 36, 8-15. 山本 真菜・岡 隆 (2013). 認知的複雑性とステレオタイプ抑制による逆説的効果との関係 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 143. Yamamoto, M., Oka, T. (2014). The relationship between cognitive complexity and paradoxical effects in stereotype suppression, The 15th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology (in Austin, Texas, USA) (February 14th, 2014).

具体的には、2回に分けて同じ参加者に質問紙の回答を求めた。第一回目の質問紙では、女性の数学能力について記述する課題を行い、その際に、ステレオタイプを抑制させる条件と抑制させない条件を設けた。その後、女性の数学能力に対する顕在的な判断を測定した。第二回目の質問紙では、認知的複雑性を測定した。認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいという仮説を検討する。つまり、認知的複雑性が低い個人では、ステレオタイプ抑制を行った条件はステレオタイプ抑制を行わなかった条件に比べ、ステレオタイプの判断の得点が高いが、一方、認知的複雑性が高い個人では、ステレオタイプ抑制を行った条件とステレオタイプ抑制を行わなかった条件でステレオタイプの判断の得点に差はみられないと予測する。

5.3.2 方法

実験参加者

大学生 184 名 (男性 101 名, 女性 82 名, 不明 1 名; 平均年齢 19.41 歳, $SD = 1.11$) が調査に参加した。回答項目に欠損のあった 33 名を分析から除外し, 151 名のデータが分析に用いられた。

材料

2回に分けて質問紙調査を行った。第一回目の質問紙は、調査者が異なる2つの質問紙がセットになったものであった。第一回目の1つ目の質問紙は「文の生成に関する認知心理学的研究」と称されていた。まず、第二回目の質問紙と対応させるために、参加者に参加者自身の誕生日と名前のイニシャルを組み合

わせた ID を記入するように求めた。この質問紙では、ある女性が数学の授業を受けている様子を 5 分間で記述する課題を行った。その記述の際にステレオタイプ抑制の操作を行った。このとき、ステレオタイプ抑制あり条件にのみ「一般的に、女性は数学が苦手というイメージがありますが、そのような女性のイメージに基づいて書かないように注意してください」というステレオタイプを抑制させるための教示が記載されていた。ステレオタイプ抑制なし条件には、そのような教示は記載されていなかった。

第一回目の 2 つ目の質問紙は、「人物の適性判断に関する教育心理学的研究」と称されていた。2 つ目の質問紙では、ある女性に対する印象を評定する課題を行った。これによって、ステレオタイプの判断の測定を行った。具体的には、課題間の影響を最小限に抑えるために、「教員採用試験の書類審査で、審査者が書面のみでどのような印象を抱くかを調査することを目的としています」という教示が記載されていた。ある女性の自己 PR 文の内容の要約について読み、その人物の印象について、「理論的考えができそう」、「図形問題に強そう」、「数字に強そう」の 3 項目について 7 件法（1：全く当てはまらない—7：非常によく当てはまる）で回答を求めた。フィラー項目として、他に 9 項目が加えられていた。さらに、フィラーとして、同様にある男性についても回答を求めた。

第二回目の質問紙は、「人物に対する印象形成研究の予備調査」と称されていた。まず、第一回目の質問紙と対応させるために、第一回目の質問紙と同様に、参加者に参加者自身の誕生日と名前のイニシャルを組み合わせた ID を記入するように求めた。この質問紙では、認知的複雑性を測定する方法として Rep テスト（role construct repertory test; Kelly, 1955）に回答を求めた。測定の方法は、研究 5 と同様であり、林（1976）に基づいた Rep テストを使用した。5 人の役割人物（好きな男性、嫌いな男性、好きな女性、嫌いな女性、自分自身）を身の周

りから挙げさせ、その人物の印象について 20 個の形容詞に 7 件法（1：全く当てはまらない—7：非常によく当てはまる）で評定を求めた。

なお、ステレオタイプ抑制による逆説的効果に関係があると考えられる他の個人差として「曖昧さ耐性」と「平等主義的性役割態度」を測定したが、どちらも関連はみられなかった。具体的には、曖昧さ耐性の測定には、心理的健康と関連する曖昧さ耐性尺度（増田，1998）を使用した。曖昧さ耐性とは、曖昧な状況に認知的に耐えられるかどうかの個人差であり、曖昧さ耐性が低い人は、何事も白黒はっきりさせたいという傾向がある（Frenkel-Brunswik, 1954）。しかし、分析の結果、曖昧さ耐性と優位ステレオタイプ的特性の抑制による逆説的効果には関係はみられなかった。さらに、本研究では、女性の数学能力に対するステレオタイプを扱うため、平等主義的性役割態度を測定した。平等主義的性役割態度の測定には平等主義的性役割態度スケール短縮版を使用した（鈴木，1994）。平等主義的性役割態度とは、男女の性役割態度における平等志向性の個人差である（鈴木，1991）。しかし、分析の結果、平等主義的性役割態度とステレオタイプ抑制による逆説的効果には関係はみられなかった。

手続き

調査は、授業時間内を利用し第一回目と第二回目の間を 2 週間空けて行われた。第一回目の調査では、調査者は、質問票を参加者に配布し、課題間の影響を最小限に抑えるために以下の内容を教示した。セットになっている 2 つの質問紙は調査者が異なり、1 つ目の質問紙は「文の生成に関する認知心理学的研究」であり、2 つ目の質問紙は「人物の適性判断に関する教育心理学的研究」であることを強調した。調査は調査者の指示に従って進められた。第二回目の調査では、調査者は、質問票を参加者に配布し、最後まで各自で進めるように教示し

た。第二回目の調査後、デブリーフィングを行った。

5.3.3 結果

認知的複雑性得点の算出

Rep テストで測定された認知的複雑性を得点化するために、研究 5 と同様に TCC (Total cognitive complexity; 林, 1976) という指標を使用した。TCC は Rep テストで使用された各形容詞がどれだけ評価次元 (正と負を両極とする次元) から分化しているかをみるものである。TCC の計算手順は、計算式を除き、研究 5 と同様であった。本研究の計算式は、 $kC_2+lC_2+mC_2$ であり、 k : 正評定数、 l : 負評定数、 m : 中央点評定である。研究 5 と同様に、値が高いほど認知的複雑性が高いことを示す得点になるように逆転の処理を行った。したがって、以降で示す認知的複雑性の得点は、得点が高いほど認知的複雑性が高いことを示す。

なお、先行研究によって、「自分」に対する評定を加えるか否かが異なる (e.g., 池上, 1983; 坂元, 1991)。そこで、まず「自分」に対する評定も含めた役割人物 5 人についての得点を合計した TCC の得点を算出し、以下で示す分析と同様の分析を行ったところ、有意な結果は得られなかった。そこで、以下では、「自分」に対する評定を除いた 4 人の役割人物の得点を合計した TCC の得点についての分析結果を示す。この役割人物 4 人の認知的複雑性得点の平均値は 97.42、標準偏差は 20.06 であった。

認知的複雑性とステレオタイプの判断との関係

認知的複雑性とステレオタイプの判断との関係を検討するために、重回帰分析を行った。本研究では、扱っている変数は連続的な変数であり、さらに認知

的複雑性という個人差を扱っているため、重回帰分析を用いた。条件ごとの男女の内訳は、ステレオタイプ抑制あり条件は男性 43 名、女性 31 名であり、ステレオタイプ抑制なし条件は男性 40 名、女性 37 名であった。参加者の性、ステレオタイプ抑制、認知的複雑性およびそれらの交互作用項を説明変数、ステレオタイプの判断を基準変数として重回帰分析を行った。基準変数であるステレオタイプの判断の得点は、以下のように算出した。まず、女性の数学能力に対する判断を測定した 3 項目（「理論的考えができそう」、「図形問題に強そう」、「数字に強そう」）について、得点が高いほどステレオタイプの判断を行っていることを示すように、逆転の処理を行った。次に、3 項目の平均値を算出し、その値をステレオタイプの判断の得点とした。探索的に「理論的考えができそう」、「図形問題に強そう」、「数字に強そう」の 3 項目すべての組み合わせの平均値を基準変数として以下の重回帰分析を行ったが、「理論的考えができそう」と「数字に強そう」の平均値でしか有意な結果は得られなかった。そこで以降では、基準変数であるステレオタイプの判断の得点として、「理論的考えができそう」と「数字に強そう」の平均値 ($M = 4.18, SD = 0.95$) を用いた分析について示す。

以下の重回帰分析の結果で示されているように、「図形問題に強そう」項目を除いた他の 2 項目（「理論的考えができそう」、「数字に強そう」）の平均値について結果が得られたことから、女性の数学能力に関するステレオタイプは、図形問題に関するのではなく、数字や理論的考えに関することである可能性が考えられる。

重回帰分析を行う準備として、参加者の性とステレオタイプ抑制に関する条件をダミー変数化した（男性=1、女性 =0；ステレオタイプ抑制あり条件=1、ステレオタイプ抑制なし条件 = 0）。さらに、それらと認知的複雑性の得点、ステ

Table 5.3.1
「理論的考えができそう」と「数字に強そう」の平均値を基準変数とした
重回帰分析の結果

説明変数	$R^2 = .10$	
	β	p
参加者の性	.06	.43
ステレオタイプ抑制	.05	.51
認知的複雑性	.04	.65
参加者の性×ステレオタイプ抑制×認知的複雑性	-.22	.02

$F(7, 143) = 2.17, p < .05$

レオタイプの判断の得点を平均値が0、分散が1のZ得点に換算して標準化した。

次に、参加者の性、ステレオタイプ抑制、認知的複雑性およびそれらのすべての組み合わせの二次の交互作用項と三次の交互作用項を説明変数、ステレオタイプの判断を基準変数として重回帰分析を行った (Table 5.3.1)。その結果、モデルが有意であり ($R^2 = 0.10, F(7, 143) = 2.17, p < .05$)、参加者の性×ステレオタイプ抑制×認知的複雑性の交互作用効果が有意であった ($\beta = -0.22, t = -2.39, p < .05$)。交互作用効果が有意となったことから、Cohen & Cohen (1983) に基づく単純傾斜の検定を行った (Figure 5.3.1)。この検定では、説明変数の平均±1SDの値について分析を行う。つまり、認知的複雑性得点の平均+1SDを認知的複雑性高条件、認知的複雑性得点の平均-1SDを認知的複雑性低条件として分析を行った。その結果、男性において、認知的複雑性低条件では、ステレオタイプ抑制あり条件はステレオタイプ抑制なし条件よりも、ステレオタイプの判断の得点が高く ($\beta = 0.52, t = 3.29, p < .01$)、認知的複雑性高条件では、ステレオタイプ抑制の効果は見られなかった ($\beta = -0.10, t = -0.64, n.s.$)。さらに、男性において、有意傾向ではあったがステレオタイプ抑制あり条件では、認知的複雑性高条件は認知的複雑性低条件よりも、ステレオタイプの判断の得点が低く ($\beta =$

-0.34, $t = -1.89$, $p < .10$), ステレオタイプ抑制なし条件では, 認知的複雑性高条件は認知的複雑性低条件よりも, ステレオタイプの判断の得点が高いことが示された ($\beta = 0.28$, $t = 2.32$, $p < .05$)。女性においては, 有意な結果は得られなかった。

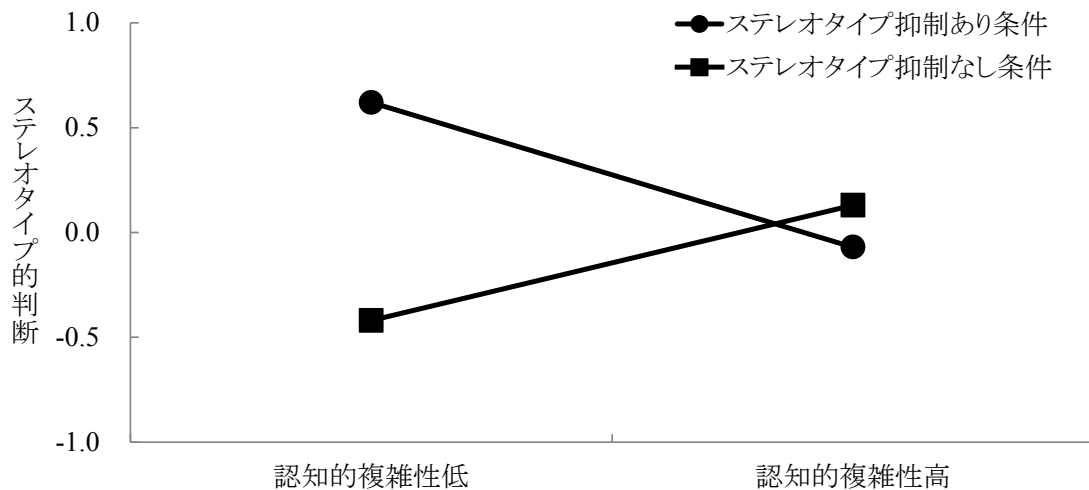


Figure 5.3.1. 男性参加者におけるステレオタイプ抑制と認知的複雑性の関数としてのステレオタイプの判断

5.3.4 考察

本研究では, 認知的複雑性と逆説的効果の関係を, ステレオタイプの判断を顕在的に測定することによって検討した。具体的には, 認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいが, 認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくいという仮説を検討した。つまり, 認知的複雑性が低い個人では, ステレオタイプ抑制あり条件はステレオタイプ抑制なし条件よりも, ステレオタイプ

的判断の得点が高いが、一方、認知的複雑性が高い個人では、ステレオタイプ抑制あり条件とステレオタイプ抑制なし条件でステレオタイプの判断の得点に差はみられないと予測した。

その結果、男性参加者において以下の結果が得られた。第一に、仮説通り、認知的複雑性が低い個人は、ステレオタイプ抑制あり条件はステレオタイプ抑制なし条件よりもステレオタイプの判断の得点が高く、一方、認知的複雑性が高い個人は、ステレオタイプ抑制あり条件とステレオタイプ抑制なし条件でステレオタイプの判断の得点に差がないことが示された。この結果は、仮説を支持するものである。第二に、仮説と矛盾しない結果として、ステレオタイプの抑制を行った場合、認知的複雑性が高い個人は低い個人よりもステレオタイプの判断の得点が高いことが示された。第三に、仮説には含めていなかったが、ステレオタイプ抑制を行わなかった場合には、認知的複雑性が高い個人は低い個人よりもステレオタイプの判断の得点が高いことが示された。

第一の結果から、認知的複雑性が高い個人は逆説的效果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的效果が生じやすいことが示唆された。この結果は、仮説を支持するものである。認知的複雑性が高い個人は、複数の次元を用いて集団を捉えることができると考えられるので、ステレオタイプを抑制する際に優位ステレオタイプの特性以外の特性、つまり非優位ステレオタイプの特性が利用しやすい代替思考となるため逆説的效果が生じないのかもしれない。

予測には含めていなかった第三の結果は、ステレオタイプ抑制を行わなかった場合は、認知的複雑性が高い個人は低い個人よりも、ステレオタイプの判断の得点が高いというものであった。このような結果が得られた理由を以下では述べる。認知的複雑性が低い個人は、ある人物を判断する際に、正と負を両極とする評価次元に偏った見方をするため、それ以外の次元を用いることが少な

いと考えられる。そのため、女性を判断する際に、数学能力についての次元に対するアクセス可能性が低く、ステレオタイプの判断の得点が低かったという可能性が考えられる。一方、認知的複雑性が高い個人は、ある人物を判断する際に、さまざまな次元を用いて判断することができるため、女性を判断する際に数学能力についての次元に対するアクセス可能性も高かった可能性がある。そのため、ステレオタイプ抑制を行わなかった場合は、認知的複雑性が高い個人の方がステレオタイプの判断をしやすいという可能性が考えられる。

本研究には、以下に挙げる 2 つの限界点がある。第一に、認知的複雑性が低い個人における、ステレオタイプ抑制の有無によるステレオタイプの判断の差は、抑制の逆説的効果ではなかった可能性も考えられる。つまり、実験操作の教示によってステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まっていただけという可能性がある。すなわち、ステレオタイプ抑制あり条件では、ステレオタイプ抑制課題において「女性は数学が苦手というイメージがあります」という教示がされている。この教示によって、女性のステレオタイプの特性が活性化されたため、ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高められた可能性が考えられる。そのため、認知的複雑性が低い個人において、ステレオタイプ抑制を行った場合はステレオタイプ抑制を行わなかった場合よりも、ステレオタイプの判断の得点が高くなった可能性がある。しかし、教示によってステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高められたのであれば、認知的複雑性が高い個人においても、ステレオタイプ抑制の有無でステレオタイプの判断に差が生じるはずである。しかし、認知的複雑性が高い個人は、同じ教示を受けたにも関わらず、ステレオタイプ抑制あり条件とステレオタイプ抑制なし条件でステレオタイプの判断の得点に差はみられなかった。これらのことから、認知的複雑性が低い個人における、ステレオタイプ抑制の有無によるステ

レオタイプの判断の差は、すべてが教示によるステレオタイプの特性のアクセス可能性の高まりだけによるとは考えられない。したがって、その差は、逆説的效果をも含んでいた可能性がある。今後は実験方法を変え、教示の効果と抑制の逆説的效果を分離するための実験を行う必要がある。

第二に、男性参加者についてのみの結果であり、女性参加者については有意な結果は得られなかったことが挙げられる。このような限定的な結果が得られた理由として、内集団よりも外集団に対しての方がより強くステレオタイプの判断を行うことが挙げられる (Park & Rothbart, 1982)。本研究で用いたステレオタイプの特性は女性に関するステレオタイプの特性であった。女性について評定する際、男性参加者は外集団を評定していることになる。本研究の参加者である男子大学生は、女性の数学能力に関するステレオタイプをもっていたため、男性参加者にのみ結果が得られた可能性が考えられる。今後は、一般化可能性について検討していく必要がある。

本研究では、ステレオタイプの判断を顕在的に測定することによって、認知的複雑性が高い個人は逆説的效果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的效果が生じやすいという可能性が示唆された。研究 7 では、本研究での知見の頑健性を確認し、この顕在的判断の背後にある認知的メカニズムを検討するために、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定することによって、認知的複雑性と優位ステレオタイプ抑制による逆説的效果との関係を検討する。

5.4 研究 7：認知的複雑性による逆説的効果の違い

—優位ステレオタイプの特性に対する

アクセス可能性の潜在的測定による検討—⁷

5.4.1 問題

研究 7 では、認知的複雑性と優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果との関係を、優位ステレオタイプの特性へのアクセス可能性を潜在的に測定することによって検討する。研究 6 では、ステレオタイプの判断を顕在的に測定することによって、認知的複雑性とステレオタイプ抑制による逆説的効果との関係について検討し、認知的複雑性が高い個人よりも低い個人の方が、優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果が生じやすいという結果が得られた。本研究では、研究 6 で示された認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいという知見の頑健性を確認し、さらに、顕在的な判断の背後にある認知的メカニズムを検討するために、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定することによって、認知的複雑性と逆説的効果との関係を検討する。

⁷ 本研究は、次の論文と学会ポスター発表の内容に加筆修正したものである。山本 真菜・岡 隆 (印刷中). ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差：認知的複雑性との関係。社会心理学研究。山本 真菜・岡 隆 (2014). 認知的複雑性とステレオタイプ抑制による逆説的効果との関係 —女性ステレオタイプを用いた検討— 日本社会心理学会第 55 回大会発表論文集, 290. Yamamoto, M., Oka, T. (2015). Individual Differences in Paradoxical Effects on Stereotype Suppression: Cognitive Complexity in Person Perception, The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology (in Long Beach, California, USA) (February 28th, 2015).

なお、本研究は、日本大学の研究倫理委員会の事前審査を受けた。

具体的には、まず、認知的複雑性を測定し、その高低によって参加者を分けた。次に、女性ステレオタイプを題材として、次のような実験を行った。まず、女性について記述する課題を行い、その際に優位ステレオタイプを抑制させる条件と抑制させない条件を設けた。その後、語彙判断課題によって女性ステレオタイプ関連語（優位ステレオタイプの特性語）と女性ステレオタイプ無関連語に対する反応時間を測定した。認知的複雑性が高い個人は逆説的效果が生じにくいが、認知的複雑性が低い個人は逆説的效果が生じやすいという仮説を検討する。つまり、認知的複雑性が低い個人では、優位ステレオタイプ抑制を行った場合は抑制を行わなかった場合に比べ、女性ステレオタイプ関連語に対する反応時間が短い。一方、認知的複雑性が高い個人では、優位ステレオタイプ抑制を行った場合と抑制を行わなかった場合で女性ステレオタイプ関連語に対する反応時間に差はないと予測する。

5.4.2 方法

実験計画

認知的複雑性（高、低）と優位ステレオタイプ抑制（優位ステレオタイプ抑制あり、優位ステレオタイプ抑制なし）を参加者間要因、語彙判断課題での単語の種類（女性ステレオタイプ関連語、女性ステレオタイプ無関連語）を参加者内要因とする 3 要因混合計画であった。従属変数は、語彙判断課題での単語に対する反応時間であった。

実験参加者

心理学に関する授業で、認知的複雑性の尺度に回答した 428 名のうち、実験

参加の意思を表明したのは 191 名であった。その 191 名の認知的複雑性の得点を算出し（算出方法は後述する）、中央値によって高群と低群に分けた。それぞれの群から、優位ステレオタイプ抑制あり条件と優位ステレオタイプ抑制なし条件が 12 名ずつになるように、無作為に割り当てた。低群における優位ステレオタイプ抑制なし条件では、1 名の実験が外部から妨害され一時中断したため、このデータを用いないことにしたので、1 名を追加した。その結果、実験参加者は合計 49 名（男性 17 名、女性 32 名；平均年齢 19.45 歳， $SD = 1.34$ ）となった。なお、以下で述べる予備調査の参加者とは異なる参加者であった。

認知的複雑性の測定には林 (1976) に基づく Rep テスト (role construct repertory test; Kelly, 1955) を使用した。測定方法は、研究 5、研究 6 と同様であり、5 人の役割人物（好きな男性、嫌いな男性、好きな女性、嫌いな女性、自分自身）を身の周りから挙げさせ、その人物の印象について 20 個の形容詞に 7 件法（1：全く当てはまらない—7：非常によく当てはまる）で評定を求めた。

認知的複雑性の指標として、研究 5、研究 6 と同様に、TCC (Total cognitive complexity; 林, 1976) を使用した。TCC は各形容詞がどれだけ評価次元から分化しているかをみるものである。TCC の算出手順は、研究 5、研究 6 と同様であり、計算式は、研究 5 と同様の $kC_2 + lC_2 + mC_2/2$ であった。ただし、 k ：正評定数、 l ：負評定数、 m ：中央点評定である。研究 5、研究 6 と同様に、値が高いほど認知的複雑性が高いことを示す得点になるように逆転の処理を行った。したがって、以降で示す認知的複雑性の得点は、得点が高いほど認知的複雑性が高いことを示す。

認知的複雑性の得点を算出したところ、実験参加の意思を表明した 191 名分の得点は、 $M = 98.78$ 、 $Me = 99.70$ 、 $SD = 18.77$ 、 $range = 50.40-138.60$ であった。実験参加者 49 名の認知的複雑性の得点は以下の通りである。男性参加者の得点

は、 $M = 101.73$, $SD = 16.07$ であり、女性参加者の得点は、 $M = 94.58$, $SD = 21.87$ であった。認知的複雑性の条件ごとの得点は、認知的複雑性高群 ($n = 24$) は、 $M = 113.50$, $SD = 11.42$, 認知的複雑性低群 ($n = 25$) は、 $M = 81.68$, $SD = 13.45$ であった。5人の役割人物(好きな男性, 嫌いな男性, 好きな女性, 嫌いな女性, 自分自身)の得点のアルファ係数は.73であった。

実験手続き

49名の参加者は、1名ずつ実験室での実験に参加した。参加者は、この実験が、ものごとを考えるときに頭のなかでどのようなことが起こっているか調べることを目的としていると伝えられた。実験参加同意書に署名した後、文完成課題と語彙判断課題を行った。

文完成課題 この課題を用いて、独立変数である優位ステレオタイプ抑制の操作を行った。参加者は、「女性は」から始まる文を6つ作成する課題を行った(Oe & Oka, 2003)。その際、人物を形容する言葉を用いること、同じ言葉は繰り返し使用しないこと、1つの文には1つだけ言葉を書くことが教示された。優位ステレオタイプ抑制あり条件では、「女性に当てはまることは書かないください」という優位ステレオタイプを抑制させる教示が行われた。優位ステレオタイプ抑制なし条件には、優位ステレオタイプを抑制させる教示は行われなかった。

語彙判断課題 研究3と同様に、語彙判断課題を用いて単語の判断に要した時間を測定し、従属変数とした。ここでの反応時間が短いほど、その単語が意味する概念へのアクセス可能性が高いことを示す(e.g., Galinsky & Moskowitz, 2007; Macrae et al., 1994)。参加者はパソコンの画面上に提示される文字列に意味があるかどうかを、キーを押して判断した。この課題で使用する女性ステレオ

タイプ関連語を選定するために、予備調査を行った。本実験に参加しない大学生 36 名（男性 19 名，女性 16 名，不明 1 名；平均年齢 20.94 歳， $SD = 0.75$ ）に，50 語についてどの程度女性に当てはまるかを 7 件法（1：全く当てはまらない—7：非常によく当てはまる）で評定を求めた。この結果から，得点の高かった 3 語を女性ステレオタイプ関連語とした（「おしゃれな」，「おしゃべりな」，「やさしい」）。なお，女性ステレオタイプ無関連語は，「せまい」，「からい」，「すくない」の 3 語であった。非単語は 6 語であり，意味のない文字列として女性ステレオタイプ関連語と女性ステレオタイプ無関連語に含まれる文字を組み合わせで作られた。具体的には，「しかな」，「れしおま」，「らさい」，「いおいべ」，「しすせ」，「やくい」であった。

なお，予備調査の内容について，男女差を検討した。その結果，予備調査で選定された女性ステレオタイプ関連語の「おしゃれな」，「おしゃべりな」，「やさしい」の 3 語は，男性参加者においても女性参加者においても，得点の高い上位 3 語であった。この結果から，本研究で用いた女性ステレオタイプ関連語に男女差はみられなかったと考えられる。

語彙判断課題の試行は以下の流れで行われた。注視点が 1,000 ms 提示された後で，ターゲット刺激の文字列が提示され，参加者のキー入力で文字列が消えるように設定されていた。次にブランクが 1,000 ms あり，その後，次の試行の注視点が提示されるという流れであった。本試行の前に，練習試行を 6 試行行った。なお，練習で使用された文字列は，女性ステレオタイプとは関連性がなく，本試行では提示されなかった。本試行は 4 ブロックで構成され，1 ブロックには 12 試行あり，そのうち 6 試行は単語であり（女性ステレオタイプ関連語が 3 試行と女性ステレオタイプ無関連語が 3 試行），6 試行は非単語であった。それぞれのブロック内では，同じ文字列が繰り返し提示されることはなかった。

文字列の提示順序は、参加者ごとに各ブロックで無作為であった。

すべての課題が終わった後、デブリーフィングを行った。研究目的や課題間の関係性に気づいた参加者はいなかった。

5.4.3 結果

分析対象者

語彙判断課題での反応時間が平均値から3 *SD* を超える1名のデータを以下の分析から除外した。前述した実験が中断した1名と合わせて合計2名が参加者49名から除かれ、47名のデータが分析に用いられた。

除外した後の条件ごとの人数は、認知的複雑性高群における優位ステレオタイプ抑制あり条件と優位ステレオタイプ抑制なし条件、認知的複雑性低群の優位ステレオタイプ抑制あり条件は各12名、認知的複雑性低群の優位ステレオタイプ抑制なし条件は11名であった。

優位ステレオタイプ抑制の操作チェック

実際に、優位ステレオタイプ抑制あり条件の参加者が女性の優位ステレオタイプを抑制していたかどうかを検討するために、文完成課題において参加者が作成した文の内容を分析した。目的を知らない2名の評定者が、文の内容について女性にどの程度当てはまるかを7件法（1：全く当てはまらない—7：非常によく当てはまる）で評定した。2名の評定者の相関が高かったため（ $r = .79$ ），2名の評定者の評定値の平均値を算出し、その値を、参加者によって作成された文の内容のステレオタイプ度得点とした。優位ステレオタイプ抑制あり条件（ $M = 2.67$, $SD = 1.11$ ）と優位ステレオタイプ抑制なし条件（ $M = 4.65$, $SD = 0.95$ ）

との間に差があるかどうかを検討するために、ステレオタイプ度得点に関して、 t 検定を行った。その結果、優位ステレオタイプ抑制あり条件は、優位ステレオタイプ抑制なし条件に比べ、有意にステレオタイプ度得点が低かった ($t(45) = 6.58, p < .01$)。したがって、優位ステレオタイプ抑制の操作は成功していたと考えられる。

代替思考の内容

探索的ではあるが、認知的複雑性によって代替思考の内容が異なるかどうかを検討するために、文完成課題で作成された文の内容のステレオタイプ度と反ステレオタイプ度について分析を行った。まず、条件ごとに、ステレオタイプ度に違いがあるかどうかを検討するために、優位ステレオタイプ抑制の操作チェックで算出したステレオタイプ度得点に対して、認知的複雑性（高，低）×優位ステレオタイプ抑制（優位ステレオタイプ抑制あり，優位ステレオタイプ抑制なし）の2要因の分散分析を行った。その結果、優位ステレオタイプ抑制の主効果が有意であり ($F(1, 43) = 42.10, p < .01$)、優位ステレオタイプ抑制あり条件 ($M = 2.67, SD = 1.11$) は、優位ステレオタイプ抑制なし条件 ($M = 4.65, SD = 0.95$) に比べ、ステレオタイプ度得点が低いことが示された。認知的複雑性の主効果 ($F(1, 43) = 0.55, n.s.$)、認知的複雑性と優位ステレオタイプ抑制の交互作用効果 ($F(1, 43) = 0.12, n.s.$) は有意ではなかった。

次に、文完成課題で作成された文の内容の反ステレオタイプ度についての分析を行った。具体的には、心理学を専攻する大学院生2名が、文完成課題において参加者が作成した文の内容について、どの程度女性の反ステレオタイプの特性に当てはまるかを7件法で評定した（1：全く当てはまらない—7：非常によく当てはまる）。その際に、反ステレオタイプの特性はステレオタイプの反対

の内容の特性であることと、ステレオタイプ化の程度が弱い特性である非優位ステレオタイプの特性と、反ステレオタイプの特性を区別して考えるように教示した。2名の評定者の相関が高かったので ($r = .80$)、2名の評定者の評定値の平均値を算出し、その値を反ステレオタイプ度得点とした。条件ごとに、反ステレオタイプ度得点に違いがあるかどうかを検討するために、認知的複雑性(高、低) × 優位ステレオタイプ抑制(優位ステレオタイプ抑制あり、優位ステレオタイプ抑制なし)の2要因の分散分析を反ステレオタイプ度得点に対して行った。その結果、優位ステレオタイプ抑制の主効果が有意であり、優位ステレオタイプ抑制あり条件 ($M = 5.73$, $SD = 1.21$) は、優位ステレオタイプ抑制なし条件 ($M = 2.30$, $SD = 1.16$) に比べ、反ステレオタイプ度得点が高かった ($F(1, 43) = 95.84$, $p < .01$)。なお、認知的複雑性の主効果 ($F(1, 43) = 0.57$, $n.s.$)、認知的複雑性と優位ステレオタイプ抑制の交互作用効果 ($F(1, 43) = 0.16$, $n.s.$) については、有意な結果は得られなかった。以上の分析の結果、認知的複雑性に関わる主効果も交互作用効果も有意ではなかった。したがって、認知的複雑性が低い個人が、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用しているかどうかはわからない。このような結果が得られた理由として、評定の際に、反ステレオタイプの特性と非優位ステレオタイプの特性が区別されていなかった可能性が考えられる。なぜなら、反ステレオタイプ度得点についての分析の結果は、ステレオタイプ度得点についての分析の結果と逆、つまり優位ステレオタイプ抑制を行った場合と行わなかった場合で、得点の高低が逆であったことから、この分析で用いた反ステレオタイプ度得点は、優位ステレオタイプの特性以外のすべての特性(反ステレオタイプの特性と非優位ステレオタイプの特性の両方)を反映していた可能性が考えられる。認知的複雑性の高低によって、実際に代替思考として使用する内容が異なるかどうかの検討は今後の課題であり、代替

思考の内容を精密に分析できる課題を検討する必要がある。

語彙判断課題における反応時間

語彙判断課題における女性ステレオタイプ関連語 3 語と女性ステレオタイプ無関連語 3 語に対する反応時間について分析を行った。それぞれの単語は、語彙判断課題において 4 回提示されているため、参加者 1 名につき 24 試行での反応時間が分析対象となった。これらの試行での誤答率は 1.53%であり、誤答の場合の反応時間を除いて分析を行った。まず、データの分布を正規分布に近似させるために、すべての反応時間を対数変換した。各参加者の反応時間を女性ステレオタイプ関連語と女性ステレオタイプ無関連語ごとに平均した値を以下での分析に使用した。

認知的複雑性の違いによる優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性の差異

優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果と認知的複雑性との関係を検討するために、認知的複雑性（高，低）×優位ステレオタイプ抑制（優位ステレオタイプ抑制あり，優位ステレオタイプ抑制なし）×単語の種類（女性ステレオタイプ関連語，女性ステレオタイプ無関連語）の 3 要因の分散分析を反応時間に対して行った。その結果，単語の種類の主効果が有意 ($F(1, 43) = 125.99, p < .01$)，優位ステレオタイプ抑制×単語の種類 of 2 要因の交互作用効果が有意 ($F(1, 43) = 15.25, p < .01$)，認知的複雑性×単語の種類 of 2 要因の交互作用効果が有意傾向 ($F(1, 43) = 3.91, p < .10$)，認知的複雑性×優位ステレオタイプ抑制×単語の種類 of 3 要因の交互作用効果が有意 ($F(1, 43) = 4.37, p < .05$)であった (Table 5.4.1)。

Table 5.4.1
各単語に対する認知的複雑性各群のステレオタイプ抑制条件ごとの対数変換後の平均反応時間と標準偏差

	認知的複雑性高群				認知的複雑性低群			
	ステレオタイプ抑制あり (n = 12)		ステレオタイプ抑制なし (n = 12)		ステレオタイプ抑制あり (n = 12)		ステレオタイプ抑制なし (n = 11)	
	女性ステレオタイプ 関連語	女性ステレオタイプ 無関連語	女性ステレオタイプ 関連語	女性ステレオタイプ 無関連語	女性ステレオタイプ 関連語	女性ステレオタイプ 無関連語	女性ステレオタイプ 関連語	女性ステレオタイプ 無関連語
平均値	6.17 (486)	6.26 (533)	6.22 (514)	6.28 (546)	6.12 (462)	6.28 (547)	6.23 (518)	6.29 (554)
標準偏差	0.08 (43.27)	0.09 (49.66)	0.09 (44.62)	0.10 (60.45)	0.12 (51.84)	0.13 (70.28)	0.09 (44.79)	0.08 (50.04)

注) 括弧内は対数変換前の反応時間を示す。

単語の種類の主効果は、女性ステレオタイプ無関連語に比べて女性ステレオタイプ関連語は反応時間が短いことを示していた。優位ステレオタイプ抑制×単語の種類2要因の交互作用効果が有意であったことから、単純主効果の検定を行った。その結果、女性ステレオタイプ関連語条件において、優位ステレオタイプ抑制なし条件に比べて優位ステレオタイプ抑制あり条件は反応時間が短かった ($F(1, 86) = 7.25, p < .01$)。さらに、優位ステレオタイプ抑制あり条件と優位ステレオタイプ抑制なし条件それぞれにおいて、女性ステレオタイプ無関連語条件に比べて女性ステレオタイプ関連語条件は反応時間が短かった ($F(1, 43) = 114.46, p < .01$; $F(1, 43) = 26.79, p < .01$)。認知的複雑性×単語の種類2要因の交互作用効果が有意傾向であったことから、単純主効果の検定を行った。その結果、認知的複雑性の高条件と低条件それぞれにおいて、女性ステレオタイプ無関連語条件に比べて女性ステレオタイプ関連語条件は反応時間が短かった ($F(1, 43) = 42.76, p < .01$; $F(1, 43) = 87.14, p < .01$)。

以上の効果は、3要因の交互作用効果によって制限されていた。認知的複雑性×優位ステレオタイプ抑制×単語の種類3要因の交互作用効果が有意であったため、認知的複雑性の高条件、低条件ごとに優位ステレオタイプ抑制×単語の種類2要因の単純交互作用の検定を行った。その結果、認知的複雑性の低条件においては、優位ステレオタイプ抑制×単語の種類2要因の交互作用効果が有意であった ($F(1, 43) = 17.97, p < .01$; Figure 5.4.1)。単純主効果の検定を行った結

果，女性ステレオタイプ関連語条件において，優位ステレオタイプ抑制なし条件に比べて優位ステレオタイプ抑制あり条件は反応時間が短かった ($F(1, 86) = 7.13, p < .05$)。さらに，優位ステレオタイプ抑制あり条件と優位ステレオタイプ抑制なし条件それぞれにおいて，女性ステレオタイプ無関連語条件に比べて女性ステレオタイプ関連語条件は反応時間が短かった ($F(1, 43) = 92.13, p < .01$; $F(1, 43) = 12.99, p < .01$)。なお，単純交互作用の検定を行った結果，認知的複雑性の高条件については，有意な効果は得られなかった ($F(1, 43) = 1.65, n.s.$)。

認知的複雑性得点と反応時間の性差の検討

参加者の性別で，認知的複雑性得点，女性ステレオタイプ関連語に対する反応時間，女性ステレオタイプ無関連語に対する反応時間それぞれに差がないかを検討したところ，認知的複雑性の得点 ($t(45) = 1.20, n.s.$)，女性ステレオタイプ関連語の反応時間 ($t(45) = 0.05, n.s.$)，女性ステレオタイプ無関連語の反応時間 ($t(45) = 0.34, n.s.$) のすべてにおいて，性別による有意な差は得られなかった。

なお，条件ごとの男女の内訳は，認知的複雑性高群における優位ステレオタイ

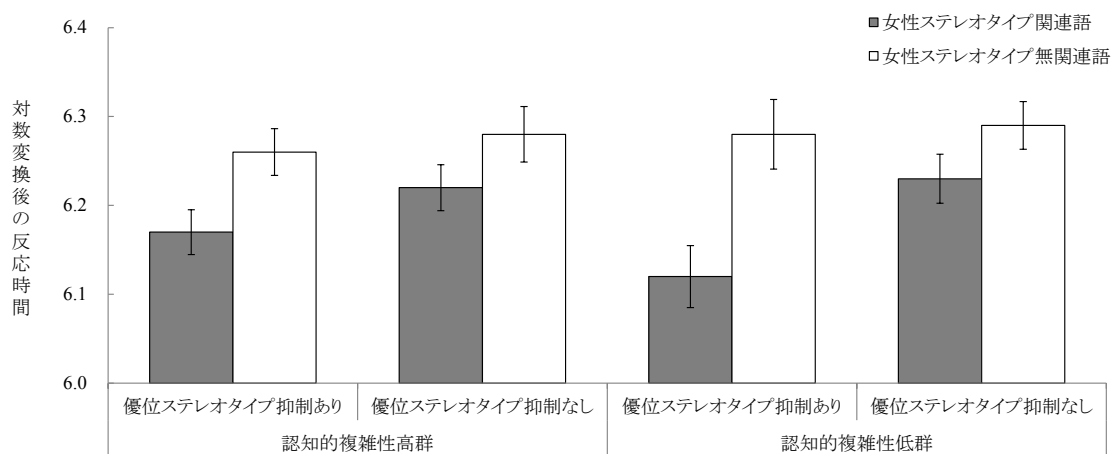


Figure 5.4.1 各単語に対する認知的複雑性各群のステレオタイプ抑制条件ごとの平均反応時間と標準誤差

プ抑制あり条件は男性 5 名，女性 7 名であり，優位ステレオタイプ抑制なし条件は男性 6 名，女性 6 名であった。認知的複雑性低群における優位ステレオタイプ抑制あり条件は男性 1 名，女性 11 名，優位ステレオタイプ抑制なし条件は男性 4 名，女性 7 名であった。認知的複雑性低群における優位ステレオタイプ抑制あり条件で，男性参加者が 1 名であったため，条件ごとの男女差の分析は不可能であった。

5.4.4 考察

本研究では，認知的複雑性と逆説的効果との関係を，優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定することによって検討した。具体的には，認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくいと認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいという仮説を検討した。つまり，認知的複雑性が低い個人では，優位ステレオタイプ抑制あり条件は優位ステレオタイプ抑制なし条件に比ステレオタイプ関連語に対する反応時間が短いと一方，認知的複雑性が高い個人では，優位ステレオタイプ抑制あり条件と優位ステレオタイプ抑制なし条件でステレオタイプ関連語に対する反応時間に差はないと予測した。

その結果，仮説通り，認知的複雑性低条件の参加者では，優位ステレオタイプ抑制なし条件に比べて優位ステレオタイプ抑制あり条件で，語彙判断課題における女性ステレオタイプ関連語への反応時間が短く，認知的複雑性高条件の参加者では，優位ステレオタイプ抑制あり条件と優位ステレオタイプ抑制なし条件で，女性ステレオタイプ関連語への反応時間に差がないことが示された。この結果は仮説を支持するものである。

このように、本研究で得られた結果は、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいが、認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくいということを示唆している。この結果は、研究 6 の結果を支持するものである。

さらに、本研究では、従属変数として優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定することによって、顕在的な判断の背後にある認知的メカニズムを検討した。本研究の結果から、序論の 3.3 で述べたように、Wegner の思考抑制のモデルに基づくと、認知的複雑性の個人差による逆説的効果の違いを次のように想定できる。つまり、認知的複雑性が低い個人は、集団を優位ステレオタイプの特性で捉えやすく、優位ステレオタイプを抑制する際は、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすいと考えられる。反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、Oe & Oka (2003) が示しているように、逆説的効果が生じることになる。なぜなら、反ステレオタイプの特性は優位ステレオタイプの特性との連想価が高いと考えられるので、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合は、それと並行して優位ステレオタイプの特性も思考上に浮かびやすいと考えられるからである。そのため、実行過程および監視過程を強く働かさなければならず、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりやすく、逆説的効果が生じやすいと考えられるのである。一方、認知的複雑性が高い個人は、優位ステレオタイプの特性だけでなく、非優位ステレオタイプの特性も代替思考として利用しやすいと考えられる。非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、逆説的効果が生じにくいと考えられる。なぜなら、非優位ステレオタイプの特性は優位ステレオタイプの特性との連想価が低いと考えられるので、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用しても、比較的、優位ステレオタイプの特性は思考上に浮かびにくいと考えられる。そのため、実行過程および監

視過程の働きは弱くてもよく、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性は高まりにくく、逆説的效果が生じにくいと考えられる。

本研究には、少なくとも以下に挙げる 6 つの限界点がある。第一に、優位ステレオタイプ抑制の操作に用いた文完成課題について、2 つの問題を述べる。まず、この課題は、「女性は」から始まる文を完成させる課題であったため、優位ステレオタイプ抑制なし条件では、参加者がこの課題によって優位ステレオタイプの特性を表出していた可能性がある。Lieberman & Förster (2000) では、参加者がステレオタイプを抑制した後にそのステレオタイプを表出すると、その表出後にはステレオタイプに対するアクセス可能性が低減されることが示されている。本研究で用いた文完成課題は、ステレオタイプ抑制後の表出ではないが、一般の思考に関する単なる表出の効果を扱った研究 (e.g., Sparrow & Wegner, 2006) にみられるように、ステレオタイプ抑制においても単なる表出によってそのアクセス可能性が低減される可能性が考えられる。具体的には、本研究の優位ステレオタイプ抑制なし条件ではステレオタイプを表出させたことになり、そのため、その後の優位ステレオタイプの特性語に対するアクセス可能性が低くなったという可能性が考えられるのである。この代替説明の可能性については今後の検討課題である。

次に、条件によって、文完成課題の困難度が異なり、その結果、女性ステレオタイプについて考える時間が異なってしまう、そのために女性の優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が異なっていたという可能性が考えられる。まず、優位ステレオタイプ抑制あり条件では、代替思考を生成しなければならないので、優位ステレオタイプ抑制なし条件よりも、認知的複雑性の高低にかかわらず全般的に、文を完成するのが困難であったという可能性が考えられる。次に、認知的複雑性の低い個人は、高い個人よりも、その困難さが高

かった可能性も考えられる。なぜなら、本研究の文完成課題では、6個の異なる文を完成するように求めており、認知的複雑性が高い個人では、反ステレオタイプの特性やさまざまな非優位ステレオタイプの特性が思考上に浮かびやすかったのに対して、認知的複雑性の低い個人では、反ステレオタイプの特性は思考上に浮かびやすくても、さまざまな非優位ステレオタイプの特性までもは思考上に浮かびにくかったと考えられるからである。このように、優位ステレオタイプ抑制あり条件の認知的複雑性が低い条件でのみ、他の3つの条件に比べて、文完成課題が困難であり、それに要する時間が長かった可能性があり、その結果、この条件でだけ女性の優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高かったという可能性がある。すなわち、本研究の結果は、このような女性ステレオタイプについて考える時間によって女性の優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まったことによっても説明することができることになる。しかし、本研究では、文完成課題の難易度や、それに要した時間の測定を行っていなかった。この代替説明の可能性についても、今後実証的検討が必要である。

第二に、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を測定した語彙判断課題について述べる。この課題で用いた女性ステレオタイプ関連語と女性ステレオタイプ無関連語は、単語の文字数、親密度、出現頻度などが統制されていなかったため、女性ステレオタイプ関連語は女性ステレオタイプ無関連語に比べ反応時間が短いという結果が得られた可能性がある。単語の文字数については、女性ステレオタイプ関連語として使用した3つの単語の文字数は5文字、6文字、4文字であり、女性ステレオタイプ無関連語として使用した3つの単語の文字数は3文字、3文字、4文字であった。文字数が少ないほうが反応時間が短いと仮定すると、女性ステレオタイプ無関連語のほうが文字数が少ない

ことから、本研究では文字数の違いが反応時間に影響を与えた可能性は低いと考えられる。しかし、単語に対する反応時間に関する先行研究では、単語の親密度 (e.g., Connine, Mullennix, Shernoff, & Yelen, 1990) や出現頻度 (e.g., Balota & Chumbley, 1985) によって反応時間が異なることが示されている。語彙判断課題に使用する単語の性質について、今後検討する必要がある。

第三に、女性ステレオタイプの男女差について述べる。本研究では、男女差を考慮せずにランダム割り当てを行ったところ、4つの条件のうち認知的複雑性低群における優位ステレオタイプ抑制あり条件において男性参加者が1名であった。本研究では女性ステレオタイプを扱っているため、ステレオタイプの強さや代替思考の利用可能性については性差があることを否定できない。今後は、性差の要因を含めた検討を行う必要がある。

第四に、認知的複雑性の高低によって、ステレオタイプの強さの程度が異なる可能性がある。先行研究では、認知的複雑性が低い個人は高い個人よりも、ステレオタイプの判断をしやすいことが示されている (e. g., Ben-Ari et al., 1992)。しかしながら、本研究では、優位ステレオタイプ抑制なし条件では認知的複雑性の高低による女性ステレオタイプ関連語に対する反応時間に差はみられなかった (優位ステレオタイプ抑制なし条件での認知的複雑性高群は $M = 514$ ms であり、認知的複雑性低群は $M = 518$ ms であった)。このように、先行研究と異なる結果が得られた理由として、ステレオタイプの測定方法の違いが考えられる。Ben-Ari et al. (1992) では、ステレオタイプの判断を測定する際に、対象集団が複数の特性についてどの程度当てはまるかを回答させるという主観的な測度を用いており、本研究では、ステレオタイプ関連語に対する反応時間を測定するという行動的な測度を用いている。このような方法論的な違いによって、本研究では認知的複雑性の高低によるステレオタイプの強さの違いがみら

れなかった可能性が考えられる。

第五に、参加者の中には、従属変数の刺激語であった女性ステレオタイプ関連語を、ステレオタイプとして捉えていなかった人がいる可能性が考えられる。前段落で述べたように、認知的複雑性が低い個人は高い個人よりも、ステレオタイプの判断をしやすいたことが示されている (e. g., Ben-Ari et al., 1992)。このことは、逆に言えば、認知的複雑性が高い個人は、ステレオタイプ化の程度が低いことを示唆しており、したがって、本研究で用いた女性ステレオタイプ関連語をステレオタイプとして捉えていなかった可能性が考えられる。今後、認知的複雑性が、優位ステレオタイプ抑制だけでなく、その前提となるステレオタイプ化そのものとどのように関わっているかを考慮して検討する必要がある。

第六に、認知的複雑性を扱った研究 5、研究 6 についても同様であるが、認知的複雑性の指標である TCC について述べる。まず、先行研究によって、「自分」に対する評定を加えるか否かが異なり (e.g., 池上, 1983 ; 坂元, 1991), 研究 5 と本研究では「自分」に対する評定を加えた TCC を用いており、研究 6 では、「自分」に対する評定を加えない TCC について結果が得られた。さらに、TCC を用いた先行研究では、その計算方法における中央点評点についての扱いが様々である。中央点評点を正評定や負評定と同等の重みで計算する方法 (池上, 1983) 中央点評定の重みを半分にする計算方法 (林, 1976), 中央点評定数の半分を正評定数に加算してもう半分を負評定数に加算する計算方法 (坂元, 1991) などがある。研究 5 と本研究では、中央点評定の重みを半分にする計算方法を用いており、研究 6 では、中央点評定を正評定や負評定と同等の重みで計算する方法を用いている。これらを含め、認知的複雑性の指標としてどのようなものが適切であるのか検討することが望まれる。

最後に、認知的複雑性に関係している他の個人差が、非優位ステレオタイプ

的特性の利用可能性を規定している可能性が挙げられる。認知的複雑性と共変
して、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性も規定している可能性が
ある根本的な個人差として、例えば、個人的構造欲求 (Personal Need for Structure)
が考えられる。個人的構造欲求は構造化された明確な認知への欲求の傾向であ
り、個人的構造欲求が高い個人は、単純な認知構造をしており、ステレオタイ
プ的な対人認知を行うことが示されている (Neuberg & Newsom, 1993)。このこ
とから、個人的構造欲求が低い個人は、認知的複雑性が高く、同時に非優位ス
テレオタイプの特性が利用可能であり、その結果として逆説的效果が生じにく
いという可能性も考えられる。実際に、認知的複雑性と関連するその他の個人
差が逆説的效果の生起のしやすさを規定する原因であるかどうかについては、
今後の研究課題である。

5.5 第5章のまとめ

第5章では、4つの実証研究を通して、優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差を検討した。第4章では、非優位ステレオタイプ的特性を代替思考として使用すると、逆説的効果が低減される可能性が示された。しかし、非優位ステレオタイプ的特性の利用可能性には個人差があると考えられる。そこで、第5章では、非優位ステレオタイプ的特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的特性のひとつである認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいという仮説を検討した。

研究4では、認知的複雑性を扱う前に、非優位ステレオタイプ的特性の利用可能性の個人差と逆説的効果との関係を検討した。その結果、非優位ステレオタイプ的特性の利用可能性が高い個人ほど、逆説的効果が生じにくい可能性が示された。

研究5では、非優位ステレオタイプ的特性の利用可能性の個人差の背後にある認知特性として認知的複雑性を取り上げ、非優位ステレオタイプ的特性の利用可能性と認知的複雑性との関係を検討した。その結果、非優位ステレオタイプ的特性の利用可能性が高い個人ほど、認知的複雑性が高い可能性が示された。

研究6、研究7では、認知的複雑性と逆説的効果との関係を検討した。

研究6では、ステレオタイプの判断を顕在的に測定することによって、認知的複雑性とステレオタイプ抑制による逆説的効果との関係を検討した。その結果、認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じやすいが、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じにくいことが示された。

研究7では、研究6での知見の頑健性の確認し、顕在的な判断の背後にある

認知的メカニズムを検討するために、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定した。その結果、認知的複雑性が高い個人は、優位ステレオタイプ抑制を行った場合と行わなかった場合で優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性に差がみられなかったが、認知的複雑性が低い個人は、優位ステレオタイプ抑制を行った場合は行わなかった場合に比べ、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高いことが示された。この結果から、研究 6 で得られた知見の頑健性が確認され、認知的複雑性が高い個人は、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすく、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、実行過程および監視過程の働きは弱くてもよく、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりにくいので、逆説的效果が生じにくいという可能性が示唆された。

第Ⅲ部 総合考察

第Ⅲ部は、第 6 章から第 8 章で成り立っており、第 I 部と第 II 部の内容を踏まえ総合的に考察した。

第 6 章では、本論文における実証研究の結果の概要について述べた。研究 1 から研究 7 で得られた知見を、対象集団に対する代替思考の役割と、逆説的効果の個人差それぞれについてまとめた。

第 7 章では、本論文の意義と今後の展望を述べた。まず、本論文の意義として、ステレオタイプ抑制研究における示唆と実際的な意義を述べた。最後に、今後の展望について述べた。

第 8 章では、本論文の結論を述べた。

第 6 章 本論文における実証研究の結果の概要

本論文では、優位ステレオタイプ抑制における対象集団に関連する代替思考の役割と個人差を検討した。第 6 章では、第 II 部の実証研究で得られた結果をまとめた。

まず、対象集団に関連する代替思考の役割についての本論文の実証研究の結果を述べた。第 4 章では、対象集団に関連する代替思考の役割について検討し、その結果、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されにくい、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすい可能性が示唆された。

次に、逆説的効果の個人差についての本論文の実証研究の結果を述べた。第 4 章では、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいことが示されたが、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性には個人差があると考えられる。そこで、第 5 章では、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的特性である認知的複雑性と優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果との関係を検討した。その結果、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人ほど、逆説的効果が生じにくい可能性が示唆され、さらに、この非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいという可能性が示唆された。

6.1 対象集団に関連する代替思考の役割

本論文では、ステレオタイプ抑制における対象集団に関連する代替思考を検討するために、次のような集団に対する認知の枠組みを考えた。

ステレオタイプには優位性があり、対象集団に対する当てはまりの程度が強い優位ステレオタイプの特性から、当てはまりの程度が相対的に弱い非優位ステレオタイプの特性までさまざまなものがあると考えられる。さらに、非優位ステレオタイプの特性のなかには、その当てはまりの程度が強い上位の非優位ステレオタイプの特性と、相対的に当てはまりの程度が弱い下位の非優位ステレオタイプの特性がある。サブタイプは、ステレオタイプに一致しない成員からなる下位集団であるため (Mauer, Park, & Rothbart, 1995; Weber & Crocker, 1983), サブタイプに関する特性を、本論文の枠組みに当てはめると、対象集団に対する当てはまりの程度が弱い非優位ステレオタイプの特性のひとつであると考えられる。

以上の議論から、優位ステレオタイプを抑制する際の対象集団に関連する代替思考には、優位ステレオタイプの特性の反対の内容である反ステレオタイプの特性と、非優位ステレオタイプの特性があると考えられる。

反ステレオタイプの特性と非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性は、抑制対象である優位ステレオタイプとの連想価によって規定されると考えられる。反ステレオタイプの特性は、優位ステレオタイプの特性の反意語であるため、これらの連想価は高いと考えられる。実際に、Galinsky & Moskowitz (2007) は、ステレオタイプを抑制すると、反ステレオタイプの特性が活性化されることを示している。Wegner の思考抑制のモデルに基づくと、優位ステレオタイプ抑制の際に、実行過程によって反ステレオタイプの特性が思

考えられる。そのため、実行過程および監視過程を強く働かさなければならず、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりやすく、逆説的効果が低減されにくいと考えられる。一方、非優位ステレオタイプの特性は、優位ステレオタイプの特性との連想価が低いと考えられる。したがって、優位ステレオタイプ抑制の際に、実行過程によって非優位ステレオタイプの特性が思考上に浮かんでも、優位ステレオタイプの特性は思考上に浮かびにくいと考えられる。そのため、反ステレオタイプの特性に比べ、実行過程および監視過程の働きは弱くてもよく、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性はそれほど高まることはなく、逆説的効果が低減されやすいと考えられる。以上の議論から、優位ステレオタイプ抑制の際に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、逆説的効果が低減されやすいという仮説を立てた。

そこで、第4章の研究1から研究3では、優位ステレオタイプ抑制における非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性を検討した。

研究1では、非優位ステレオタイプの特性としてサブタイプに関する特性を用いた。その結果、仮説とは逆に、サブタイプに関する特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されにくいことが示された。しかし、事後的な調査によって、代替思考として用いられた内容は反ステレオタイプの特性であったことが示された。したがって、研究1で得られた結果から、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、逆説的効果が低減されにくいことが示唆された。この結果は、先行研究(Oe & Oka, 2003)と一致するものであると考えられる。

研究2, 研究3では、対象集団に対する当てはまりの程度を直接測定して非優

位ステレオタイプの特性語を選定し、代替思考としての有効性を検討した。

研究 2 では、優位ステレオタイプの判断を顕在的に測定して、優位ステレオタイプ抑制における非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性を検討した。その結果、まず、先行研究で示されている通り (e.g., Macrae et al., 1994; Monteith et al., 1998), 単純に優位ステレオタイプ抑制を行った場合には逆説的效果が生じることが示された。さらに、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的效果が低減されやすい可能性が示唆された。

研究 3 では、顕在的な判断の背後にある認知的メカニズムを検討するために、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定することによって、優位ステレオタイプ抑制における非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての有効性を検討した。研究 3 では、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合と比較した。さらに、非優位ステレオタイプの特性の非優位性によって代替思考としての有効性が異なるかどうかを探索的に検討した。その結果、対象集団に対する当てはまりの程度が強い上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、単純に抑制する場合、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合、対象集団に対する当てはまりの程度が相対的に弱い下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合に比べ、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が低いことが示された。この結果から、Wegner の思考抑制のモデルに基づくと、優位ステレオタイプ抑制の際に、上位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、反ステレオタイプの特性および下位の非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合に比べ、実行過程および監視過程の働きが弱くてもよい場合、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりにくく、その結果、逆説的效果が低減されやすいという可能性が示唆され

た。

第 4 章でのこれらの結果は，対象集団に関連する代替思考のなかでも，反ステレオタイプ的特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されにくい
が，非優位ステレオタイプ的特性を代替思考として使用すると，逆説的効果が
低減されやすいということを示唆している。

6.2 逆説的効果の個人差

第4章では、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいという可能性が示唆された。しかし、この非優位ステレオタイプの特性の利用可能性には個人差があると考えられる。

集団に対する捉え方には個人差があり、集団を一次元上で捉えやすい個人とさまざまな次元から捉えやすい個人がいると考えられる。集団を一次元上で捉えやすい個人は、集団を主に優位ステレオタイプの特性で捉えやすいので、優位ステレオタイプを抑制する際は、優位ステレオタイプの特性とは反対の内容である反ステレオタイプの特性を代替思考として使用することが多いと考えられる。序論の2.4で述べたように、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、優位ステレオタイプの特性も思考上に浮かびやすいため、実行過程および監視過程を強く働かさなければならず、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりやすく、逆説的効果が生じやすいと考えられる。一方、集団を多次元的に捉えやすい個人は、優位ステレオタイプの特性だけでなく他のさまざまな次元の特性、つまり非優位ステレオタイプの特性も利用可能であるため、優位ステレオタイプを抑制する際は、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用することがあると考えられる。序論の2.4で述べたように、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、優位ステレオタイプの特性は思考上に浮かびにくく、実行過程および監視過程の働きは弱くてもよく、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性は高まりにくく、逆説的効果が生じにくいと考えられる。

このような非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的特性のひとつとして認知的複雑性がある。認知的複雑性とは、対人認知

を規定する認知的特性であり、社会的環境、なかでも他の個人を複数の次元を使用して捉えているかどうかという特性である (Bieri, 1955)。認知的複雑性が高い個人は、集団を多次元的に捉えており、集団のさまざまな次元を利用してその集団や集団成員を判断していると考えられる。つまり、認知的複雑性が低い個人は、主に優位ステレオタイプの特性やその反対の特性である反ステレオタイプの特性が利用可能なのに対して、認知的複雑性が高い個人は、それだけでなく、非優位ステレオタイプの特性も利用可能であると考えられる。認知的複雑性が低い個人は、優位ステレオタイプ抑制の際には、優位ステレオタイプの特性の反対の特性である反ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすく、その結果、逆説的効果が生じやすいと考えられる。一方、認知的複雑性が高い個人は、優位ステレオタイプ抑制の際には、反ステレオタイプの特性だけでなく、非優位ステレオタイプの特性をも代替思考として使用しやすく、その結果、逆説的効果が生じにくいと考えられる。

以上の議論から、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の背後にある認知特性である認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすいという仮説を検討した。

そこで、第5章の研究4から研究7では、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的複雑性と逆説的効果との関係を検討した。

研究4では、まず、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性と優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果との関係を検討した。その結果、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人ほど、逆説的効果が生じにくい可能性が示された。

研究5では、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性と、その個人差の背後にある認知的特性である認知的複雑性との関係を検討した。その結果、非優

位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人ほど、認知的複雑性が高い可能性が示された。

研究 6, 研究 7 では、認知的複雑性と逆説的効果との関係を検討した。

研究 6 では、優位ステレオタイプの判断を顕在的に測定することによって、認知的複雑性による逆説的効果の差異を検討した。その結果、認知的複雑性が高い個人は逆説的効果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は逆説的効果が生じやすい可能性が示唆された。

研究 7 では、顕在的な判断の背後にある認知的メカニズムを検討するために、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性を潜在的に測定することによって、認知的複雑性による逆説的効果の差異を検討した。その結果、認知的複雑性が低い個人は、優位ステレオタイプ抑制を行った場合は行わなかった場合に比べ、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高く、一方、認知的複雑性が高い個人は、優位ステレオタイプ抑制を行った場合と行わなかった場合で、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性に差はみられなかった。この結果から、Wegner の思考抑制のモデルに基づくと、認知的複雑性が高い個人は、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすいため、実行過程および監視過程の働きは弱く、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性は高まりにくく、逆説的効果が生じにくい、認知的複雑性が低い個人は、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすいため、実行過程および監視過程が強く働き、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりやすく、逆説的効果が生じやすいという可能性が示唆された。

第 5 章でのこれらの結果は、優位ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差として、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性があることを示唆して

いる。さらに、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的特性である認知的複雑性が高い個人ほど、優位ステレオタイプ抑制の際に、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすく、その結果、逆説的効果が生じにくいことを示唆している。

第7章 本論文の意義と今後の展望

第7章では、本論文の意義と今後の展望について述べた。

まず、本論文がステレオタイプ抑制の研究に与える示唆として、ステレオタイプ抑制における有効な代替思考を提案したことと、逆説的効果の個人差として認知的個人差である認知的複雑性を取り上げたことについて述べた。

次に、本論文の実際の意義について述べた。ステレオタイプの低減とその抑制の弊害である逆説的効果の低減につながる社会的方略について述べた。

最後に、本論文の今後の展望について述べた。

7.1 ステレオタイプ抑制研究に与える示唆

本論文がステレオタイプ抑制研究に与える示唆を2つ述べる。

第一に、ステレオタイプ抑制による逆説的効果の低減に有効な代替思考を提案したことが挙げられる。ステレオタイプ抑制は対人判断の文脈で行われるため、ステレオタイプ抑制における代替思考は対象集団に関連した内容である必要があると考えられる(田戸岡・村田, 2010)。しかし、ステレオタイプ抑制における対象集団に関連する代替思考を扱ったこれまでの研究では、逆説的効果を低減できるもの、低減できないものがあった(Oe & Oka, 2003; 田戸岡・村田, 2010)。本論文では、抑制対象である集団に関連する代替思考として、反ステレオタイプの特性と対象集団に対する当てはまりの程度が相対的に弱い非優位ステレオタイプの特性があると考え、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果は低減されにくい、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的効果が低減されやすいことを示した。

このことを説明するために、本論文では、次のような代替思考の働きを想定している。抑制対象である優位ステレオタイプの特性と代替思考との連想価によって、逆説的効果が低減できるかどうか異なると考えられる。反ステレオタイプの特性は抑制対象である優位ステレオタイプの特性の反対の内容の特性であるため、これらの連想価は高いと考えられる。したがって、反ステレオタイプの特性を代替思考として使用する場合は、それと並行して優位ステレオタイプの特性も思考上に浮かびやすく、実行過程および監視過程を強く働かさなければならない。その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりやすく、逆説的効果が生じやすいと考えられるのである。一方、非優位ステレオタイプの特性は優位ステレオタイプの特性との連想価が低いと考

えられる。したがって、非優位ステレオタイプ的特性を代替思考として使用しても、比較的、優位ステレオタイプ的特性は思考上に浮かびにくく、実行過程および監視過程の働きは弱いと考えられる。その結果、優位ステレオタイプ的特性に対するアクセス可能性は高まりにくく、逆説的效果が生じにくいと考えられる。

第二に、ステレオタイプ抑制による逆説的效果の個人差として認知的複雑性を取り上げたことが挙げられる。認知的複雑性が低い個人は逆説的效果が生じやすいが、認知的複雑性が高い個人は逆説的效果が生じにくいということが示唆された。

これまでの研究では、ステレオタイプ抑制による逆説的效果の個人差として、偏見が強い個人 (Monteith et al., 1998)、抑制の内的動機づけが高い個人 (Gordijn et al., 2004) が、ステレオタイプ抑制による逆説的效果が生じやすいことが示されている。このように、ステレオタイプ抑制による逆説的效果の個人差については、動機的な個人差が多く報告されており、認知的な個人差はあまり報告されていない。本論文は、認知的な個人差を検討した点において、ステレオタイプ抑制による逆説的效果の個人差の研究に示唆を与える研究であるといえる。内的な動機づけが低い個人においても、集団に対する多次元的な知識があれば、逆説的效果を低減することができる可能性があると考えられる。

7.2 実際的な意義

本論文は、対象集団に対する捉え方の認知構造を変容させることで、ステレオタイプ抑制による逆説的効果を低減することができるという可能性を示した点で実際的な意義もあると考えられる。つまり、社会的教育において、集団に対して画一的な情報のみを与えるのではなく、多様な情報を与えることが重要であることが示唆される。

対象集団を複数のカテゴリーで捉えたり、個人化して捉えることで、より多くの次元でその集団や他者を捉えることができると考えられる。例えば、序論の1.4で述べたように、非カテゴリー化や再カテゴリー化、交差カテゴリー化されることで、多くの次元を用いて対象集団を捉えることができ、ステレオタイプが低減されることが示されている (Brewer & Miller, 1984; Gaetner et al., 1989; Markus-Newhall et al., 1993)。現実社会には様々なカテゴリーが存在するので、ひとつのカテゴリーのみを強調するのではなく様々なカテゴリーの情報を提示したり、接触状況を変えたりすることで、集団や個人を多次元的に捉えることができると考えられる。また、相手が重要な人物であったり、相手に関心が高い場合には、相手の個人的な属性に注意を向けることが示されている (Fisk & Neuberg, 1990)。このことから、世の中の人々が、相互依存的に成り立っているということを知ることによって対象集団や他者を多次元的に捉えることができるとも考えられる。

本論文において、対象集団を多次元的に捉えることが、ステレオタイプ抑制による逆説的効果の低減に有効であることが示されたことから、以上で述べたように対象集団を多次元的に捉えるような情報に注意を向けることが、ステレオタイプの低減と、その抑制の弊害である逆説的効果の低減にもつながると考

えられる。

7.3 今後の展望

以上のように、本論文の知見は、ステレオタイプ抑制研究のみならず、実際的にも意義のあるものであると考えられる。以下では、さらに今後の展望を3つ述べる。

第一に、本論文では、対象集団に対して当てはまる程度が強いステレオタイプを優位ステレオタイプ、相対的に当てはまる程度が弱いステレオタイプを非優位ステレオタイプとして、優位ステレオタイプ抑制における非優位ステレオタイプの特性の代替思考としての役割を検討した。しかしながら、本論文で扱った集団以外の集団についてもステレオタイプの優位性が存在するかどうかは明確ではない。ステレオタイプの優位性を測定する方法や、集団によってステレオタイプの優位性がどのように異なるかについては、今度の研究課題である。

第二に、本論文では、逆説的効果を低減することができる有効な代替思考として、非優位ステレオタイプの特性を取り上げたが、非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用することの問題点があるかもしれない。優位ステレオタイプの特性を抑制する代わりに、非優位ステレオタイプの特性が活性化されてしまう可能性がある。しかし、本論文で主張したように、非優位ステレオタイプには非優位性があり、非優位ステレオタイプの特性のなかにはさまざまな特性があると考えられる。優位ステレオタイプを抑制する際に、あるひとつの非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用するのではなく、非優位ステレオタイプのさまざまな特性を代替思考として使用することができれば、対象集団に対して、固定されたイメージを抱かずに済むと考えられる。今後は、代替思考としての非優位ステレオタイプの特性の内容、使用方法によって対象集団に対する印象が異なるのかどうか検討する必要がある。

最後に、認知的複雑性が高い個人は、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高いため、代替思考として使用しやすく、逆説的効果が生じにくいという可能性が示されたが、認知的複雑性という認知的特性がどのように構成されるのかは本論文からはわからない。経験によって、対象集団に対するさまざまな情報を得ることで、非優位ステレオタイプの特性が利用可能性になり、認知的複雑性が高まると考えられる。今後、対象集団に対するどのような情報が認知的複雑性を高めるのか、検討する必要があるだろう。

第8章 結論

本論文は、ステレオタイプを抑制するとその後かえってステレオタイプの的な判断をしやすくなるという逆説的效果を低減するための代替思考とその個人差について検討した。その結果、次の2つの知見が得られた。

第一に、ステレオタイプ抑制における対象集団に関連する代替思考の役割を検討した。その結果、対象集団に対する当てはまりの程度が強い優位ステレオタイプを抑制する際に、当てはまりの程度が相対的に弱い非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりにくく、逆説的效果が低減されやすい可能性が示唆された。

第二に、ステレオタイプ抑制による逆説的效果の個人差を検討した。第一で述べたように非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用すると逆説的效果が低減されやすいが、その利用可能性には個人差があり、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性が高い個人は非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすいため、逆説的效果が生じにくいという可能性が示唆された。さらに、非優位ステレオタイプの特性の利用可能性の個人差の背後にある認知的特性のひとつとして認知的複雑性を取り上げ、認知的複雑性が高い個人は非優位ステレオタイプの特性が利用可能なため、優位ステレオタイプ抑制の際に非優位ステレオタイプの特性を代替思考として使用しやすく、その結果、優位ステレオタイプの特性に対するアクセス可能性が高まりにくく、逆説的效果が生じにくいという可能性が示唆された。

このような本論文の知見から、対象の集団やその集団に所属する成員を多次

元的に捉えることで、ステレオタイプ抑制の弊害である逆説的効果を低減できることが示唆された。

引用文献

- Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Cambridge, MA: Addison-Wesley. (原谷 達夫・野村昭 (共訳) (1968). 偏見の心理 培風館)
- Balota, D. A., & Chumbley, J. I. (1985). The locus of word-frequency effects in the pronunciation task: lexical access and/or production? *Journal of Memory and Language*, 24, 89-106.
- Bargh, J. A. (1990). Auto-motives: Preconscious determinants of social interaction. In Higgins, E. T. & Sorrentino, R. M. (Eds.), *Handbook of motivation and cognition: Foundation of social behavior* (pp. 93-130). Vol. 2. New York: Guilford Press.
- Bargh, J. A. (1999). The cognitive monster: The case against the controllability of automatic stereotype effects. In S. Chaiken & Y. Trope (Eds.), *Dual-process theories in social psychology* (pp. 361-382). New York: Guilford Press.
- Bargh, J. A., & Barndollar, K. (1996). Automaticity in action: The unconscious as repository of chronic goals and motives. In Gollwitzer, P. M. & Bargh, J. A. (Eds.), *The psychology of action: Linking cognition and motivation to behavior* (pp. 457-481). New York: Guilford Press.
- Ben-Ari, R., Kedem, P., & Levy-Weiner, N. (1992). Cognitive Complexity and Intergroup Perception and Evaluation. *Personality and Individual Differences*, 13, 1291-1298.
- Bieri, J. (1955). Cognitive complexity and predictive behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 263-268.
- Blair, I. V., & Banaji, M. T. (1996). Automatic and controlled processes in stereotype priming. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1142-1163.

- Blair, I. V., Ma, J. E., & Lenton, A. P. (2001). Imagining stereotypes away: The moderation of implicit stereotypes through mental imagery. *Journal of Personality and Social Psychology, 81*, 828-841.
- Brewer, M. B., & Miller, N. (1984). Beyond the contact hypothesis: Theoretical perspectives on desegregation. In N. Miller, & B. Miller (Eds.), *Groups in contact: The psychology of desegregation* (pp. 281-302). New York: Academic Press.
- Brewin, C. R., & Smart, L. (2005). Working memory capacity and suppression of intrusive thoughts. *Journal of Behavioral Therapy and Experimental Psychiatry, 36*, 61-68.
- Cacioppo, J. T., & Petty, R. E. (1982). The need for cognition. *Journal of Personality and Social Psychology, 42*, 116-131.
- Cohen, J., & Cohen, P. (1983). *Applied multiple regression/correlation analysis for the behavioral sciences*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Connine, C. M., Mullennix, J., Shernoff, E., & Yelen, J. (1990). Word familiarity and frequency in visual and auditory word recognition. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition, 16*, 1084-1096.
- Clark, D. M., Ball, S., & Pape, D. (1991). An experimental investigation of thought suppression. *Behavior Research and Therapy, 29*, 253-257.
- Devine, P. G. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology, 56*, 5-18.
- Davies, M. I., & Clark, D. M. (1998). Thought suppression produces rebound effect with analogue post-traumatic intrusions. *Behaviour Research and Therapy, 36*, 571-582.
- Fiske, S. T., & Cuddy, A. J. C. (2006). Stereotype content across cultures as a function

- of group status. In S. Guimond (Ed.), *Social comparison and social psychology* (pp. 249-263). New York: Cambridge University Press.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., & Glick, P. (2007). Universal dimensions of social cognition: Warmth and competence. *Trends in Cognitive Science, 11*, 77-83.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology, 82*, 878-902.
- Fiske, S. T., & Neuberg, S. L. (1990). A continuum of impression formation, from category-based to individuating processes: Influences of information and motivation on attention and interpretation. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (pp. 1-74). Vol. 23. New York: Academic Press.
- Förster, J., & Liberman, N. (2001). The role of attribution of motivation in producing postsuppressional rebound. *Journal of Personality and Social Psychology, 81*, 377-390.
- Frenkel-Brunswik, E. (1954). Further explorations by a contributor to "The Authoritarian Personality." In R. Christie, & M. Jahoda (Eds.), *Studies in the scope and method of "The Authoritarian Personality."* (pp. 226-275). New York: Free Press.
- Gaetner, S. L., Mann, J., Murrell, A., & Dovidio, J. F. (1989). Reducing intergroup bias: The benefits of recategorization. *Journal of Personality and Social Psychology, 57*, 239-249.
- Galinsky, A. D., & Moskowitz, G. B. (2000). Perspective-taking: Decreasing stereotype expression, stereotype accessibility, and ingroup favoritism. *Journal of Personality*

and Social Psychology, 78, 708-724.

Galinsky, A. D., & Moskowitz, G. B. (2007). Further ironies of suppression: Stereotype and counterstereotype accessibility. *Journal of Experimental Social Psychology*, 43, 833-841.

Glick, P., Diebold, J., Bailey-Werner, B., & Zhu, L. (1997). The two faces of adam: Ambivalent sexism and polarized attitudes toward women. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 1323-1334.

Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The Ambivalent Sexism Inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 491-512.

Glick, P., & Fiske, S. T. (2001a). Ambivalent sexism. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology* (pp. 115-188). Vol.33. San Diego, CA: Academic Press.

Glick, P., & Fiske, S. T. (2001b). Ambivalent stereotypes as legitimizing ideologies: Differentiating paternalistic and envious prejudice. In J. T. Jost & B. Major (Eds.), *The psychology of legitimacy: Emerging perspectives on ideology, justice, and intergroup relations* (pp. 278-306). New York: Cambridge University Press.

Glick, P., & Fisk, S. T. (2001c). An ambivalent alliance: Hostile and benevolent sexism as complementary justifications for gender inequality. *American Psychologist*, 56, 109-118.

Gordijn, E .H., Hindriks, I., Koomen, W., Dijksterhuis, A., & Van Knippenberg, A. (2004). Consequences of stereotype suppression and internal suppression motivation: A self-regulation approach. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 212-224.

- Gurwitz, S. B., & Dodge, K. A. (1977). Effects of confirmations and disconfirmations on stereotype-based attributions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 495-500.
- Harvey, A. G., & Bryant, R. A. (1998). The effect of attempted thought suppression in acute stress disorder. *Behavior Research and Therapy*, 36, 583-590.
- 林 文俊 (1976). 対人認知構造における個人差の測定 (1) ——認知的複雑性の測定についての予備的検討—— 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 23, 27-38.
- Hess, T. M., Hinson, J. T., & Statham, J. A. (2004). Explicit and Implicit Stereotype Activation Effects on Memory: Do Age and Awareness Moderate the Impact of Priming? *Psychology and Aging*, 19, 495-505.
- Hewstone, M., Macrae, C. N., Griffiths, R., Milne, A. B., & Brown, R. (1994). Cognitive models of stereotype change (5): Measurement, development, and consequences of subtyping. *Journal of Experimental Social Psychology*, 30, 505-526.
- Higgins, E. T. (1989). Knowledge accessibility and activation: Subjectivity and suffering from unconscious sources. In J. S. Uleman., & J. A. Bargh. (Eds.), *Unintended thought* (pp. 75-123). New York: Guilford Press.
- Higgins, E. T., Bargh, J. A., & Lombardi, W. (1985). The nature of priming effects on categorization. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 11, 59-69.
- Higgins, E. T., & King, G. (1981). Accessibility of social constructs: information-processing consequences of individual and contextual variability. In N. Carter & J. F. Kihlstrom (Eds.), *Personality, cognition, and social interaction* (pp.

69-112). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

池上 知子 (1983). 印象判断における情報統合過程の特性——認知的複雑性—
単純性との関連で—— 心理学研究, 54, 189-195.

伊藤 裕子 (1978). 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.

Johnston, L., & Hewstone, M. (1992). Cognitive models of stereotype change 3.
Subtyping and the perceived typicality of disconfirming. *Journal of Experiment
Social Psychology*, 28, 360-386.

Johnston, L., Hewstone, M., Pendry, L., & Frankish, C. (1994). Cognitive models of
stereotype change (4): Motivational and cognitive influences. *European Journal of
Social Psychology*, 24, 237-265.

上瀬 由美子 (1999). 偏見・ステレオタイプの解消のメカニズム 岡 隆・佐藤
達哉・池上 知子(編) 偏見とステレオタイプの心理学 現代のエスプリ,
384. (pp. 195-204) 至文堂

Kelly, G. A. (1955). *The psychology of personal constructs*. New York: W. W. Norton.

木村 晴 (2004a). 望まない思考の抑制と代替思考の効果 教育心理学研究, 52,
115-126.

木村 晴 (2004b). 未完成な思考の抑制とその影響 教育心理学研究, 52, 44-51.

木村 晴 (2005). 抑制スタイルが抑制の逆説的効果の生起に及ぼす影響 教育
心理学研究, 53, 230-240.

Kray, L. J., Thompson, L., & Galinsky, A. (2001). Battle of the sexes: Gender stereotype
confirmation and reactance in negotiations. *Journal of Personality and Social
Psychology*, 80, 942-958.

Krueger, J., Rothbart, M., & Sriram, N. (1989). Category learning and change:
Differences in sensitivity to information that enhances or reduces intercategory

- distinctions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 866-875.
- 久保田 健市 (1999). カテゴリー化とステレオタイプ・偏見 岡 隆・佐藤 達哉・池上 知子 (編) 偏見とステレオタイプの心理学 現代のエスプリ, 384. (pp. 15-23) 至文堂
- Lieberman, N., & Förster, J. (2000). Expression after Suppression: A motivational explanation of postsuppressional rebound. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 190-203.
- Lippmann, W. (1922). *Public opinion*. New York: Harcourt, Brace, Jovanovitch. (掛川 トミ子 (訳) (1987). 世論 (上・下) 岩波文庫)
- Macrae, C. N., & Bodenhausen, G. V. (2000). Social cognition: Thinking categorically about others. *Annual Review of Psychology*, 51, 93-120.
- Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Milne, A. B., & Jetten, J. (1994). Out of mind but back in sight: Stereotypes on the rebound. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 808-817.
- Manis, M., Nelson, T.E., & Shedler, J. (1988). Stereotypes and social judgment: Extremity, assimilation, and contrast. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 28-36.
- Marcus-Newhall, A., Miller, N., Holtz, R., & Brewer, M. B. (1993). Cross-cutting category membership with role assignment: A means of reducing intergroup bias. *British Journal of Social Psychology*, 32, 124-146.
- 増田 真也 (1998). 曖昧さに対する耐性が心理的ストレスの評価過程に及ぼす影響 茨城大学教育学部紀要, 47, 151-163.
- Mauer, K. L., Park, B., & Rothbart, M. (1995). Subtyping versus subgrouping processes in stereotype representation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69,

812-824.

Monteith, M. J., Sherman, J. W., & Devine, P. G. (1998). Suppression as a stereotype control strategy. *Personality and Social Psychology Review*, 2, 63- 82.

Monteith, M. J., Spicer, C. V., & Tooman, G. D. (1998). Consequences of stereotype suppression: Stereotypes on AND not on the rebound. *Journal of Experimental Social Psychology*, 34, 355-377.

Moreno, K. N., & Bodenhausen, G. V. (1999). Resisting stereotype change: The role of motivation and attentional capacity in defending social beliefs. *Group Processes and Intergroup Relations*, 2, 5-16.

森 津太子 (1997). 対人判断における社会的カテゴリー適用可能性の効果とその個人差 性格心理学研究, 5, 17-37.

Muraven, M., Tice, D. M., & Baumeister, R. F. (1998). Self-control as limited resource: Regulatory depletion patterns. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 774-789.

Neuberg, S. L., & Fisk, S. T. (1987). Motivational influences on impression formation: Outcome dependency, accuracy-driven attention, and individuating processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 431-444.

Neuberg, S. L., & Newsom, J. T. (1993). Personal need for structure: Individual differences in the desire for simple structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 113-131.

Newman, L. S., Duff, K. J., Hedberg, D. A., & Blistein, J. (1996). Rebound effects in impression formation: Assimilation and contrast effects following thought suppression. *Journal of Experimental Social Psychology*, 32, 460-483.

Nosek, B. A., Banaji, M. R., & Greenwald, A. G. (2002). Math = male, me = female,

- therefore math \neq me. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 44-59.
- 沼崎 誠・小野 滋・高林 久美子・石井 国雄 (2006). Sequential Priming によるジェンダー・ステレオタイプの活性化の研究 首都大学東京・東京都立大学, 人文学報, 369, 21-52.
- Oe, T., & Oka, T. (2003). Overcoming the ironic rebound: Effective and ineffective strategies for stereotype suppression. In K. S. Yang, K. K. Hwang, P. B. Pedersen, & I. Daibo (Eds.), *Progress in Asian social psychology: Conceptual and empirical contributions* (pp. 233-246). Westport: Praeger.
- 大江 朋子・岡 隆・横井 俊 (2006). ステレオタイプ抑制の動機と方略:その分類と関係 社会心理学研究, 22, 33-47.
- 大橋 正夫・三輪 弘道・平林 進・長戸 啓 (1973). 写真による印象形成の研究 (2) : 印象評定のための尺度項目の選定 名古屋大学教育学部紀要, 20, 93-102.
- 及川 昌典 (2005). 意識的目標と非意識的目標はどのように異なるのか? 教示またはプライミングによるステレオタイプ抑制の効果 教育心理学研究, 53, 504-515.
- 岡 隆 (1999). 概説/ステレオタイプ、偏見、差別の心理学 岡 隆・佐藤 達哉・池上 知子 (編) 偏見とステレオタイプの心理学 現代のエスプリ, 384. (pp. 5-14) 至文堂
- Park, B., & Rothbart, M. (1982). Perception of out-group homogeneity and levels of social categorization: Memory for the subordinate attributes of in-group and out-group members. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 1051-1068.
- Rassin, E. (2005). *Thought suppression*. Oxford: Elsevier.
- Rudman, L. A., Greenwald, A. G., & McGhee, D. E. (2001). Implicit self-concept and

- evaluative implicit gender stereotypes: Self and ingroup share desirable traits. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 1164-1178.
- Rudman, L. A., & Phelan, J. E. (2010). The effect of priming gender roles on women's implicit gender beliefs and career aspirations. *Social Psychology*, 41, 192-202.
- Ruscher, J. B., & Fiske, S. T. (1990). Interpersonal competition can cause individuating processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 832-843.
- 坂元 章 (1991). 熟知性・好意性・認知的複雑性——相互作用仮説と警戒仮説との統合—— 心理学研究, 61, 392-399.
- 坂元 章・沼崎 誠 (1989). 評定時間の長短が Rep テストによる認知的複雑性の評定値に及ぼす効果 心理学研究, 60, 316-319.
- 佐久間 勲・岡 隆 (1999). 知覚的バイアスとステレオタイプ形成——同化効果と対比効果による変動性の知覚の変化—— 実験社会心理学研究, 39, 16-29.
- Sparrow, B., & Wegner, D. M. (2006). Unpriming: The deactivation of thoughts through expression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 1009-1019.
- Steele, J. R., & Ambady, N. (2006). "Math is hard!" The effect of gender priming on women's attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 42, 428-436.
- 鈴木 淳子 (1991). 平等主義的性役割態度: SESRA (英語版) の信頼性と妥当性の検討および日米女性の比較 社会心理学研究, 6, 80-87.
- 鈴木 淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65, 34-41.
- Swim, J. K., Aikin, K. J., Hall, W. S., & Hunter, B. A. (1995). Sexism and racism: Old-fashioned and modern prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 199-214.
- 田戸岡 好香・村田 光二 (2010). ネガティブなステレオタイプの抑制における

- リバウンド効果の低減方略: 代替思考の内容に注目して 社会心理学研究, 26, 46-56.
- 田戸岡 好香・村田 光二・石井 国雄 (2014). 嫉妬的ステレオタイプの抑制における代替思考の効果 対人社会心理学研究, 14, 35-44.
- 高林 久美子 (2007). 自己への脅威が女性に対する偏見に及ぼす効果: 両面価値的性差別理論からの検討 社会心理学研究, 23, 119-129.
- Tajfel, H. (1969). Cognitive aspects of prejudice. *Journal of Social Issues*, 25, 79-97.
- Tajfel, H., & Wilkes, A. L. (1963). Classification and quantitative judgement. *British Journal of Social Psychology*, 54, 101-114.
- Tripodi, T., & Bieri, J. (1964). Information transmission in clinical judgements as a function of stimulus dimensionality and cognitive complexity. *Journal of Personality*, 32, 119-137.
- Weber, R., & Crocker, J. (1983). Cognitive processes in the revision of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 961-977.
- Wegner, D. M. (1994a). Ironic processes of mental control. *Psychological Review*, 101, 34-52.
- Wegner, D. M. (1994b). *White bears and other unwanted thoughts: Suppression, obsession, and the psychology of mental control*. New York: Guilford Press.
- Wegner, D. M., & Erber, R. (1992). The hyperaccessibility of suppressed thoughts. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 903-912.
- Wegner, D. M., Schneider, D. J., Carter, S. R., & White, T. L. (1987). Paradoxical effects of thought suppression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 5-13.
- Wyer, N. A. (2007). Motivational influences on compliance with and consequences of

instructions to suppress stereotypes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 43, 417-424.

山本 真菜・岡 隆 (2010). ステレオタイプの意識的抑制と非意識的抑制の相違——日本人女子大学生ステレオタイプを用いた追試—— 日本大学心理学研究, 31, 133-140.

山本 真菜・岡 隆 (2011). ステレオタイプ抑制におけるサブタイプ活性化の役割 日本大学心理学研究, 32, 73-79.

山本 真菜・岡 隆 (2012). 中国人ステレオタイプ抑制におけるサブタイプ活性化の役割 日本大学心理学研究, 33, 71-76.

山本 真菜・岡 隆 (2013). サブタイプの確立度とステレオタイプ抑制による逆説的効果との関係 日本大学心理学研究, 34, 1-9.

山本 真菜・岡 隆 (2014). ジェンダーステレオタイプ抑制におけるサブタイプ活性化の役割 日本大学心理学研究, 35, 11-20.

山本 真菜・岡 隆 (2015). 認知的複雑性とステレオタイプ抑制による逆説的効果との関係 日本大学心理学研究, 36, 8-15.

山本 真菜・岡 隆 (印刷中). ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差：認知的複雑性との関係 社会心理学研究

Yzerbyt, V. Y., Coull, A., & Rocher, S. J. (1999). Fencing off the deviant: The role of cognitive resources in the maintenance of stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 449-462.

Zoë, R., & Hewstone, M. (2001). Subtyping and subgrouping: Processes for the prevention and promotion of stereotype change. *Personality and Social Psychology Review*, 5, 52-73.

謝 辞

本論文を提出することができたのは、多くの方からのご指導ご支援のおかげです。ここに心より感謝の意を表します。

大学院在学中の指導教官である日本大学文理学部の岡隆先生には、研究活動全般にわたってご指導ご鞭撻と温かい激励をいただきました。心より感謝申し上げます。先生からは、研究の具体的なご指導だけでなく、多くの考え方を教えていただきました。先生から学ばせていただいたこと、数々のお言葉や姿勢を指針として、これからも真摯に研究を続けていく所存です。また、本論文の主査として丁寧なご指導と貴重なご助言をいただきました。深く感謝の意を表します。

日本大学文理学部の坂本真士先生、ならびに日本大学文理学部の羽生和紀先生には、本論文の副査として貴重なご指導とご助言、温かな激励をいただきました。深く感謝申し上げます。また、日本大学文理学部心理学科の先生方には、実験実施などへのご助力や研究に対する貴重なご指導ご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。学部在学中の指導教官であった、日本大学文理学部の長嶋紀一先生には、ご指導ご鞭撻と温かい激励をいただきました。心より感謝申し上げます。

岡研究室の皆様、坂本研究室の皆様には、リサーチミーティングなどを通して貴重なご指導ご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

日本大学大学院文学研究科心理学専攻の院生室の皆様には、研究に対する貴重なご指導ご助言や実験実施へのご助力をいただきました。感謝の意を表します。白川真裕氏、相澤裕紀氏、望月正哉氏には、幾度もご相談をさせていただき、多くの貴重なご指導ご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

川崎弥生氏，山田涼馬氏，山川樹氏，芳賀道匡氏，村中昌紀氏には，多くのご助力をいただきました。心より感謝申し上げます。博士前期課程からの同期である，高橋望氏，本山友衣氏，福島由衣氏には，貴重なご助言をいただき，時には励ましの言葉をいただきました。心より感謝申し上げます。玉木賢太郎氏には，幾度もご相談をさせていただき貴重なご助言をいただいたことに加え，本論文を精読していただき，重要なご助言と修正をいただきました。心より感謝申し上げます。東洋大学の小林麻衣氏には，研究や大学院生活において，多くのご助力をいただきました。心より感謝申し上げます。青山学院大学社会情報学部助教の勝谷紀子先生，東京電機大学情報環境学部助教の木村敦先生には，学術的なご指導ご助言にとどまらない多くのご支援をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

ここまで研究活動を応援してくれた家族に感謝します。自分のやりたいことを続けさせてくれて，背中を押してくれて，時には助言をしてくれ，落ち込みやすい私の話をよく聞いてくれて励ましてくれました。心より感謝します。

平成 28 年 1 月

山本 真菜